贈正四位賀茂真淵翁著

賀茂真淵全集

第五

121.24 ka KK

賀茂眞淵全集第五

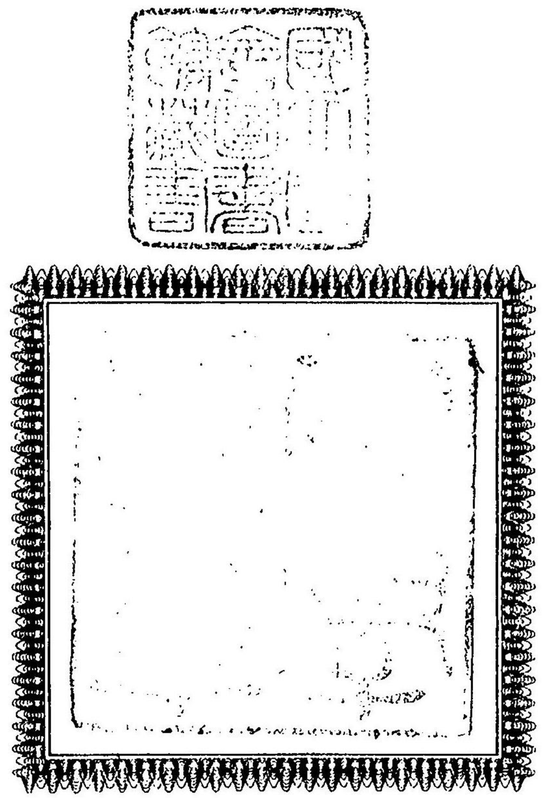
凡例

一本集には『源氏物語新釋』を收めたり、

一『源氏物語新釋』は、松井簡治氏藏本を本とし、德川伯爵家所藏眞淵翁自筆本を影寫せるによりて校訂し、更に井上頼圀翁所藏寛政三年八月三日春海、寛政十二年閏四月廿七日嘉郷等の奥書ある一本を以て對校增補したり、

一本書はもと北村季吟の湖月抄を本として、其の所説を取捨し、更に翁の説を加へられたるものなれば、湖月抄の説を然ながら用ゐられたる箇所頗る多し、見ん人怪しむことなかれ、

一翁の自筆本と、前記異本二種との間には、其の所説頗繁簡の差あり、これ門人等が翁の所説を注記したるものなるにより、甲乙の間、自ら異同あるを免かれざるなり、然れば今は自筆本のみによりて取捨することなく、春海等の師説として掲げたるものは、自筆本に載せざるも



国立国会
25.3.31
図書館

112768

のも悉採錄したり。

一春海等の自說を注記したるもの又すてがたきもの多きを以て【　】を附して之をとれり、

一手習の卷本集に收めたるものは、全く湖月抄の、本文の詞に人物名を注記せるものを拔萃せるに止まり、翁の所說として見るべきものなし、井上本の奧書によるに、千蔭の藏本は全く手習の卷闕けたりといへり、然ればこの卷は新釋にはあらざるべしといふ說ありて、げにもとはおもはるれど、ゑばらく舊本のまゝに採錄したり。

賀茂眞淵全集第五

目次

源氏物語新釋總考……四四一頁
源氏物語新釋例……四四二五
源氏物語新釋……四四二八
桐壺……四四二八
箒木……四四七六
空蟬……四五四五
夕顏……四五五六
若紫……四五九四
末摘花……四六二四
紅葉賀……四六六〇
花宴……四六九一
あふひ……四七〇三
さか木……四七四三
花ちる里……四七八一
須磨……四七八四
明石……四八一四
澪標……四八四二
蓬生……四八六三
關屋……四八七七
絵合……四八八一
松風……四九〇〇
薄雲……四九一六
槿……四九三三
少女……四九四七
玉鬘……四九八三
初音……五〇一九
胡蝶……五〇三五
螢……五〇五二
常夏……五〇七〇
篝火……五〇八八
野分……五〇九一
みゆき……五一〇四
藤袴……五一二二
眞木柱……五一三二
梅枝……五一五四
藤裏葉……五一七〇
若菜上……五一八七

若菜下……五二五〇
柏木……五三〇六
横笛……五三二三
鈴虫……五三三二
夕霧……五三四〇
御法……五三七五
幻……五三八一
匂宮……五三九二
紅梅……五四〇二
竹川……五四一三
橋びめ……五四三九
椎本……五四六二
總角……五四八六
早蕨……五五〇九
やどり木……五五二一
東屋……五五七二
浮舟……五六〇九
蜻蛉……五六四二
手習……五六八二
夢のうきはし……五六九六

賀茂眞淵全集第五目次終

源氏物語新釋惣考

○源氏

國史又新撰姓氏錄などを案るに嵯峨天皇弘仁五年に皇子信公以下男女八人に始てみなもとの朝臣の姓氏を賜りて源氏となし左京に貫ね玉ひしより皇子に氏を賜るは專ら源なり（諸抄に此時三十餘人に始て源氏を賜はるると書るは委しからす最初八人にて次〳〵に三十餘人にはいたれるなり）

○物語ふみ

物語とは實錄ならで人の口づから傳へたる事を誠にまれ僞にまれ人のかたれらんまゝに書付たるといふ意なり先物語といふ事を心得て後ふみの意をいふべし然るを六百年ばかりよりの歌學者流伊勢物語などを實錄の如くおもへるより其說まち〳〵に誤れり（これ伊勢物語右意といふに委しくしたりひらきて見るべし）此源氏物語もいづれの御時にか有けむと書そめ卷の終にはいひ傳へたる物語のまゝに書付侍るてふことわりをしるして先は昔物語なり伊勢竹とりうつほおちくぼ其外物語てふふみは皆しかりそれが中にひとり榮花物語は實錄なるを物語と書るは時をさすのはゞかりあれば記者の用意成べし（されど是またさま〳〵の書より拔て後につくれる物成べし安藤爲章か考あきらかなり）されば此源氏も先は昔物語として昔延喜の御時よりの事の樣に書たれ其實は式部のある時に見聞ことを專らとして近き代々の事をもかねて書る物と見ゆ朱雀院冷泉院など御名をあらはしたるは唐詩に漢帝をもて時を刺れるが如くなりされどもまこと延喜などの御事ならねば前後紛々としていづれにもかたよらず作り事のさまを見せたり伊勢物語は右大將常行紀有常其外名を顯したる人をば官位時世もその歌も詞も其人の實にたかへて書それとさすべき業平をば只在五中將といふことばを一つ二ついひておぼめいて書たるぞ却て業平の物語なりけるさるも猶業平の事實にはあらぬさまに詞をかへ歌をとりかへなどせり此源氏物語はかの伊勢物語をひろく書のべたる樣の物なりと荷田の東万呂のいひけんげにさもやと覺ゆる事多し且人々はかの朱雀院など書るに泥て其御時の事を證せんとすれどもとよりさる事ならねば惣て前後さだかに當れる事なし假令當時の人のうへを古人の名をかりて書にもまた〳〵其人の有樣をいひてはしるき事なれば源氏の君をば今の二條關白殿伊周

公などに過にし高明公などをとりそへて書るなるべし

○此ふみ書る人

諸説に紫式部の書たりとする事疑ふべからず紫日記云左衛門督(公任)あなかしこ此わたりに若紫やさぶらふとうかゝひ玉ふに源氏に似るべき人も見えぬを云々此故に河海抄に紫の上の事を一部にわたりてよく書なしたれば藤式部をむらさき式部と呼それによりて公任卿もやがて若紫ともたまひし樣にかゝれたり誠にさる事なり(藤式部と云は唱へ幽玄ならずとて藤の花の色につきて紫式部と喚玉へるといひ又はじめ鷹司殿の女房を后宮へ參らせけるときわがゆかりのものなりあはれとおぼしめせと申し玉へるより紫とはよばれたるといふも附會と見ゆ)更級日記に紫の物語と有も此物語の事なればむかへて知べし又紫の日記に源氏の物語内の上の御まへに有時の仰又は道長公の歌なども皆式部が作成によれる詞なり(此日記の文委は次に出す)

日記云源氏物語后の御まへに有を殿御らんじて例のそぞろことゞも書きたるついでに梅の下にしかれたる紙に(下に敷たる紅梅の紙をいふなるべし)かゝせ玉へる

すき物と名にしたてれば見る人のをらで過るはあらじとぞおもふ(道長公)

式部返し

人にまだをられぬ物をたれかこのすき物ぞとは口ならしけむ

此詞によるに此物語御まへに有を御らんじて、此歌あれば卽式部をさしたる事明らかなり

日記又云内のうへ(一條院)の源氏の物語人によませ玉ひつゝきこしめしけるに(一條院の仰ごと)此人は日本紀をこそよみ玉ふべけれ誠に才有べしとのたまはせけるをふと(左衛門の内侍)おしはかりにいみじうこそ才あると殿上にいひちらして日本紀のつぼねとぞつけたりける

是また式部が作なる證うたがひなしまたこのふみ書たる事

宇治拾遺物語云越前守爲時源氏は作りたるなりこまかなる事どもを娘にかゝせたりけるとぞ后宮(上東門院)此事を聞しめして娘をめしいだしたりける此源氏作たる事樣々申つたへたりまゐりて後つくりたるとも申いづれかまことならん云々

凡文作人くさ〴〵の心得和漢ともに有て一章をかへ一句をかへがたき所〳〵多き物なり若は父しか〳〵の事作らんなどの大樣を書はさる事も侍らめど彼は父が心より出べからぬも心おきて全く此物語に合文體も同筆うたがひなし其才幼より神妙に成人の後も學このめる事日記に見ゆ又人の心のくまゞ〳〵女の用意などかくまでつくす事男にては翁いたるまじき事なり爲章がいひたる誠によく心を得たる物なりされば式部が作と定むべくば宇治物語は是人のかたれるがまゝにしるされたる物なればとる事とるまじき事多く無名抄云大齋院(村上女十宮選子内親王)より上東門院へつれ〴〵なぐさむべきもの語やさむらふとゝ尋まいらせ給ひけるに何をかまいらすべきと仰合せられければ珍らしき物は何か侍べき新しく作りてまいらせ給へかしと申ければさらば作れと仰られけるをうけ給りて源氏をつくりけるこそいみじくめでたく侍れといふ人侍ればなほいまだ宮仕もせで里住に侍りけるをりさる物語作りいでたるによりてめし出られてそれより紫式部といふ名は付きたると申いづれかまことにて侍らん

日記に一といふ文字をだに書いださず御屏風の紙に書たる事をだによまん顏をし侍らず云々かく用意ふかき式部また物語の御前にありといへる樣などを考れば此時新叅なるべきを右の如くしたりかほしてみづから作らんといはんやたとひ仰ごと有とも其任にあたるべからず日記をよく見て式部が心もちひを知たるが上おのづから右の說のあしきを知べし

又或說に式部石山寺にこもりて此京を臨て須磨明石の卷を先書てそれより他の卷を書たり云々

是は甚しき僞說なるべし此物語は紫のものがたりといひてわかむらさきの上の事を本とせるを須磨明石の卷はそれによりたる事にもあらずかたはら成事どもなり文章をみづから書ぬ人は何の主意もわきまへずして不意にいへるなるべしすべて何れよりとはしれがたき事なり強ていはゞ本意をはゝき木の品定に置て先桐壺の卷よりこそ書つらめ文體も桐つぼぞ最初なりと見えたり且石山寺に詣てかの調度とて今有物を見れば皆後世の物なりけりと物侍心得たる人々皆いへりよく見ずともさこそとおもはるゝなりさて此物語講するにはもみぢの賀などの祝有卷よりすといへども猶よくきかん人の爲には桐壺の卷よりとくべきなり此卷にもいはひもまじれるをや

又の說に法成寺入道關白奥書をかゝれて云此物語世に皆式部が作とのみおもへり老比丘筆を加ふる所なり

此關白(道長公)は寛仁二年に五十四にて入道したまひ法成寺にこもりて佛道を行給ふ入道して是に筆加へ給はんもいかにぞや且式部をおとしめて自らほこり給ふ筆意いかなるをこの人かさる事をかゝむかゝる妄說は式部が爲よりも入道殿の御爲にもうき事なりと爲章はいへり此論さる事なり然るに或人のいへるは此老比丘はもし觀音を云にや佛家の人に問まくなどぞ侍りしいかさまにも觀音をいはゞもとよりの心はいかがながらみづからほこり給はんよりはゝさりぬべしともあれ是又論にたらず

○氏やから

父は越後守藤原爲時なり(爲時ぬしは閑院冬嗣公六男贈太政大臣良門公の後なり此人後拾遺集に二所見えたり又新勅撰に藤原ののぶのりが越後守にて父がもとへ行たる事見えたれば越後守成べし或說には越前守と侍り任をうつされしか又は誤りてかく書るか猶考べし)其子四人あり惟規惟通定遊(阿闍利)式部などなり式部の夫は左衞門權佐宣孝成しが長保三年四月廿五日卒せりと大系圖に見えたり

○出てつかうまつれる時

日記云寛弘五年內の上の源氏物語人によませ玉ひつゝ聞しめしける云々

又云源氏物語御前にあるを殿御らんじて云々

又九月中宮御產の事を書る所に(中宮廿一歲是後に上東門院と申)また見奉りなるゝ程なけれどたぐひなくいみじと心一つに覺ゆ(一條院五年永延二年永祚一年正曆五年長德四年長保五年寛弘八年三條院御在位五年長和五年是を照して見てその時節をおくに書るを知べし)

是式部今まいりのほどなり

同十二月廿九日の詞にしはすの廿九日にまいる(新參の間は里がちなるか)始て參りしも今夜の事ぞかしいみじくも夢路にまどはれしかなどおもひいづればこよなく立なれにけるもうとましの身のほどや云々

同六年日記にをとゝしの夏の頃より(をとゝしは寛弘四年に當る且夫卒ての後六年めなり今年は八年になる)樂府といふふみをぞしどけなくをしへ聞えさせ侍るもかくし侍り

右の條々を考るに式部が夫(宣孝なり)は長保三年四月卒四年五年寛弘元年(今年改爲寛弘)二年三年四年の夏の頃より樂府を敎奉れど五年九月に見奉りなるゝ程なきにと侍れば長保三年四月(夫卒)より四年ばかりやもめにて居て寛弘二年の十二月廿九日に出て仕へたるか右にいへるやもめ住のつれ〴〵なるうちに書たるを出仕して漸に白氏文集など敎奉る程になりて五年の春わたりに奉りたる成べし凡此あまたの卷々一通りうちかゝむだに容易には成かたかるべしいかに才ありとも作らむには數年を經べし大齋院の御もとめにて書たりなどいふはほどをもわきまへぬ說なり若又參らざる以前宮中の事をくはしくいかでしらんとおもふ人も侍らんが筆木の卷に公私の事をも夫のいひ合又少も才ある人は見聞事のおのづから心にとまるなど樣に書るを以て見ればまいらずとも知へきを況や學ある人の常としておのが身におはぬ天の下の政をもかしこき上一人の御事をも臣民のうへをもかうがへしれる事世人にことなり又おのづから見しこともなどかなからん

○學の才

日記云此式部丞(式部)といふ人のわらはにて史記といふふみよみ侍りし時聞ならひつゝかの人は(惟親)おそくよみとりわするゝ處をもあやしきまてぞさとく待りしかば文に心いれたるおやは日をしうをとこにてもたらぬこそ幸なかりけれとて常になげかれ侍り

又云さるはあやしう(式部か里の學窓のさま)墨みすゝけたる曹司に筆のこと和琴しらべながらこゝろに入て雨のふる日ことぢ倒せなどもいひ侍らぬまゝにちりつもりてよせたてたりしづしと柱のはざまにくびさし入つゝ琵琶もひだり右にたて侍り大成る厨子一よろひにひまもなくつみてはべる物ひとつにはふる歌物語のえもいはず蟲のすに成にたるむづかしくはひちればあけて見る人も侍らずかたつかたに文どもわざとおきかさねし人も侍らず成にし後手ふるゝ人もことになしそれらをつれ〴〵せめてあまりぬる時ひとつふたつ(一卷二卷)いでゝ見侍るを女房(式部か召仕)集りておまへはかくおはすれど御さいはひなきなりなでう女がまんなふみはよむむかしは經よむをだに人は制しきとしりうこちいふを聞侍るにも云(後)々又云宮の御まへにて文集の處〴〵よませたまひなどしてさるさまの事しろしめさせまほしげにおぼえたりしかばいと忍びて人のさむらはぬ物のひま〴〵にをとしの夏ごろより樂府といふふみ二卷をぞしどけなくをしへ聞えさせて侍るもかくし侍り

此のごとくなれば和漢の學にともしからず琴なども上手

なる事或女房のならひに里へ行たる歌もあり

○川意

日記云すべて人をもどくかたはやすくわが心を用ひん方はかたかべいわざをさはおもはで先われさかしに人をなきになし世をそら成程に心のきはのみこそ見あらはるれ

又云やゝもせばこしはなれぬばかりをれかゝりたる歌をよみいで得もいはぬよしばみごとしてもわれかしこにおもひたる人にくゝもいとほしくもおぼえ侍るわざなり

又よろづつれ〳〵なる人のまさりし事なきまゝに古きほんご引さがしおこなひがちに(佛道修行ぶりする女)くちひゞらかしずゞの音高きなどいと心づきなく見ゆるわざなりとおもひ給へて心にまかせつべきことをさへわがつかふ人のめにはゞかり心につゝむまして人の中にまじりてはいはまほしき事も侍れどいでやとおもほえ心うまじき人にはいひてやくなきなるべし物もどきうちし我はとおもへる人のまへにてはうるさければ物いふ事ものうく侍ることにいとしも物のかた〳〵得たる人はかたしたゞわが心のたてたる筋をとらへて人をばなきになすなめりそれ心より外のわが面影をはづと見れどえさらずさしむかひまじりゐたることだにありしか〳〵さへもどかれじとはづかしきにはあらねどむづかしとおもひてばけられたる人にいとゝ成はて侍ればかうはおしはからざりき(式部にいまたいと面せざる人の推量は)いと艶にはづかしく人に見えにくげにぞそは〳〵しきさまして物語このみよしめき歌がちに人を人ともおもはずねたげに見おとさん物となむ皆人々いひおもひつゝにくみしを見るには(式部に逢ては)あやしとまでおいらかにこと人かとなんおぼゆるとぞみないひ侍るにはづかしく人にかうおひそけものと見おとされにけりとはおもひはべれどたゞ是ぞわが心とならひもてなし侍るありさま云々

又云宮のおまへもいとうちとけては見えじとなんおもひしかど人よりげにむつまじう成にたるこそとのたまはするをり〳〵侍りくせ〳〵しくやさしだちはぢられ奉る人にはそばめたてられて侍らまし

又云さまようすべて人はおいらかに少し心おきてのどやかにおちゐぬるをもとゝしてこそゆゑもよしもをかしくうしろやすけれ

又云をとこだにさえがりぬる人はいかにぞやはなやかならずのみ侍るめるよとやう〳〵人のいふも聞とゞめて後一といふ文字をだに書わたし侍らずいと手づゝに淺ましく侍りよみしふみなどいひけん物めにもとゞめず成て侍りしにいよ〳〵かゝる事聞侍りしかばいかに人も傳へ聞てにくむらむとはづかしさに御びやうぶのかみに書たるをだによまぬがほし侍りし

(左衛門の内侍の日本紀の局と名付し事)

又云などかかならずしもおもにくゝ引入たらんがかしこからん又などてひたゝけてさまよひさし出べきぞよきほどにをり〳〵の有さまにしたがひて用ひんことのいとかたきなるべし

是は式部が心おきてなり此外道長公の懸想をなよびやかにいひのがれ又宮人のまじらひの樣など日記のやうを物語と合て見るべし

又物語に紫の上のらう〳〵しくおほとかに心やすき物からおもりかに用意ふかく明石の上の心高き物からよくへりくだり花散里の心しづかに物ねたみせずされば紫上と心しらひのむつまじきあさがほの院のふかく名をゝしみ玉かづらの上の人の懸想をさまよくいひのがれ總角の君の父みやの遺言をまもり空蟬の強て貞節をなし末摘花の

すさめられぬるものから心永く忍び過して待えたる是らみな婦德をあらはしてはやく品定にすきたはめるをしりぞけまめなるをあげてその外よきかたあればあしき事あるをあげその害をあらはしたるは古へ人をいふやうにおもへど實は式部が心をしるしたるなりこの心をもて一部をかけるを具文華蕩興をもて論せんは紛を見て心を慰るがごとし式部が本意にたがふべしかくいへばはた儒佛の道を專ら引ていふ人も侍れどそれはまた過たりおのづから何の道にも其心の相似たる事はかくばかり多くの卷々には有事なりなづむべからず

○文のさま

大よそは傳にてそれが中に生れぬさきよりもよこざまよりも又後をさきにも前を後にも書たるも有詞おもむきはいせうつぼおちくぼなどの物語にあるをとりかへたると見ゆるも多かれどそれらは皆ことせまくたくみもさる事もなきを是はいと〳〵大きにふかくたくみかつは敎と成べき所とも侍るはおほむね異朝の書などにならへるものなりされば序跋記傳書等の諸體そなはり波瀾頓挫照應伏案等の文の法ありまた側雲隔句繁文簡易或は雙ぺいひて下に一つ〳〵に承てとき或は至尊皇子貴賤の朝臣或は后

宮大中下の臣下の女或は儒或は僧或は都鄙山林市朝をあげそのうち惣ては溫厚和平の氣象にして文體雲上に花美なり餘情風景は卷々にあれどその人其所の樣をわかち文幾寛にしてこまやかに巧みなり古語を用ふるは韓氏か手に似て悲哀をいへるは白氏が風あり簡にして婉曲なるは左傳事を尋るは史記に似たる所々も侍りされどしかも漢なる所見えず本朝の語意にうつしてよむ人をしてあかざらしむ中に品定は妙なる物なり論破論(承)論腹論尾先を廉にして後細に入り繁より簡に歸し鄙より雅にうつる其體いひつくしがたし一部の骨體にして多くの男女の品此うちより出るなり此莫才をもて男なりせば實錄をあらはし萬世の鏡ともなすべきを父の嘆のごとく一たびは惜むべし然れども歴史を見るに續日本紀以下は漸に世くだり人へつらへば正史をかゝば罪うる事なるべし幸に女にして此書をあらはし自後に上一人よりの心おきてとなれるものなり

○本意

かけまくもかしこき上一人神の御たねにして凡下のはかり奉るべきにあらぬ叡慮といへどもおのづから世の中のうきにしほしみ給はぬ御いたりは人の心をよくくみしろしめす事も有がたかるべしもし左樣の天子ましまして寵愛桐壺の更衣のごとくあらん時臣民まで心うごき事に及び其ぬたみのつもり更衣の命におよひ終に天子の御なげきと成る又藤壺と源氏とおなしつらにめでおぼして幼少といへども別なきによりて終に戀情のはしをおこし其外宮中おきて正しからざればおもはぬまぎれ出來て御身の爲も臣の爲もはて〳〵はよろしからず況や私の家々の事にも人の交らひにも各いはでおもふ事の多かるをいはざれば各自のみのやうにおもはれて人心のほどしりがほにしてしらざる物なり和漢ともに人を敎る書丁寧にとくとむかふ人のいはでおもふ心をあらはしたる物なし只此ふみよくその心をいへり又源氏の密通にて冷泉院の生れ給ひしかも源氏うしろみしたまふもし此君藤原氏にしもあらば皇の御つぎは絶ぬべししばらく其まぎれは人齒をくひしばるといへどもともに皇子皇女をとり合てかりにも他姓をせざるはしかしながらこゝろしらびせるものなりさて終に朱雀の神系にしもかへし奉りたるは和文の諷刺ことに女の筆にてなだらかなる物から此意をよくかうがへん人は身をふるはすべき物なり是もと宮中のおきて正しからず人情をよくしろしめさぬ故にまぎれあめり是を一たび見そなはすべらきいかでか御心おかせ給はざらんや此外臣下にいたりても准て家々の心おきて人々の用意と成べし或は婚亂の媒となれとてにくむ人も侍れどさしもあらず人情の分所故是を見るにうまずしてよく見れは其よしあし自然に心よりしられて男女の用意となれる事日本の神敎その物を以て諷喩するなり日本紀をよみしにやと仰られしはさるゆゑにや委しきことはつみていふにいとまあらずいかで此心をもて是を見む人あらばや且此いへる事ども多くは荷田東方呂安藤爲章が論をとれりしかれどもおのがおもふ心も侍ればまた〳〵かれにのみもよらす大かたの筋聞えんためとてはし〳〵をしるし侍る物なりその條々にもおのづからいへる事をまつべし

源氏物語新釋例

一此物語の數々の注書は河海抄などに見えたれば更には擧す然れどもそれが中に僻意におもしろしとおもふはとりいかにぞや覺ゆるはもらしつ其論は繁多なればいひがたし且それとり用るも抄の名をば顯さず見知人はしるべけれはなり又荷田春滿(京羽倉齋)釋契沖難波安藤爲章(水戸是は七論にいへるところのみ)等が新意を專ら擧或は自の僻意をも加へたれど是はた敢て名をしるさずことにふれては顯はすも有べし世にいはゆる秘說或は法神官僧等の繁論ある物は別に委しくしるして一卷とせり故に本文には略して注せり

一衣服の事も繁文なるは又別卷にしるせり

一諸抄におほん時といふ注には日本紀云雄々或はおよすけの詞を萬葉云助及なとの類あまた注せれど十か七八は日本紀萬葉其外の古書にも見えざるあり故に是等は一つもとらず若古書に通せぬ人は今の日本紀等の脫文にやと却て古書をうたがふべけれどもとより日本紀萬葉等に有つべき事にあらず其引用る意も違たり是らのいつはりをよきあたりの抄に書給ふべきにはあらず好

事のもの其抄に傍注せるか又は古學しらぬもの丶幸によきあたりにめされて聞えしを貴人は正直におほして本書をばおきて記し給ふ故に違多にや侍らん又つと御むねふさかりといふに日本紀に云集又都の字なども注せり是は日本紀にはあれども集はつどふと訓してつとのみよめる事なければ又おもひまどへる物なり或は異國の書を引たるにも其類あり故に此類は皆とらず然ればことにふれてたま〳〵舉論するもあれどそこにはかつ〳〵ことわるなり

一或抄に引たる歌を考るに出所もなく且其歌必古歌にあらずと見ゆる有けだし時によりて好事のもの丶僞作なるべしそれをばかつ〳〵ことわるもあり又のぞきて引ざるも有べし

一假字の事此物語つくれる比まではいにしへを存せりと見えていひかけたる語などに古注に違へる物見えず故に今是を書にも和名抄以上上古まで一同なる假字を用ひたり凡假字は語の本なり違ふ時は古語の釋に誤り出きれば大切なり後世文字の音によりて假字を定めんとするは古語の趣を知らぬもの丶なす事なり後世にならひてうたがふべからず

一語釋の事諸抄には五音横竪の通のみ見えたり凡古語の例さのみにはあらず荷田春滿古書を通考して五十字文の例をたつ其中にかつ〳〵舉いは丶いはゆるかな返し最多しそれは二言をつ丶めて一言にいふを約言といふ譬ばあはうみ淡海のハウを約むればフ一言となる故にあふみと書る類なり又一言を延て二言に唱ふるを延言といふ譬は蹴速をクエハヤと訓せる類なり故に此等をばハフの約ンなりケの延クエなりとのみしるせり又清濁音韻の通例あり婆毘夫倍暮の濁音は麻味武迷母の清音に通ず（此外五十音の内平音の濁音と二十音の清音に通する例あり右二音の通ひをおしてしるべし）たとへば頭の加夫利ものを加武里ものといふ夫と無の清濁通なり是異朝の音にていはゞ夫は漢音無は吳音にて卽共に濁音なるが和に唱ふる所の清濁わかさればなり此類近く文字にていへば馬を婆とも麻とも母を暮とも毛とも唱ふる類おのづから和語にも侍りゆゑに神奈備かみなみともさびしきをさみしきともいへるは同意にて備の濁を味といふなり此類をば何〳〵の清濁通と注せり且かむりといふは加夫里といふことなればむかしはかむりと書又は加夫里と濁音の字をも用ひたり後世はかふ

りと書てかむりとおもへり本語と唱へとの傳を誤り來れるものなり故に此類の假字も則かむりと書なり惣ての音の通ひを注し且假字の書法をいふも是をもて推べし

一いづれのおほむ時といふは何之大御時といふ義なる事古事記に天照大神と書たるを假字はあまてらすおほみかみと書て唱への傳にあまてらすおほんかみと唱へるなり（大御云々といふは崇敬の語をかさねたるにて神代といへども皇流の皇神をのみさは稱し來れり故に後世にも天皇の御事にわたる事には大御歌大御食などのことくなる事にもいへり）

故にいづれのおほみときと書ていづれのおほん時と唱へんが爲に御の傍にホンの字を付たり此外も本語を書て唱へかたを付かなにて傍に注せる物あり皆これになら へ且此物語その本を見るに天皇の御事にあづかる處におほん何と書又は御の字のみ書たる所あり惣ていにしへ天皇の御事をばおほんと唱へ來れる例故に本に御字のみ有をもそれにわたる事をばおほんと唱ふべしそれが中にたま〳〵ことかろく略して申せしあたりはみともおんとも唱ふる所も有べくそれらも傍にかたかなり付たり

一此注に神代といふは鵜かやふき合せずの尊以上なり上古といふは神武より崇峻推古天皇の前後までなり上世といふは孝德齊明より奈良の都にいたる中世といふはその都の始桓武より延喜朱雀天皇の前後までなり中世の末といふは村上圓融院より一條の比までなり後世といふは崇德後白川より卽今までの御時をいへり凡上世に上中下中世後世にも其さざみ〳〵あれども惣てのさまを考て大抵を四段に略稱せり又そのいづれともなくいふ時はむかし又はいにしへなどもいへり

一語の上に有て心なき語を發語といふ譬は萬葉に黑きをかくろき此物語に寄合をかより合といふ類又見事をうち見る仰をふりあふぐなどの類なり又中下にあるを助辭といふ吾しかよはゞめかれてを行ん此しとをとの如し且下にあるは獨ぬるかものも清らの良の類なり又一句を上に冠らしめて其語は只次の語を起さん料のとなるをは冠辭といふ此類も又本文には委しくしるさず是を推べし

一文義に末にあらん事のはしを外に舉る是をは張本とも伏案ともいへり此二事少の違にてあれど大かた同しけ

れば互にしるせり又前文後文相むかへて知を照應といふ又其語を卽時にことわるを頓挫といふ又文にある人相對して互に應對せる語の外に作者の其事を詳せる類をば記者の語といふ(俗に草子の地といふ)又其應對など誰か詞とふと分がたき所には或は源氏或紫上など注せり又文の句絶には惣に點し讀をば中に點せり（讀とは語の小字なり）小段をば一かくの如くしるし大段をは」かくの如くしるせり(大とは其事の終なり)是らは我國に例なき事もあれど分よからん料のみ其外右の數條の外にも注法あれども本文注せる例にて知べければ大かたを畢るのみ惣て後世の注例にことなる事多しよく心を付て見るべし先入のものを主として不意にそしる人も有べけれども惣わたくしをわすれて古意につきたり誤れるは猶改むべし

この新釋惣考一冊菅根刀自か本をもてうつしぬ

寛政三のとし八月三日　平春海

寛政十二のとし閏四月廿七日　源嘉卿

源氏物語新釋

桐壺

こを卷の名とするは光源氏の御母御息所の御局をきりつぼなりといひはた此御息所の事をいふ卷なればなり或抄に壺前栽ともいふと侍るはおまへのつぼ前栽てふ詞のあればさいひし事も有しにやされど桐壺はあまた行わたりたる名なれば他は用ゐず○或人いふ此卷に光源氏生れてより十二歳までをいひ又同し末におとなに成給ひて後といひたるに十三四歳のほどの事こもりて次の帚木卷は十六のこと見えたりと○此物語に朱雀院冷泉院などいひその外今すこし前代の事めきしこともいへるに泥みて桐壺の帝を延喜の御時におもひよせなどする說は皆とらずこはたゞ此記者の在し一條院の御時のさまをもとゝして書たれど時をさすは恐もあり罪をもうる事故に人々の上をもいづれとも定めぬ樣にかきまぎらはしたるものなりさて此頃の御代〳〵は帝の御いきほひやゝおとろへゆかせ給ひて臣達の世の如くなれば都の中のみかは四方の民の心もまち〳〵になりて終に亂れもう

ちつゞき行くをなげきて帝の御爲とならん筋をおもひてかけりと見ゆること多しそれはその所々にいふべしそれはたたやすくは見ゆまじくかまへてあらぬ事をも書まじへしなるべし

いづれのおほんときにか云云　かく書るが書物語の常なり作りなしたる物なればなり伊勢物語はむかし男在けりと書ておほむね專ら在五中將の事をそら事に作りたり此物語は記者の時の一條院の御代の事なるを古き代の物かたりめきて作れるなり然るを伊勢家集の初めの書さまに似たりといひ又は延喜の御時をさすといふは朱雀冷泉など有語に泥て大意をさとらぬものなり

おほん時といふは古事紀その外の古書に天照大御神(オホミカミ)てふより初めて大御飯(オホ)大御酒(ミキ)大御歌など書し如く大御時(オホミトキ)の意なるを音便にておほんと唱ふるなり或說に日本紀に雄尾と書などいふはあらぬ事なりさて大御時云々は天皇の御事によるをば皆いふ只御代御物などいふは略なり

女御　是は文德天皇の時に令の妃を止て臣のむすめを女御とて立てられて后にすなり令の妃は皇后なれば三品以上なり女御は臣の女なれば三位なり雄略紀に女御の字はあれど是は漢文によれるのみにて其頃女御てふ事有にあらず權興の樣に思ふは誤りなり

更衣　更衣は令の夫人に當りて四位五位なり此名も令の京となりて改められたり更衣といふ事は仁明天皇の御時の記に見ゆさて女御の字は周禮に女御御妻なり御二王之燕寢一といへり更衣の字は漢書に帝起更衣子夫侍二尙衣一また東方朔傳に私置二更衣一註云爲二休息更衣一之處亦置二宮人一この意にて御休所ともいふなりされとさらぬ女房も御子をうめばみやす所といひはた東宮の御妃をも御休所と申す事となれり此文の樣はたゝにては更衣といふも御子うめる後ぞ御やす所と書たり東宮の御息所はもとよりなりいとやむごとなき　こゝに生れたる家がらの高きを云或說に止事無の意といへるはさも聞ゆるなり又極めたる上からは御心になやましき事なきよしにて思事無てふ意にもあるべし

すぐれて時めき給ふ　實に時に逢てみゆるを云はじめよりわれはとおもひあがり給へる　湖桐壺更衣より前に參りたれば我こそは寵を得めと思ひあがる

なり

御かた〳〵　湖弘徽殿の女御などなり

おとしめそねみ　いひ消して妬む

おなじほど　湖桐壺更衣と

いとあつしくなりゆき　戸令に篤疾と云は今重病と云に同これを疾あつしく成といふ

あかずあはれなるものに　更衣の里がちなるを衰にほしめして世の人のそしりをもはゞからずいよ〳〵念比にし給るを世の例にも成へしと地よりいふなり

世のためしに成もぬべき御もてなしなり云々　此帝更衣を時めかせたまふ樣は唐の玄宗皇帝の楊貴妃を寵し給ひしに似たれば世の亂ともなりなんといふなり是にさま〳〵の意得ありまづ一わたりにいはゝ此記者の比の人皆かの樂天の文を翫ふまゝに我皇朝のあり傳れる意を忘れてかの長恨歌によりて書んぞめづらかならん古き物語どもはこゝの事にて古だいなりとのみ思ふよりする業なるべし次の卷々にも樂天の語によるを風流とのみ思へる事多しげにもその語どもをかろく今めきてかしこげにとり用たる上べの樣は面白くこそいひなしたれ然るをよく見ればいかにぞやも有かないでそらごとなりといへど此物語はこのことなるにいにしへこゝには女のおほせしによりて世の亂れたることはあらずそも又御門の御心おきてもたがひ楊貴妃の如くかたましき女をしも時めかせ給はゞいさゝか内の亂はありもしなんを桐壺の帝は萬に御惠深く更衣も心うつくしくて心ある人のよくほめたるなれば長恨歌の旨とは書たがひたり然ればこゝに似つかずなきことを畢げいふは事このみがほにこそ聞ゆれ仍て是を打かへして記者を助けていはんにはたとひ貴妃を寵したまふ如く更衣をおぼすともとまれかくまれ天皇を恐み崇むにつけて下も世々にさかゆる神代よりのならはしなれば我すべらぎ古の如き御いきほひ盛におはしまさばかくばかりのことをあしと申す臣はあらじをこの近き代々の臣達は唐國のまねして我まゝしつゝ豪家の姬君ならぬ大かたの女を時めかせらるゝをばそしるなりけり仍て此記者はそのそしりをそしる意にてかくは書けんかしさてこの帝の后は古の例にかへりて前帝の皇女を立てられ（此つき〳〵もつゝきて皇孫を后とし給へり）また二の皇子光源氏を臣として太政とり給ふへく定められ（その御子も又政とり給へり）皇家統ならぬ豪家の權をおとし天皇の御いきほひをまさんとすること顯なりかゝれは此御時を臣たちのそしる樣なるも更衣をにくむもその比のさまをうつし出しゝものなれば帝のおほしあたり給ふことあらばしか御代をとりなし給はん物とてかきつらんなり譬は漢の班婕妤は心の節なりしを寵なく成たるをは時の人帝をそしれり今の更衣は心うつくしうて寵も深きをは共にほめまゐらすべきものを中々に似つかぬ楊貴妃のためしを引て臣たちのそしるよし書たるは貴妃のかたましくて更衣と大に異なるを舉て更衣をにくむは憎む人達の私なるを知らするわざと云ふべきなり此物語の半ばまでもこの意と見ゆる所多し心して見るべきなり

あいなく　おちくぼ物語に此あいきやうなしと云に依て愛敬無を略きたる語なりさて此更衣は愛敬人とこそ聞ゆれ帝の御寵も世のかひ有ほとの事ならぬを豪家よりあしざまにいふをうけて諸人もさおもふをしらせし書ざま末の文にてしるべし

目をそばめつゝ　惡くきらはしき物を見る時の樣なり

長恨歌に京師長吏爲レ是側レ目（ツハクツ）といふによりしならんまばゆき　あまりにきら〳〵しき御もてなしなりといふなりまばゆきは日のきらめくに向ひがたきより何もさる類にはいへり

おこりにこそ　起なり

あぢきなく　人の情を五味に譬てうましからしなど云中のにが〳〵しといはんが如き事を味氣無といふなり

人のもてなやみ種になりて楊貴妃のためしも　妃は宮中に妬み次には公卿殿上人の目を側をいひ終に天下の人ももてなやむといひさて世の亂れにも及ぶべきと事のついでよく書とりたり然れど是は臣下のかたよりいひ思ふ事にて侍るべき事上に評せしか如しはしたなき　此語は竹取物語に宮は立もはした居るもはしたにて云云枕さうしなどにも此意なり然れは端（クツナキ）方無てふ意にて何ぞの時に手足も出されずせんかたなしといふに同じ故にそれを轉じては人にはづかしめらるゝをもせんかたなくわびしきをもいふ事となりぬこゝははつかしめらるゝなり

かたじけなき　おのれを恥ていふ語なり身に係る御惠

みをうけて身のほどをかへりみてはづる樣の時にいへり辱の字にあたれり

御心ばへのたぐひなきをたのみにてまじらひ給　御かどの御心ひとつをたのみて宮づかへのまじらひをし給ふなり

はゝ北のかたなむ　更衣の母北かたなり

いにしへひとのよし有にて　この北の方はもと王孫か且いにしへ德多きおやの傳りなどもありて今花やか成人にもおとらず更衣をもてなしたまふといふなるべし

さしあたりて世のおぼえはれやかなる　時にあたりていせひある人の事をいふなり

とり立てはか〳〵しき御うしろみ　きと極めておもき御後見なしといふなりはか〳〵しきとは物を度かたより轉れる語なり

事と有時は　吉凶ともに大なる事あるをいふ左傳成公傳に國之大事在祀與戎人事宗廟なといへりされどさまでなくともこゝは御物見のことなどにても有べし

清らなる玉のをのこ皇子さへ生れ　源氏の君誕生なり

清らのらはそへいひて語をゆるくする辭なり萬葉に峯をねら古今に物を物らといふが如しさて玉の如き男みこといふをかたらひつゞけしは文なり緒と男の假字もかなへばなり

さへ　萬葉に副兼などの字を用ゐて卽そへる意なりこはこの更衣御寵の上に副生れ給ひいよ〳〵御おぼえのふかきなり

いつしかと　皇子の御參りを御門の待給ふなりいつしかは萬葉に何時など書りしは助辭のみ

いそぎまゐらせて　生れ給てそのまゝとは心うへからずとなり

めづらかなるちごの　世にめづらしきほどうつくしきかたちなり

一のみこは　後に朱雀院と申す

右大臣の女御（弘徽殿なり）　右大臣の姫君にて女御なるをいふこれは古語にあらず其比の俗語なり惣てかく略きていふは皆俗語なり

よせおもく　人の思ひよせのおもきをいふ此比の俗語なるべし或說は少し意得の違あり

この御にほひには　源氏のみこ世になく光り有をいふ

上の玉のをのこみ子てふにてらしみるへしさてにほひとは古へは色の餘光有をいふ萬葉に朝日影にほへる山といへるか如し或說にこゝを威德なりといふは只上よりつゞけてのみ見て次の語にし心をやらぬものなり是はみかどの御おぼしをいへはうつくしきをいふ外なし

おほかたのやむことなき　一の皇子なればことはりのまたのやんごとなき御おぼしなりと云意なり然れは此大かたは公といはんがことし

わたくしものに　右の公に對して私とは書て且別に御愛の無限を云なり

かしつき給ふ　此本は恐々崇む事なれば下よりいふ語なるを轉じてはかくも用るなり

はじめより　更衣　母君

おしなべてのうへ宮つかへ云々　典侍などのごとく御前さらず常につかうまつるべくもあらず更衣とて御妾の一つにしてさはいへど大納言の女にもあれば輕からぬを寵の餘りに常に御前に侍れは中々におもからすみゆると事のうらを書り

きはには　際字なり

上ずめかし　今書物語の古本に貴人を上衆と書賤きをは下衆と書たり時の俗語なり

わりなく　理りなくの略にてさは有まじきを知つゝも思ふに堪ずしてなす時にいふ語なり古伊勢物語なとに無破と書は借字のみ或說日本紀に無別をわりなくとよめると有は妄說なり紀にはなし

まつはさせ　纏

ゆゑあることのふしぐ〳〵には　折節〳〵なり

まうのぼらせ　參昇

おほとのごもり過して　長恨歌に春宵苦短日高起從是君王不早朝とふ意にて書り寵の甚しきに人のそねみ世もみだるべき事を既に書末にもいふをてらす詞なり

○御寢ますをおほとのごもりといふはこもり給ふは聞えてことにおほとのといふはいかに式に大殿油とも書たるを思ふに寢殿てふは殿の中にも專らなる所にて其所にもとは御寢ませる事故にいふにや

あながち　此文にては强てと云が如し本は齊明紀檢覆蝦夷戶口孝德紀にもありこのあなげるに同しくて譬は穴目闕目など有を强てあさり求るよりいふな

り

このみこうまれ給て　源氏

おきてたれば　掟なりこゝはさのみ勅の有にもあらて

御心にしか思し定めらるゝなり

このみこのゐ給へき　源氏

一のみこの女御　こゝにてはそのみこの御母女御を申

なりされど此頃の俗語なるべしいと古き物に東宮の

御息所など申は御母の事にはあらず

みこたちなども　朱雀院一品宮など

此御かたの御いさめを云々　こうきでんは御妬なるべ

きをこゝにはねたみと云ては描ければいさめと書た

りか樣に書なしたる詞此文に多し

猶わづらはしく　大方の人のいさめは聞しめし入ぬ中

にもこの御方のいさめをばまだ御心にわづらはしき

となり猶はまだ〳〵といふ意にむかしよりいふ此文

いづこもさなりいよ〳〵その上などの意と思ふは後

世の事なり

かしこき　是は恐畏などの字をよみ來りて崇みおそる

ゝ事に多くいへりこゝは天皇をさして申すなり

おとしめ　いひおとしいやしむるなり

きずを求め　無ききずをあながちに求るなり漢書に

吹レ毛求レ疵

なか〳〵なるものおもひをもし給ふ　みかどのかしこ

き御かげをばたのみながら物思し給となり

御つぼねは桐つぼなり　弄花に桐壺は清涼殿の丑寅な

り花鳥に弘徽殿鹿景殿宣耀殿などを過て行馬道つゞ

きなればあまたの御かた〳〵を過させ玉ふといへり

今圖にてみるに

後涼殿
清涼殿
紫宸殿
仁壽
承香
弘徽殿（藤壺）
常寧
貞觀
綾綺殿
溫明殿
鹿景殿（梅壺）
宣耀殿（梅壺）
登花殿（桐壺）

拾芥抄などの趣皆此ことし

打橋わた殿　うちはしは切馬道に板を打渡して通ふ道

なりといへる是なり用あらん時取はなつべき料なる

べしさて日本紀萬葉などに打橋と有は板一つ打渡し

しにて夕貌卷にいふに同し宮中なるは多く板をわた

しながら釘して堅めねば打はしといへり或說に内橋

と云はいかにぞや

わた殿は渡殿にて廊をいふ和名抄廊（保曾止乃）殿下外屋也

とあり異なる樣なれど類同じかるべし

あやしきわざをしつゝ　世繼物語に村上の御時宣耀殿

の女御を中宮のよからずおぼしゝまゝに其御方の人

々かの女御の參上り給ふ道に不淨をまきちらしたる

ことあり此事によりて書るなるべし

御おくりむかへの人の　更衣とはいはずしておくりむ

かへの人といへる物語の書やう奇妙となり

まさなきは　正無なり

えさらぬめだう　和名抄に馬道【俗音米多宇】向レ堂之

道也と云りこゝは外へよぎさくる所なき馬道にてさ

て馬道の所々をさへぎる妻戸を閉てかなたにも此方

にも心得てひらかぬなりさて馬道は莚をしきてあり

いといたう　更衣

御らんして　御門

更衣のざうしを　局といふにおなじ

うへつぼねに　簾まうのぼり給ふ時にかりそめの休息

などの局に給ふなり又云中宮のまうのぼらせ給ふ折

は清涼殿の御座のかたはらの一間を上御局に給ふ定

れる事なり又云弘徽殿藤壺の外には上局を給はる事

なし桐壺更衣に上つぼね給ふことは非例なりとあり

○今思ふに非例といへどいともかしこき御おぼしの

深き更衣に所さり聞えすしてわひしきめ見せまいら

するは是もかのわがまゝする臣たちの心より出たる

物なり然らばなどか上局もたまはらざらんかゝる事

はうち〳〵の事なり御寵によりては凡家より大臣ま

でなれる例さへ侍り

そのうらみましてやらんかたなし　後涼殿の更衣のう

らみなり

このみこ　源氏

御はかまは　冷泉院、圓融院、花山院みな三歳にて此事

おはせしと河海にみゆ

一の宮の奉りしにおとらず　おとらずと云はやがて似

たるほどの事なり天皇のことに寵給ふ皇子なれば二

のみこといへどまだ東宮と申さぬ一のみこにちかき

ほどの御儀式は有もしつべし

くらづかさ　内藏寮なり職員令に内藏寮頭一人掌二金

銀珠玉寶器〔鏡などのことにはあらず〕錦綾綵罷褥

諸蕃貢獻奇異〔謂非常之物其金銀以下雜物皆自二大藏

省一割別而所送者也〕之物年料供進御服及別勅用物事

といふ類の御物なり式にも委し

おさめどの　納殿なり西宮抄【臨時所】納殿【累代御物納之在二宣陽殿一恒例御物納二藏人所綾綺殿一紙御屏風納二仁壽殿一藏人雜色爲レ預】これらの御物どもことごとく皆用ゐらるゝを云々をつくしてとはいへり

いみじう　こゝには嚴重さ意にいへり此語の本は齊しきにて甚大事など有時は物いみつゝしむより出たるなり

およすけもて　こは幼き兒がやゝ長なれる兒に生次ふをいふなりおひを言便にておよといひ次をすかふともすきともいふは古語なり或說に助及と書て萬葉に有と云は僞にて萬葉にも外の古書にもさる字も語もなし此語は中頃よりいふと見えたり萬葉に老しをばといふことをおよしをばとよめり然ればわかき人の老人めくをいふを又轉じてちごの生成行をもいふなり

あさましきまで　こゝは此みこの世にめづらしきを驚きあざむなりさてあさましきてふ語はおぞましきを音め通ひにてあさましきとはいふなり譬ば剌ありておぞましき草をあざみと名づけたるが如し後世の歌あさましやなどいふも自ら及ばぬ身を惡むなり今人は淺ましき心と思へど叶はぬ事多し

みやす所　御子をうみ給へる後更衣を御休所とことわきていふ事此文に此後はさいへるにて知らる但更衣ならねど御子うみたるをば古くよりみやす所とはいふめり

まかでなんとし給　禁中をまかり出給はんとなりいとまさらに　御門

としころ常の篤しき　常に病者なるに御めなれて此度はいとおもくなれるをおどろかせ給はぬも中々深きおぼし故なり

五六日　物語は先は平の物かたらひなれば年月日をば專ら音にて書り下に廿餘日を廿よかと古くより書傳へたりよ日となくとも餘日と書たるをもかたかな文の中にてははつかあまりとよむべき樣なし故に五六日二三日廿餘日などは必音讀なり訓によめといふは誤れり凡序文古文は皆訓にて書べく物かたりは音も交るべき理なるを却て後世人は序文なども音を用るよ

そうして　奏聞申してなり

まかでさせ奉り給ふ　落若を先いひてその時の樣を付てしるす文の一つなり

かゝるをりにも　先にはしたなめわづらはせられしよりいふ御子の添て出給ふにさはりていよゝ事わろければなり

そこをばとゞめ奉て　源氏

にほひやかに　御息所の絕なる樣をいともよく書とれり

うつくしげなる人の　げは樣體なり

あはれと物をおもひしみ　今は限りとおもへば御なごりをも御子の御事をも思ひしみつゝ奏し遺すべき事多かれど言にはえいはれずいとよわりたるさまなり

物し給ふ　事を略しふくめていふ辭なりよりて前後の詞に隨て意はしるべきなり

御らんするに　御門

ふみなどもいとたゆげにて　萬葉に我が見し兒等が目見は知しも今昔物語に(廿九)靡ノ方ヲ尻目ニ見遣リ給フ眼見ナドノ耻シゲナル云々是ほ物を見る目つきを云り或說に目なりとのみ云はたらず又目のあたりまばゆき體といふもわろし且こゝはいと重く病給へば目を見やるもたゆげなる樣をいふのみ且たゆげは萬葉なとに手だゆく足だゆくなどよみたれば古語也或說に墮嶽の二字を舉たるはわろし

われかのけしきにて　うつぼとし蔭上　あれか人にもあらぬこゝちして見めぐらしてと有もわれかのけしきと同意なり

手車の宣旨　續日本後紀承和八年夏四月四日女御從四位下藤原朝臣靜子卒故紀伊守從五位下綱繼之女也天皇納レ之誕二三皇子一皇女一也寵愛之隆獨冠後宮俄病困篤載二之小車一出レ自二禁中一纔到二里第一便絕矣天皇聞之哀悼遣二中使一贈二從三位一也左京大夫從四位下藤原文山(中略)並監二護喪事一この事凡今にかなへり手車は和名抄云周禮注云后居二宮中一從容所レ來謂二之輦一【和名天久留万】爲二輕輪一人挽所レ往也　西宮抄【臨時】葉車親王大臣之中老宿人有二此恩一女親王女御尙侍毎二出入一藏人經二奏聞一御二閤門吉上一【雖載雜式毎度仰】同裏書云正五位上羽栗翼寶龜初天皇以其年老聽二小車出一公門一【右と是と合せみるに小車は葉なり】或抄云てくるまは輿のやうにてちひさき輪をかけて轅は輿のやうに短きなり石階などを上下るにいととゞ

ろかず中の重を出入給ふ爲なり又延喜雜式云凡乘輦出入内裡者妃限曹子夫人及内親王限溫明殿後凉殿後命婦三位限兵衛陣但嬪女御及孫王大臣嫡事乘輦限兵衛陣云云又右の式によりて右の上御局に據ありといふ說はおぼつかなく上御局はまいりの時のつぼねなれば病ふしては桐壺ならんか

さりとも打捨ではえ　限りあらん道にもと契らせ給ふといふより出たる詞にて御おぼしの餘りに向ふ方の心をさへのたまはす切の切なるさまなり上にいとにほひやかにてふよりこゝまで文意をつくしたり

をんなも　更衣

いみじと見奉りて　いみじきは既にいふ如くさま〳〵に用るがこゝは先は甚しき意有さて右の如くの御なげきを見奉りおきて死ゆかんは君の御意もわが爲御子のため皆いはんかたなくいみじきなり

かぎりとて　右の限あらん道にもおくれ先だゝじと契らせ給ひけるをと云を受けてさはちぎり奉りしかど命はお〳〵の限ありて別れ奉るが悲しきといひさてかくまでいみじき御こゝろふかさをながらへて見奉らざらんが口をしければとてもかくてもいきたき物は命にこそあれとなり後拾遺に藤原惟規越前にて病て死んする時　都にも戀しき事の多かれば猶此度はいかんとぞ思ふ續後拾遺辨乳母をしからぬ命なれども諸共にいかまほしきは生の松原これらも生と行をかねたり拾遺に龜山に生藥のみとよみしも同しいとかくおもふたまへましかば　かねてかゝらんと思ひ知なば奏し置べき事共の侍る物をと是をのみも息のたえつゝえ申はてぬさまなり

○たまへばとみづからの事にいふは身に自得したる事をいふ此語あがめていふ樣なるも本は人のとく自得し給ひ爲得らるゝ事より起りて末には專らあがむる事の樣にのみなれるなり出雲國造神賀にも恐美恐美申賜久云云と云はみつからにいへり大祓詞に祓給清給と云も同し

たゆげなれば　まだるき體なり

かくながら　御門の心そのまゝ禁中にて更衣の生死を見給はんとおぼしめすなり

いのりども　修法加持なり

さるべき人々　然るべき驗者共なり

わりなくおもほしながら　わりなくは本は理りなくの意なりそれをこゝは御なごり多くおぼすにまかでさせかたくはおぼせどもとふ事に用ゐたり或說に卽わかれがたくおぼすといへるは本の語をよく意得でまがひたる意有と見ゆ

まかでさせ給ひつ　こゝにて終に退出させ給ひつるなり

御むねのみつとふたがりて　つとは字にていはゞ突となり俗につゝとふさがり屈とおし入などいふも同し語なり御むねの内につきつめたる樣にふたがりたるなり或說に頓てといへるも又集都などの字をあてしもわろし日本紀に集と書といへるも誤なり集はツドツとこそ訓たれツといふ事なし都は古ツのかなに用ゐたれど只かなにて侍り皆古書を誤れるものなり

ゆきかふ　ゆきかへるなり萬葉に往反二字を書たるにて明らけし

いぶせき　本は物の内にこもりて有意より出て何にもおぼつかなく思ふをいへり萬葉に鬱悒と書ておぼつかなくともいぶせくともよめり

絶はて　更衣死去なり

あへなく　本は遮無にて御息所のなくなりたまひたれば御使はさへきりむかふ人なくてすげなく歸りたるなり此語あえなくとかくは別なり

きこしめす御心まどひ　御門

御子は云々かゝるほどにさぶらひ給ふ例なき事なれば

御母の喪の時其皇子の大内におはせし例なしとなり是ぞ古へよりの定めなるを異說どものあれば別記に論ず惣て父母などの喪中におはする例なきとなり令條のむねかゝる服は當歳といへどもうくるなりその兒の殤有父母兄弟などにはうけぬのみ然るを延喜の御時二度の勅文ありて七歳未滿の殤は雙方無服なりといふ說は後世の定めにて侍り延喜に既にしか定められば此文にかく書んやその勅文の樣源語秘訣に擧られしかど延喜に用ゐられしてふ事も見えず凡服は小兒には人の着すればいかで父母の服着ざらんやもしかの延喜の頃より後古令を誤り來れるを式部の意に有まじき事とて態と例なしと書たるにもやあらん猶さにはあらで一條院の御時まで此法は古令のまゝなりつらん事此文もて知べし

何ごとかあらん　みこは

よろしき事にだに　常さまにていと勝れ劣らぬ事をいへり或說に此だにをさへと釋たるは誤りなりさへは

順に前る辭だには逆にあたりていふ辭なり何すらといふに同し

ましてあはれに　かゝるみ子さへおはしませば

例の作法　喪葬令にみゆる如く此時も違はざりけんかしされどいかめしうと書たれば三位に准せし禮にせられしをいふなるべし女御は三位更衣は四位【女御は夫人に當り更衣は嬪に當ると前に見ゆ】

おなじ煙にも　共に死なんとなり

おたき　和名抄に愛宕郡愛宕【於多岐】また同郡に鳥戸【止利倍】とて別に擧たれはおたぎと鳥べは別なりけりさらば此歌は鳥々にはあらじ或說は後をもてのみいへり

おはしつきたるみち　御母北の方

こゝちいかはかり　母君の心を地よりいふなり

むなしき御からを　母君のいひ給たる詞なり

はひになりたまはんと　拾遺集もえ出て灰に成なん時にこそ人をおもひのやまんとはせめ

ひたふるに　一向の意なり紀に永をも訓せり

さかしう　賢の字なり迷はぬやうにの給ふ心なり

さは思ひつかし　つるかしの意なり送りの女房たちの心なり

うちよりの御使　葬送の所への敕使

三位のくらゐ云々　此三位は普にてさんみと唱ふべし或說にみつのくらゐと訓べしといふは宣命などよむ時の詞によりてはいふらめど物語にていふは平語なれば普に書たりみつのくらゐとよまんならば三位おくり給ふと書べし三位のとてくらゐと書來れるをいかでしかよまんや宣命祝詞序文その外の類は皆訓なり物語は普もまじれり

宣命　大臣勅を奉りて內記に命して作らしむるよし延喜式にあり贈位のむねを書たる宣命也少納言これをよむと云々

女御とだにいはせず　こはもと女御として長く契り給はゝやと覺しつれど人のそしりを憚給ひてある間にかく死別とならせ給へば其死に對て女御とせん事などはかろき故にだにの辭は當たる成べし或說に后にもとおぼせしを女御とだにせでとの意といへどこゝは宣命の意をうけてかきたるものなるに宣命にさる內々のおぼしをあらはれんやうに書くべくもあらず然れば此だにの辭はもと女御とし給はんとのおぼし

めしを今はいたづらに成たるを以て女御とだにとは書しものなり古今集にだにのことばをかく用ゐたる歌もあるなり

いまひときざみの　更衣は四位女御は三位なり

おくらせ給ふなりけり　これは宣命の詞の旨を以てかく書るなり

物思ひしり給ふは　物の心を思ひ知たる人々は更衣を哀に思ひ出玉ふとなり

めでたかりし　紀に感の字を訓たり語は讚出るてふ語を略せるにて何にもさる事にはいへり

めやすく　目に見るに安らかなるにて見よきをいふなり見苦しきてふ語に對てしるべし

さまあしき　是もそれむ人の意をそのまゝ書たるなり

すげなう　因氣(スガ)無のよを略せる語也萬葉(十七)家持の麿の放れ失たるをよめる歌こゝろにはゆふる事なく須加の山須可(スカ)なくのみや戀渡りなんこれ因無なり或說に日本紀に無人望と書てすげなしと訓たるといふは僞りなり紀にさる字を訓し事なし

人からの哀になさけ有し　更衣の事なり女房達の心なり更衣は實によき人なるをこゝに顯すを以て前々の樣を知べし

なくてそとは　是は古今六帖に物語と題して在時はありのすさみに語らはて戀しき物と別れてそしるてふ歌を本としてなくてぞとはかきしなるべし此文書る人の巧み大かたしかなり古歌をそのまゝあげす侍る例は伊勢物語に陸奥の忍ぶ云々の下句をかへ又玄かのあまはめかりしほやきてふをあしのやのなたのしほやきとかへてそこの歌とせるなどの戯れより出たる成べし惣て此文の詞さる類多し或說にある時は在のすさみににくかりきなくてぞ人は戀しかりけるてふを引たれど此歌物に見えずその文にかなへんとて右の六帖の歌をもて作りたるものと見ゆ紀などになき事をだに僞るなれば思ひやるべし

後のわざなどにも　七日〳〵の法事

せんかたなう　御門の心

御かた〳〵のとのゐ　女御更衣達の帝へ御番にまいり給ふ事なり河榮花物語云宮うせ給て後何事もおぼしめされずゆゝしきまで見えさせ給ふ此程は女御みやす所の御とのゐもたえたり

なみだにひぢて　漬なりぬるゝ事

見本る人さへ露けき秋なり　いと面白き文なり

弘徽殿などには　更衣の死後にもこきでんのにくみはゆけひの命婦　是は御門の御おほしも更衣にもしたしゆゑしなう　猶はまだてふ意なり後人は此意を得ぬやまずとなり

故に妙なる詞つかひなりといへり古へ常の事なるを

かりし人なりさらではかゝる御使はかひなければ心

猶ゆゑしなう　猶はまだてふ意なり後人は此意を得ぬ

一の宮を見本らせ給にも　御門の御心

をやりて書たりさてかしこに行ての心つかひなどよ

にことに侍り靭負はキオの反ゴなるをゲに轉じてユ

わかみやの　源氏

ゲヒと云さて衛門の官は靭を負中に衛門の官ありし

したしき女房　次に内侍のすき行たりし事見え多は

に依て女房の呼名とするなり惣て女のよひ名はさる

更衣を怨中にしたしきも有へしゆげひの命婦もした

事多し

しき後にて見ゆ

命婦とは命より延喜式の頃までは五位以上の宮人(クニン)を

有さまをきこしめす　若宮のありさまをきこしめすな

すべて内命婦とし五位以上の人の妻を外命婦といへ

り

り中右記などの頃よりは女官の中藤を命婦といへり

或説にたゝ中藤をむかしは命婦といへりといふは委

野わきたちて　野分めきてふ意なりしびらたつなどの

しからず

たつ皆同じ此辭いにしへ聞ず此ほどの辭なるべし

をかしきほどに　優艶なる心なり

はださむき　萬葉に肩寒(カタサム)しもとよめる是にてまた家持

やがてながめおはします　物かなしく打ながめ給たる

の妻におくれて今よりは秋風さむく明なんに云々を

をいふなり心に思ひ有時默然と物を守りゐるを長目

とりて古今集に秋風の身にさむければつれもなき人

といふ

をそたのむ暮る夜ことにてふなどの樣をおもひて書

かうやうのをり　是より次の猶劣りけりといふまでは

たる詞なり故に常よりもおほしいづる事多くてと書

ながめおはします間の御心におぼし出る事どもをつ

るなとを思ふべし然るを後世人將寒意なりといふは

らねて書り短かくよく書とれる物なり上のおぼし出

る事多くてと有をもてらしみるべし

御あそびなど　あそぶ事は多かれど專ら管絃のかたに

いへる所物語に多し仲哀紀に御琴ひきさし給ふ時猶

あそばせと武内宿禰の申せしをおもふに古へよりの

詞なり且こゝに野分たちたると書にはかゝらず夕月

夜のをかしきと云によれりされどそれも又前々有し

をり一の中の一つを舉て外をしらする文なり

はかなく聞え出る　巧みあかぬをいふ

けはひかたちの　氣色なり有樣といふか如し

つと　突となり

やみのうつゝには猶劣りけり　古今集に夢ぬば玉のやみ

のうつゝはさだかなる夢にいくらも增らざりけり是

を轉し用かたり現とはいへ闇夜に逢て形の見えねば

定かに見る夢よりいくらばかりの增りもなしてふを

とりてかくさだかに御まのあたりさらぬ物からおも

かげのみなればその闇の現よりもまた劣りたりとか

けり此文は古歌などを取事の變態かきりなし

かしこに　更衣の里

かと引いるゝより　命婦の車なり

人ひとりの　更衣の事なり

御かしつき　齡崇てふ齋は凶をいみて吉を用ゐ崇は其

人を敬ひ恐こむをいふ是は本なりそは大切にし給ふ

をいへり是は語の末なり

たてゝ　辭なり

めやすき　見にくからぬ事なり

やみにくれて　後撰に人のおやの心は闇にあらねども

子を思ふ道にまどひぬる哉

草もたかく　次のあれたる心ちしてふ詞を此語にも

かけてみる時は草高き心ちするにて實にさまてはあ

らぬなりけり

月影ばかりそ云々　貫之集に闇人もなき宿なれと來る

春は八重むくらにもさはらさりけりてふを春を月に

かへたり

みなみおもてに　南はおもてむきの方なり

おろして　命婦を車よりなりおろして母君の對面せら

れしなり

母君もとみに云々　此上に命婦の車より下てさて母君

と對面したる事をは略せしなりかく詞を略せる所に

上手のわざはありわるう略すれは理りたらず又みな

いひつゝけては拙くあきらけしとは頓の字音といふ

說さも有べし土佐日記にとに〳〵とあればなり
御母君もといふは次にや〳〵ためらひて命婦のいひ出し事をしらせてもの辭をおけり使のいと心せるさまなりさて母君も物聞んとすれどわきくる泪にえもいひ出かねて暫してやう〳〵と事のはしをいへるなり
或說にとかくためらひていひたる詞とこ〳〵にいふはわろし母君はためらふならねど泪す〳〵みてえいひ出かねたるのみ
今までとまり侍るが　いきとまりたるがうきとなり
よもきふの　拾遺集にいかでかは尋來つらんよもぎふの人もかよはぬわがやどの道
げにえたふまじくない給　上にしたしき女房御めのとなどつかはし云々次に內侍の事を書前後相かねて實と書り
まいりては云々　さきに典侍の御使にまかりてさて內にかへり參りては母君のかなしさまを奏せし時此命婦も傍に侍りて聞つるま〳〵におろかなる心にも悲しく覺たるを今かく見まいらすれば實に見忍びがたく見え給ふとなり
こ〳〵ろさも〳〵　心肝なり萬葉には肝向ッ心とよめり

物おもひ給へしらぬ　命婦皇下の詞なり
しのびがたく　悲みの堪がたき心なり
や〳〵ためらひて仰ごとつたへ聞ゆ　や〳〵は漸なりためらひは猶豫せるなりつたへ聞ゆは勅のむねをうけて母君に傳へいふなり勅使といへどかゝる御使には時宜をはかりて心づかひせるさまをいへり
しばしはゆめかと　是より勅語のむねをのぶるなり
さむべきかたなく　上に夢かと有より出
とひ合すべき人だになき　此御なげきかの母君ならではとひあはせ給ふべき人はなかるべき理りなり
まゐり給なんや　母君に參內あれとなり
わかみやの　源氏なり
とくまゐり給へ　上には給ひなんやとゆるくのたまひこ〳〵にはかくのたまへる樣まことに其時の御有樣みるが如し
はか〳〵しう　上にいふ如くはかは計量の有てきは有事なりよりてこ〳〵は定かにもえのり給はぬ意となるかつは人も　且てふ語は左する間に有する時にいふなりこ〳〵も仰事の給ふが間にまた人めをもつゝみ給ふ故における語なり此語をかくてふ事と古今集の注に

いへる誤りより後みなまどへりいづこにても右の意にて聞ゆ
うけ給にもほてぬやうにて　此時の御ありさままことにしられ又命婦の心つかひも何もことの順よう書とれり
御文奉る　勅書なり
めも見え侍ちぬに　母君
かしこき　上を恐るゝなり且勅書の成光にて目もはれて見奉られぬなるへしとなり
ほどへば云々　上の勅語と此勅書と相てらしみるに同し語なくて相はなれず事かさならぬ樣に書たるえもいはずみゆ心をひそめてらしみるべきものなり
まぎる〳〵こともやと　悲しみの
月日にそへて　ほどふればうとく成行ならひなるをこは中々御かなしみのふかめりとなり上のさむべきかたなく云々てふにあたる
いはけなき人も　源氏
もろともにはく〳〵まぬ　更衣と共にはく〳〵ませ給はぬ行末のおほつかなさをいかゞせん今はすべなければたゞならんよりはま〳〵母の更衣に准へて參りてはぐ〳〵まれんぞよろしかりなんとの仰なり猶は御門も母君もせんかたなくおぼすが中に何れといふ時にまだまだてふ意なり○昔の形見にを或說に若宮を更衣のかたみに見給へとなりといへるは准へての詞かなはず是は母君を更衣の形見の如くみかどのおぼす意とみゆ諸ともにはぐ〳〵まぬの詞より出たる語なるべし
いまはなほむかしのかたみに　母君のせんかたなくおもふらん內にも今はまだ〳〵參りて更衣になずらへてはぐ〳〵まれんかよかるべしとの仰なり猶の字よく心得べし猶はまだといふ義なり
みやきの〳〵　此野は萩と露の名所なれば小萩がもと〳〵のたまはん料にのみおふせられしと見るかた意高く侍るべし赤染衞門集に野分したる朝にをさなき人をいかにともいはぬ男にやる人にかはりてあらく吹風はいかにと宮城の〳〵こはきか上を露もとへかし是も小はぎに子をそへたり又宮中の意にあらず
えみ給ひはてず　其ま〳〵落涙の體をふくむるなり
いのちなかさのいとつらう　莊子に壽則多辱と有より
いふか
松のおもはんことだに　是は古今集に何をして身のい

たづらに老ぬらん年のおもはん事そやさしき文いたつらに世にふるものと高砂の松をや老の友とおもはむ此二首などをもてつゞめて書けんかし例の古歌をとり用るに巧みなるものなり然るに或説にいかにして有としられし高砂の松のおもはん事もはつかしてふ六帖の歌を引たり此歌今の六帖にはあれど古本にはなし後に此抄より書入しなるべしよりておもふに歌のつゞけも意も穩かならず侍り恐らくは此文の抄作る人の詞にあはせて作れるなるべし此説どもにはさる僞り事も多しはたさる歌をそのまゝ引ては此文の例にもたがひて拙く聞ゆ

百しき　建礼堅城神離といふに萬葉にさま〳〵書たる中に百磯城の大宮と書るを合せ且天の石座てふより始て磐石を以て宮をも宮門をも堅きとせし事古書の常なるを見るに百の磐石堅き城の大宮てふ意なり且石をシといひ城をキと云は古語なり然るを或説に百官の座を敷意なりといへるは不意にいひたる俗説なり百石城てふ語は雄略の大御歌に始て見え其前にも百石木媛などの名ありければいと古き語にて雄略の御代の頃までは百官の座を敷など樣の式は侍らざりしなり古語を後世の人の釋は皆かゝる時代にたがふ多し

ゆきかひ　萬往反と有往來するを云

度々うけたまはりながら　抄前に御使有し事聞えたり

えなんおもひ給へ　參内をえ思ひ立まじきとなり

わか宮は　源氏

おもほしるにか　源いまだ三歳なればなり

ことわりに　理なり

ゆゝしき身に　子を先だてゝいま〳〵しき身なりといへりさて此語は他をいむも我いまるゝも物を齋て神に仕るも何も皆同し意なり異國には字にてわけこゝにては事によりてきゝわくるのみ

かくておはしますも　源氏の祖母のもとにおはします事なり

いま〳〵しう辱く　是も忌〳〵しきにて右に同し語なるを上のはみづからをいひこゝに御子のためにいましきをいふ○かたじけなくとはかゝる忌はしき身にそひておはしまさするは御子を辱かしめ奉る筋なりといふなり

みやはおほとのごもりにけり　源氏はね給ひたりとなり

り

見奉りて　命婦詞

そうし侍らまほしき　進退の心づかひ深し

まちおはしますらんを　帝の待おはさんとなり

暮まとふ心のやみも　子をおもふ道をいへり

はるく　晴かすにてカスの反クなればしかいふ一本に

はるゝと有は體の語なればこゝにかなはす

聞えまほしう侍を　命婦にかたり慰たきとなり

わたくしにも　かく御使の次てなくて

おもだゝしき　面起しきなりおもておこすといふに同

しうれしくてふ詞よりみるべし立よりとは他し方へ

の次ての樣ながら是は遜りていふ詞なり

立よりたまひし物を　前にしたしき女房といふにて此

命婦もしたしき故さき〳〵も御使に來りしを明す

かゝる御せうそこにて　文をも言傳をも云なり

かへす〳〵　上に今までとまり侍るかといひ次に命長

さのいとつらうといへるをうけていへり老人のなげ

きのくり事をおもはせたり○或人かへす〳〵をすみてよむと云はわろし連聲の常にて下は必濁る例なり

凡清濁の事は極めて古語を通せされば定めがたきもの

うまれし時より　御息所のその初を母君の語る事なり

【春海考に思ふ心有し人まてはおやのみやつかへさせんと思ふ心のあり人なりといふなり】

故大納言　御息所の父なり

今はとなるまで　逝去の際までとなり

たゝ此人の　更衣なり

ほいかならずとげさせ　本意なり

思ひくつほるな　こゝろを頽すことなかれとなり

いさめおかれ侍りしかば　遺言せられしなり

はか〴〵しう　既に出

中々なるべき　いづれともつかず苦しかるべきなり

たゞかのゆゑごんを　父大納言の遺言なり

いだしたて侍りしを　宮づかへに出したてしなり

身にあまるまでの　過分の御寵愛なりし事なり

御心ざしのよろづにかたじけなき　此よろづにとは常の御寵はもとよりにてをり〳〵の雜事まで事かゝぬやうに仰ことありて内のまじらひをもよろしうせられしといふなるべし

人げなきはぢ　皇下して人がましからぬをいへり

かくしつゝ　是はかくしつ〳〵と重る辭なり或説に年なりといふはこゝには叶はず凡つゝは譬は雪は降つ〳〵てふを予にふりつゝと一所に證たる辭にて事の數重る事にいふ辭なり一つ二つより九つまでのつの如しさてそれを轉じてながらの意とはなれり又はどふるつゝてふも程經てかさなる事なればたゞ重るつゝの中に有事なり且萬葉に年とも管とも書るは俗字なり字につきて心有などいふはわろし

よこさまなるやうにて　人の妬などにてうせたれば横たゞこの人ゆゑにて

死のやうにてといへり

かへりてはつらく　寵愛の甚しきはかへりてはつらきとなり

こゝろのやみに　子を思ふ故にの心なり

むせかへり　泪になり

うへもしりなん　御門も如是とおほすと仰られし事をかたるなり命婦の御門の御心をかたるなり

わが御こゝろながら　叙慮を命婦の北の方へ申詞なり

おどろくばかり　御ぼしのふかきも

ながゝるまじき　かくほどなく別れ給はんさいつさかとて人目おどろくばかりおぼされしとなり萬葉に十市皇女薨給ふ時に神山之山邊眞蘇木綿短木綿如此のみ故に長等思伎

世にいさゝかも　主上の常の御おぼしも此人故にはみだれ給へるなりかの後涼殿の更衣の房を外へうつされしなどの類なり

今はつらかりける人のちきり　母君のかへりてはつらくなんかしこき御心さしを思ふ云々といへるに同じ

心をまけたることは　曲は

たゞこの人ゆゑにて　この人故のみのさるまじきこと

はなにのくるしからんかれこれといふ説とてもは御門を許し申べき道にかなはずせまりすぎたることなり

さるましき人のうらみを　さるましき如是有べからぬなりシカの反サなればなり

かうう拾られて　是を延てかうと云或説に角と云は何ぞや

人わろう　人目わろき心なり

かたくなに　頑の字をろかなる事なり

さきの世ゆかしうなんと　前世のほどをしらまほしくなり前世にいかなる契有てかとなり

うちかへしつゝ　是は惣てにかゝる

しほたれかち　御泪にしをれたるなり古へ是を志乎禮と書り

つきせずなく〳〵　語れども盡せずしてなく〳〵いそぎまゐるとつゞくべし

こよひすくさず　今夜の中に御返事を申あげんとなり

いそぎまゐる　なく〳〵いひて

月は人かたの　上に夕つく夜のをかしきほどゝ有にむかへり夕月夜といへど七日八日ごろなるべし夜ふけたるそらのけしきあはれを催すさまを書とれり

草むらのむしの聲もよほしかほなるも　專ら哭を催す方なり

くさのもとなり　上に草も高く叉蓬生の露分といへり

命婦歌鈴蟲の　母君ともろともになげきの數はなきつくしたりと思ふに猶もたえずして涙はながるゝとなりそれを鈴蟲によせてふるなみだといへり

えものりやらず　命婦此あはれを見捨がたく車にものりかぬるなり立はなれにくき草のもとゝいへる意なりさて上に門引入るよりといひこゝにものりやらずとのみにて車をいはずかく略せる證ども〻なくて文拙く聞ゆべしすべて此文の上手なるものなり

いとゞしく蟲のね云々　もとよりなげきの露も深き淺茅生に御使につけて涙をそふればかこちごともいふべきとなり雲は露をふらするよせも有○かことは託言にて懸着言（カケツケコト）てふ語を略せるなり○こゝのこゝろは後撰秋中に母の服にて里に侍けるに前帝の御ふみ給はりける御返りごとに近江更衣さみたれにぬれにし袖にいとゞしく露置そふる秋のわひしさてふをとりたるなるべし○雲の上人とは宮中にある男女をすべていふ

いはせ給ふ　既に車よせて乘などする間に人して返しをいひ出せしなり

をかしき御おくりもの云々　裳唐衣など一領なるべし

○御くしあけのてうどは上に楊妃のためしをいひ出てことに臨邛道士に貴妃の形見を傳へ贈りしことをいはん料の語をあげて次々に其事を明す且贈り物の事をこゝに書たるは車のうちへおくりたるをおもはせたるなるべし

○或説昔は女御更衣など常に髮をあぐる事本義なり仍髮あげの調度どもを廣ぶたに入たるなり鉸釵の類

なり又一説にさしぐしなどの類なるべしといへり又一説に内の女房ははれのとき髪あげてかんさしなどして髪をいたゞきにあぐるなりといへる皆ばとしたるいひさまなり髪をあげあげさること代々にかはり有又ひろぶたてふ物此文の頃に有しにや物に見えず後の事なるべし委しくは別に論すべし

御さうぞくひとくだり　御休所のさうぞくなり唐衣裳上衣三つをこゝには一くだりと云なるべしされど唐衣裳張袴をも一くだりといふことあり

御ぐしあげのてうどめく物　髪笄差櫛釵子(クワフカンザシサシクシ)また釧(クシロ)合なども入るかこの闕度は掻上の筥に入てかのさうぞくに添へて出せし成るべし上に楊妃のためしをいひ出てこゝにて臨卯の道士にわたせし形見の伏案をなし次にて其事を明す

わかき人々　若宮につきたる人々

うちわたり　禁中

いとさうゞしく　さびゝしくを延たる語なり寂々なりと云は語釋の意たがへり（さうゞしは有べき事有べき物のなくてさびしきを云つれゞはすべき事なくてさびしきを云）

うへの御ありさま　御門

かくいまゝしき　母君の心

うしろめたう　背目痛にてわがうしろの見られずおぼつかなき意を譬たる語なり和名抄に膨護の字をよめる樣にいふ説は妄なり此字をよみたる事なし本より和名抄に出べき事にもあらずかゝる妄なる説多しまどふべからず

すがゝとも云々　清ゝにて心清うはなれ奉りかねたるさまをこゝにはいふ神代紀に到二出雲之清地一（此云素鵝）乃言曰吾心清々之（此今呼二此地一曰レ清）此文に清う云々といふに同じ或説に速なりはやゝなりと有はかなはずそは母君のさやかにおもひはなち奉らぬなり

えまゐらせ　わか宮をなり

おほとのごもらせ給はざりけるを　帝の待ておはすなり

おまへのつぼせんざい（此詞にて此卷の一名とせり）

壺前栽　清涼殿の東屋幷に西庭朝餉幷臺盤所の前にあり延喜元年に草をうゑ木をくはへらるゝよし河海にあり

御らんずるやうにて　命婦の歸參をまちおはしけるなるべし人目をおぼしけるさま哀ふかし

長恨歌の御繪　更衣の別を玄宗の貴妃が歎きにおぼしめしなぞらへて御らんずるなるべし前に楊貴妃のためしも引いでつゞうといへる首尾なり

亭子院　是は寛平の帝おりゐさせられて後に七條南油小路の東に作らせ給ひておはしましければていじの院の帝と申すなり扨その帝人して長恨歌の畫をかゝせられいせ貫之にその心の歌よませられたるが傳りてあるを今桐壺の帝御歎につけて明暮御覽ずるなり長恨歌の屏風の歌は伊勢家集に十首あるが中に詞に帝のとて五首その次に是は后の御歌にてとて五首ありみないせのよめるか貫之集には見えずいかゞありけん

もろこしのうたをも　土佐日記にはからうたといへり

たゞそのすぢをぞ　妻におくれし事のすぢなり

まくらことに　左傳に藉レ辭といふに似て更衣をおぼしめす筋によりたることを下敷としてそれにつけてなげきの御おもひをのべ語らせ給ふなり枕は頭の下にしく物なれば體の中にも第一のしき物なりまくら言にとはその古事を藉ものゝ如く本として必それによりつゝその御なげきの御心をのたまへばいふなり冠辭てふとは少し別なり

いとこまやかに有さまを　若宮又母君のありさまをとひ給なり

しのびやかに　命婦御かどへ申あぐるなり

御返り御らんずれば　母君の返事を御門御らんなり

いともかしこき　母君文の詞

おき所も侍らず　敕書を下されしことなり

かきくらす　なみたにかきくらすなり

あらき風　みかどの露ふく風に小萩が本をいかゞと問せ給ふにこたへてはくゝむ母御休所のあらずなりてみこの末も心もとなきと讀るなり拾遺集長歌にたのもしき陰に二たびおくれたる二葉の草を吹風の荒き方にはあてじとてせばき袂をふせぎつゝ云々といふをもてよめる歟

こはきかうへぞ　小萩に子を添ふ

みだりがはしきを　なみだにくれてえよく御こたへ申しかたきなり心をさめざりける云々といふも右に同しきなり或説に此程云々と有はわろし（本居宣長云

みたりがはしきとは歌のよろしからぬよしなりさて此うた實にみだりがはしき故にかくいへるにはあらず是は紫式部の會釋の語なりこの物語は惣て作りごとにて人々の歌もみな式部が自らよめるなれば歌の次の詞にはかくの如く謙退してその歌のよろしからぬよしをいへることまき〳〵におほしすべて源をはじめて人々の事をいみじうすぐれたるやうにほめたれば夫にかなひて歌もみなすぐれたらんやうに聞えてはいかゞと思ひはかりて歌にはかくのごとく會釋の詞を所々にいへるなり）

いとかうしも　御門

御らんじはじめし年月の　御息所の生れしよりの事を母君のかたりしを奏せしにつけて御門は御らんじ初しよりの事などおぼすとなり

時の間もおぼつかなかりしを　暫時あひみざりしだにおぼつかなかりしにかやうに月日へてもあればあらるゝものなりけりと御身をおぞましきまでおぼすなり「身をうしと思に消ぬ物なればかくてもへぬる世にこそ有けれといふ歌の心なり

故大納言のゆゐごん　大納言の志を母君の聞えしによつて仰せらるゝなりさきに大納言の遺言を母のかたりしまゝに命婦帝へ奏したりしを聞召てなり母の物語を奏せし事をいはでかく書たる此書の例多し妙なり

みやつかへのほいふかく　更衣を宮仕にとの本意ふかく心ざしゝよろこびはとなり

物したりしよろこびはかひあるさまにとこそ　御寵を得て位も昇り長く時めかむと願つらんとなり

わたりつれ　ラメの反レ

かくてもおのづから　細母君をなぐさめ給ふ御詞なり

さるべきついで　若君の生たち給はゞ時を得て榮るを見る事も有べしとなり或說に東宮にとおぼすといふは過たり

命ながくとこそ　母君のいのちながさのいとつらふなどいへりし事を命婦奏しけんをきこしめしての御詞なり

ねんせめ　ねがふなり

かのおくりもの御らんせさす　更衣の母の命婦へのおくりものなり

なき人のすみか尋ね出たりけん　是も長恨歌の心なり

花鳥云臨邛の道士幻術をもて蓬萊山にいたり楊貴妃にあひて玄宗の心ざしをつたへし時楊貴妃其かたみの物を使者にさつけし時金釵（カンザイハシリ）鈿合此二の物をおのおの引折て給ひし由長恨歌にのせ侍りそれは世に無人の手よりたいちに贈りしなれば實に形見なり是はさる事ならねばかひなしとなり

しるしのかんざしならましかば　命婦が見せ奉る御くしあけの調度もかの臨邛道士が玄宗に見せしごとく更衣よりのかたみならはせめて御心もなぐさまんをとなり

いとかひなし　是は母君のおくり物にて楊貴妃が直にまいらせしごとく更衣のおこせしにあらねばなり

尋ね行まぼろし　かの幻のわざする人もあれかしぞれをやりて人傳にても御息所の靈のあり所だにしらばやとなりまぼろしとは幻術する人をいふ幻の字は虛幻詭誕惑人なりと字註にいへり

つてにても　傳

たまのありかを　在處

そこ〳〵としるべく　其所此所といふもカキクケコにて通して皆處の義なり

いみじさゑし　すぐれたる繪師なり

にはひなし　よくかきし繪といへど實の人のごとく艶色の無なり枕ざうしに繪にかきておとる物物がたりにめでたしと聞たるをとこをんなの形

太液の芙蓉未央の柳　長恨歌云太液芙蓉未央ノ柳芙蓉如ノ面柳如ノ眉これ貴妃のかほを蓮にたとへまゆを柳にたとへたるなり太液は池の名芙蓉ははちすなり未央は宮殿の名なり

げにかよひたりしかたちを　此御らんする繪の楊貴妃の芙蓉柳にも實に似かよひたる形にてあるを裴東の唐めいたるは是もろこしにては美麗なるにこそありけめ然其吾朝の風儀ならねばさしてなつかしとも見えずとふくめたる詞なり更衣のかたちは此楊貴妃のありさまにもまさりたりといはんとてなり

なつかしうらうたげなりし　貴妃は物にたとへもせしが此御息所のかたちはたとへん物もなしとなり是より桐壺更衣の事なり

花鳥の色にもねにも　後撰花鳥の色をもねをもいたづらに物うかる身はすぐはかりなり

朝夕のことくさに　言種

はねをならべえだをかはさん　河奥入長恨哥在天願作二比翼鳥一在レ地願爲二連理枝一抄或秘抄云南方有二比翼鳥一焉不レ比不レ飛孫子瑞應圖云王者德化給二八方一合爲二一家一則草木連理略記レ之天曆御集に「いきての世しにての後ののちの世もはねをかはせる鳥となりなん御返し女御芳子」かくちぎることのはだにもかはらずば我もかはせるえだとなりなん

かなはざりけるいのちのほど　前にもかぎりあらむ道にもおくれさきだゝじと契らせ給とありかくひよく連理とも契らせ給へども御休所も獨先立帝も一人おくれおはします事共にかなはぬいのちのほど誠にうらめしかるべし愛別離苦のうき世のならひを思ふべし

かせの音虫のねにつけて　御門の御心物ことにかなしからぬはなしとなり

うへの御つぼねにもまうのぼり給はず　上の御歎故にまうのぼり給ふこともおはさねばこきでんははら立ちたまふ意なり

遊をぞ　管絃

すさまじう物しと　すさまじくは荒たる意の語なり此のなげきの折なるに糸竹あそびはすさまじくつきなきなり

物しとはこゝはさは有ましき事とおぼす意を略して書たり惣ても事を略し物とのみいふこと多し

このころの御けしき　御歎をみる人々なり

うへ人　殿上人なり

かたはらいたしと　今昔物語(古本)に傍痛と書たり今俗そば笑止といふが如し或説に片腹痛なりといふ何の意ともなし

いとおし立かど〳〵　大臣その外さるべき人の薨せしには廢朝とて五日も三日も常朝に臨給はず物の音警蹕などをも停らるゝ法なり更衣などの卒にはさる事なき故にこき殿にはかゝはらず管絃をもし給ふをいふ然れども法は法なり臨時の叡慮に憚らぬはことの甚しきなりこはこきでんの御心ざまを書物ながら惣て臣かたのわがまゝより起れるを顯はせるなるべし或註に押立方の字を日本紀に有といふは僞ごとなり是はたゞ雄々しき心もてきと角をたつる意のみことにもあらずおぼしけち　御門の御なげきを事ともせずなり

月も入ぬ　此詞いとおもしろし

雲のうへも涙にくるゝ　月も入ぬとは記者の語にて歌には月の入しはしろしめさで御涙にかきくれ給ふだに雲の上さへくらく物むつかしきをいかで母君もわか宮もさるさびしき宿に住てあらんと哀れにおぼしやるなり且住を滑にかねたり

おぼしやりつゝ　歌より詞につゞきたるなり

ともし火をかゝげつくして　奥入長恨歌に夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未能眠

右近のつかさのとのゐ申　奥入亥一刻左近衛夜行官人初奏レ時終二子四刻一丑一刻右近衛宿申事至二卯一刻一内裏亥一刻奏二宿籌一(左右近衛式云凡行夜者内裏官人一人近衛一人起二亥一刻一迄二子四刻一但右起レ丑一刻迄二寅四刻一)師禁裡にて左右の近衛夜る甚限をさためてとのゐして時を奏する事あり右近衛のつかさ丑の刻に申事なり夜の更たる事をいへるなり

うしになりぬるなるべし　半夜過たる事をいへり

あくるもしらで　伊勢が長恨歌の給によめる歌の詞なり主すだれあくるもしらでねし物を前に有

猶あさまつりごとは　奥入長恨歌に春宵苦短日高起從是君王不早朝といへるをうけてかけり爰は更衣の御歎にをこたらせ給ふなり猶の字殊勝なり師更衣在世にはゆる〳〵と御寢なりし物をと思召すにつけても猶とくおき出させ給ふ事を物うくおぼしめすとなり

○猶はまたなり先に更衣と御そひ臥の時は日高起きたまひし事をおぼし出るにつけても御かなしみにて今もまた朝まつりごとは怠らせられん樣なりといへり猶てふ一語にて古語を轉じたる上手のわざなり

ものなども　御食物なり

あさかれひ　清涼殿の朝餉といふ間にて供する大御食ゆゑに朝餉の御物といひてこゝにて昔は朝夕二度供せしといへり大床子のおものも同し清涼殿の本殿に大床子を二脚立てゝ供すれば大床子の御物といふ是をば畫の御ものといひて昔は是も二度供して惣して四度なりしを後に右兩樣にて三度となりその後惣して二度に略かれしなどの事禁秘御抄その外の抄どもにもさま〳〵説ありさて右の抄どもに朝餉には近代着かせ給はで女房さはばかりをとるとあるに今此桐壺帝御物おもひの時だにけしきばかりも觸れ給ふといふは此記者の時までは猶むかしのまゝなりしにや

且つ大床子のおものをいとはるかにおほゝしめすとは此御膳は昔は正しく聞召つると禁秘御抄に見ゆげに朝餉にはけしきばかりもふれ給ふといふによるにも大床子は必ずめすこと故に此頃聞し召かぬるをりなれば中々に著かせ給はんもうとましうおぼし遠ざけられ給ふといふ成べしその上朝餉に女房のばい膳にて御心やすく大床子は男の陪膳きとしたることなれば此ほどはうとましくおもほすにも有べし

いとはるかにおぼしめしたれば　此御膳に著せられん事はいとおぼしもよらぬ事におぼすなり

はいせんに　陪膳

さるべきちぎりこそは　前世の宿緣をいふ

そこらの人　其所等の人てふ意なりそこらこゝらてふ詞を多き數の事に用る始めは萬葉卷七に(長歌)可奈之家口許已爾思出伊良奈家久台許爾念出奈氣久蘇良云云とつゝけ云るが如く其所等此所等の二語を合せて數々の意となれりさて其後略して一つをいへども多き數とするなり等てふ語は物の一つならぬ事なればなり後世五々等の音なりといへど古語に字音はなき事なり

この御ことにふれたることをば　後凉殿の更衣をよそにうつし給しなどの類成べし

だうりをも　此物語に書るのみにては道理に違ひ給ふといふほどの事は見えず人のみかどのためしまでいひさゝやぐは例の臣達のかたよりそしらはしく中なるべしもし又その意ならずば記者の此國風を忘れて他國の文に泥めるものなり

たい〳〵しき　退々しき意てふ說ありさも有べし此詞古語にあらず此文の程の俗語なるべけれは字音にて侍るべし或說に斷々なりと云は理りなし甚宜しからぬ御事故に思ひ退かれおもひ恐るゝをいふなりわざとはしわざにて事といふに同じ

さゝめき　こゝは長恨歌に私語二字を訓たるに同じさゝとは惣て小き事にいふ語にてひそかにさゝやぐをいふのみ

月日へてわか宮まいり給ぬ　令條の定父母には十三月の喪にて服一年暇五十日なる事今も同じもとより一條院の御時も此定めなれば此わか宮五十日過はまいり給ふべきなるを祖母のすが〳〵とまいらせずして猶月日を經たりしを其年の冬の比まいり給へる成べしさて更衣の卒は夏五六月の間か命婦御使にまかでたるは野分たちたる秋の事にて七月の末八月頃と見えたるにとくわか宮を供奉して參り給へてふ物有しからは此時既に御暇五十日は過たりし事明らけしさて此つゝきに明る年の春坊定り給ふとあるを合せて更衣卒の年の冬まいり給へる事知べし或說に五歲のとし服過て參られしといふは此文の前後をもよく考へざりしなり

いとゞこの世のものならず　餘りにたぐひなきをいふ

およすけ給　成長し給ふなり

ゆゝしくおほしたり　こゝは大切におぼすなり

あくるとしの春　若宮參りて次年の春

いと引こさまほしう　源氏の君のおよすけて此世にたぐひなくて參り給ふを御父にて御覽じては此時は引こして春宮にもとおぼせど猶おぼしめぐらしてやみ給ふこそ賢き御事なれ惣て后腹ならぬ外は一の宮をおきて引こし給ひては實に世の亂となる事なればなり

御うしろみ　今の都の始までは聞えぬ事にてその後に王威のやうゝ〳〵衰へ給ひ臣の勢ひつのりてのさたなり中にも榮花物語などに花山一條院などの御時ぞ多く御うしろみといふ事をいへり春宮と申さんに何の御うしろみかはいるべき

うけひくまじきことなれば　承引なり世上にて同心すまじき事となり

御おば　若宮の御祖母なり祖母は大母(オホバ)といふを略して於婆といへり伯叔母は小母(クバ)を略して遠婆といふ大のかなはおなり小の假字はをにて分つなり此末に右の祖母の事ををばと書しは誤なりこゝにおばとあるはよし

なぐさむかたなく　前にいひ給ひし如く若宮を常に見奉りて思ひ慰む事だになくて一向に更衣をしたひ歎くのみを云ならん

おはすらん所にだに　萬水母君の更衣のおはします所へゆかんと常にねがひ給しるしにやつひにうせ給なり

又これをかなしみ　御門のかなしひ給なり

みこむつになり給　右の一宮坊に立給ふ年より御祖母の卒までの間に年ありて今年六歲になり給ふなり然るを此所をあしく意得て三年の喪過て先にはまいり

給ふなどいふは皇朝に三年の喪てふ事はなき事なり
其上前後の文をよくよまぬ故に侍り
としごろなれむつび　祖母の意なり
或抄是より母君の臨終にいひし詞なり若宮へなれむつぶれしなり
見奉りおく　御せいじんをも見とゝけ申さぬ事をなり
今は内にのみ　或抄源氏御成人ゆえ禁中におはします
なり
ふみ始　親王皇子の書始の式はいまだ見ず江次第などに見ゆる幼帝の御書始にはかねてよみ給ふべき書と博士尚復とを定てその日に畫の御座に御書案を立て是につきます時に博士御注孝經の序と讀申せば卽そのごとくよませ給ふ御こゑ畢れば尚復これまでと申て是も御注孝經と唱へて退くなり次に饌あり書は孝經五帝本紀貞觀政要など時のさだめによれりさて皇太子は是になづらふなり惣て親王などは殺ぐ事多かれど書は專ら孝經にて博士の樣も相似たるべし只尚復は無ならん大臣家督の書始の儀は江次第に見ゆこれを相取捨して大方を思ひやるべし
はゝぎみなくてだに　妬まれし母更衣のなく成て後だにいとせめて勞たくし給へかしとなり
わたらせ給ふ御ともには　御供にて常には入せ給はぬなり
やがて　すなはちと同し
ものゝふ　是は古へ八十建といひちはやぶる人といへるに同しくたけき人をいふなりさて其建き人勢ひをもて何ものをも伏降する故に物の伏てふ名はありといへり北山抄に物節とかきその外かなふみにもものゝふしとも物のふともいへり
此御はらに　東宮の御はらからたちなり
なすらひ給べき　源氏は殊の外に比なければ外の御子たちは似もつかず劣り給へるなり
御かたゞくも　右の弘徽殿の外の女御更衣たちをいふ凡のちごすららうたき物なるをまして光君にはそむき隱れがたううつくしみ給ふさまなり且弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供にはといふよりつゞきたれば外の御かたゞくへも帝の渡り給ふ時の御供にてはもとよりにて又御かたゞくまうのぼり給ひての御前にても隱れ給はぬなるべし且かくれ給ふは凡帳あるひは扇などさしかくし給ふを云

なまめかしう　物の熟せぬをなまといふ譬ば草の熟してはこはゝ敷をわか草はうるはしうて少女にもたとふるが如くわかく艶なるをいへりそれより轉してはすべて色めくなとをもいふ
さるものにて　本よりしか有べき物なればいふに及ばずてふ意をつゞめたる語なりサはシカの反ルはアルを略けり
すべていひつゞけば　地なり
うたてぞなりぬべき　物の餘りに重なり過又思ふこといとこと樣になることの多きをもいふ新撰萬葉に散と見てあるべき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる是は餘りなるまでにほひの袖にとまりて忘れんとするにわすれさせぬを別樣と書たるなり
うだの帝の御いましめ　こは寛平遺誡の事なりそれに云外蕃之人必可召見者在簾中見之不可直對之見李環朕已失之愼之と有をいふなりされども是はおのつから來る三韓などの人の故ありて必見させ給ふべきを猶簾中にて見給ふとのたまふなるべしきと外蕃の使をして來たるをば專らは節會などのついでに豐樂殿大極殿などへ召て百官威儀を備へて使人拜禮の後に位に敍せられて昇殿せれは天顏顯れ給ふべきなりかゝる事貞觀儀式の正月七日の儀に委し且惣て是は鴻臚館にをらしめてさるべき時に右の殿へは召ありさて此文なるも使人の中にある相人なるべし然其源氏君の相の爲に別に召ことも前誡に憚給ひてめさずその上に皇子と申をもはばかり給ひて大辨の子の樣にてつかはし給ふなり
鴻臚館　此館のことは玄蕃頭の知ることにて寺僧尼の事又外蕃の使その外おのづから來るをも事によりて此館におきて饗應送迎などするなりさて此館昔は奈良にて九條の羅城門の兩方にありしを今の都のはじめに東西の大宮に立てられたりといひ傳へたり且此館のこと令の玄蕃寮の條に委し
○或抄云此館は延曆遷都の始東西の大宮に是をおかる然るに弘仁に東の鴻臚館をもて東寺として弘法大師に賜ふ西の鴻臚館をもて西寺として修因僧都に給ふ其後七條朱雀に鴻臚館を立て三韓の官舍を其中におくと云々今の四塚の邊云々
御うしろみだちて　源氏の御後見のやうにてなり
右大辨　うつほ物語に右大辨の子として相人にあひし

事あるをとりたる成べし且異國人にあふには漢學容儀などある人を用ゐらる大弊はその頃多くは學あるをせられし事故に大弊をつかはされしといふなり光孝天皇の親王におはしませし時高麗の大使王文姫が見奉りて天位に登らん人なりといひ又藤原の仲直といふ相人も此親王を天子と成らんと相せしこと三代實錄元慶八年の條にありて是にやまと相も見ゆこは是を書うつしなり

あてたてまつる　將て行

かたぶきあやしぶ　此人はたゞ人ならずと首をかたぶけあやしむなり

帝王の上なき位に云々　源氏のみこ天位にのぼるべき相おはする人ながらしか定めてみれば亂れ憂ひやあらんと見ゆるよし有さらばとて臣下として天皇を補佐する人になしては既天皇の相そなはり給へるに違ふべしといひたるなり故に臣とはなし給ひたれど此相をしらせて終に太上皇の尊號を得給へりけるをおもふべし此說正義花鳥などのむねに同し宗祇法師の說は文をよく見ざる者なり此文の中に二つの見ればの僻と文といふ語の意をよくみば何の違ひかあらんそなたにてみれば　帝王の相のまゝによりてみればなり

いひかはしたる　こま人と筆談などせしにや

けうありける　興

ふみなど　一說に次に何とあるにつけて是をも詩なりといへど只文とあるからはさはあらず何も又文句なるべし

かへりさりなんと　異國にかへらんとなり

かくありがたき人に　光源氏をほめていふ

かへりては　却而

みこもいと哀なる句を　萬水　源氏君も哀なる詩をつくり給へるにこまうどのめで奉となり

いみじきおくり物ども　こまう人の源氏にさゝぐる物なり此さゝげし物の事梅枝卷にいさゝか出でたり

おほやけよりも　御門よりもこまうどに物をくださるなり

東宮の　朱雀

おほぢおとゞ　二條右大臣

やまとさうを　おふせは負せにて何の仰も其人にいひおはする意なり或注に課の字を書てこゝろみるなり

といふは誤なり課はいひつくる事にておほせといふに同し（本居宣長云此說ひがことなりこゝは相人に仰せて見せ給ふことにはあらず帝の御心に此御子をもしは親王にもなさば人の疑ひなど出來てかへりて御爲によろしからじと考へ給へるをやまとさうといひなせるなりかしこき人の心の古などいふに同じ高麗の相人のことをいへる所なる故にやまとさうといへりかしこきみこゝろにといひおぼしよりにけるといへるをもて實の相人にあらざることをしるべしさてかの高麗の相人のみだれうれふることやあらんと申けるはみづからにおぼしめし考へたる所とあへるゆゑに相人はかしこかりけりとおぼしめすなり）

この君を　源氏

みこにも　春宮にする事はもとよりにて

まことにかしこかりけりと　大和相とこまうどゝ相合し故なり

無品親王の　親王は儲の第二といひて皇太子に事あらん時のまうけなればいとおもくおはして品に叙し給ふにも后腹は三品たゞのは四品より立給へり又幼き時に親王宣下有は多くは無品なり今源氏君まだ元服し給はぬ故にかりに無品親王をもて事をおぼしめぐらすのみなりさていにしへ皇威のさかんなる時は親王は臣下とは格別にて威光おはしつるを此近き御代どもと成て臣下に威のうつりつれば外戚にしかるべき大臣などの有て後見申さぬ親王は位れへもつかぬ樣にておはせりされど父帝の御代久しくばおのづから光君の威もおはさんをわが御よはひも久しからじと覺しめせばいよ〳〵さる親王にてたゞよはさじ臣として政とらせんさらば帝の御いきほひつよりて其身も時失はさらんとなりけにもあさましく皇家の衰ゆかせらるゝ哉天皇のみことといはんに臣の外戚のよろしき御うしろ見なくてはかなはぬ樣になれるは慨すべき事なり凡昔は親王こそ政を知給へれば御門も盛にませしを後には臣下のみかはる〳〵政を執故に王威衰へ給ひて遠き國の者すら我意をおこしつゝ其比よりぞかの平將門が亂も又ほどなく貞任らが亂もおこりにける然ればいかで古へにかへして皇子を執政の臣とし后をも皇胤をたてゝ皇子に威あらば御門の榮まさんと思ふ意よりかくは書るなるへし今より思ふにかの頃臣下のわがまゝせし餘りは終に平家

にうつり鎌倉に及べり是を思ふに此記者は大さに忠臣に侍りしをさる事を顯にかゝば罪をも得べく又俄なる理りは人のよくも心にしまぬ物なればかくこのましきさまの事を表にしてつら〳〵み給はゝおのづからすべらきの御心おこし給ふべく書なせしなるべし源氏の君のはふれたるわざどもはよからねと皆ちひさき事なり記者の大きなる意は前に有ととみゆれたゝ人にて　たゞうどゝよむべし親王にてはなき平人なり臣下の事なり

御うしろみをするなん　大政をとらせ給ふをいふ

きはことに　一きは見えてかしこきことなり

いとあたらしけれど　世に類ひなき光君を臣とせんは惜しきことなれどゝなり

世のうたがひ　天子の位を望給はんと人の思ふべき也

すくえう　宿曜師とて星の行度をもて人の運を見るもの書ありしと或說にいへり今考るに令にも式にも天文博士は出て集解に天文者日月五星二十八宿也云云といひて宿曜師といふことはなし右の天文博士の中よりさる事えたる者を後世にいふ成べし

源氏になし　皇子に源の氏を賜ふは嵯峨の御時よりはじまれり其後あだし氏の名はなく皇子に氏を給はるは皆源なり

おぼしおきてたり　思し定め給ふなり

なくさむやと　過にし更衣の事を思しうれへ給ふ御心を少しもおもひ和み給ふやとなりなぐはなごみやはらぐ事なりさむは進むなりたとへばはらだちたる心の和みて好み進む方にみつるをいふ

なずらひにおぼさるゝだに　更衣になずらふべき人なしとなり

さるべき人々　萬水　更衣のごとくおぼしめす人かあらんとしかるべき人々を御門へまいらせらるゝとなり或抄更衣のなけきをなぐさめやするとてなり

先帝の　此文の本意によらは花山院にあたれどもそれよりむかしのさまに書のがれつればいづれのみかどともさゝで有べし帝をだいとよむは異晉なり皇帝破陳樂隋煬帝などみなたいとよみ來れりていとよめといふは誤なり

四宮　藤壺なり

母后　藤壺の御母后先帝后なり

うへにさふらふ　萬水　禁中にある古老の女房なるべし

かの宮にも　御母后宮

いはけなし　四宮

うせ給にし　內侍すけ御門へ申上るなり

三代の　伊勢物語にみよのみかどにつかへまつりてといふ語例なればみよとよむべし昔にていふ說はあまんせずさて此三代もいつよりてふ事はさゝでよし此文の次を朱雀其次を冷泉と書たればそれに泥て或は光孝宇多醍醐の三代などいふは皆いふにもたらず

きさいの宮の姫宮こそ　是又藤壺なり

ようおぼえて　故みやす所とおもほえまがはるゝといふ意なりすべて此意にて覺えといへる所多し

かたち人　かたちよき人をいへり

まことにやと　更衣に假たりといふをまことにやと御門のおぼしめすなり

ねんごろに聞えさせ　四宮の御入內のことを

東宮の女御の　或抄東宮の母女御と云事なりこきでんの女御なり

いとさがなくて　さがとは古へは性と祥の字をあてゝならひくせと氣さしの事をいひたるをそれより轉りて惡き事をもいへり此所にては弘徽殿の心の惡きをいふ

あらはにはかなく　顯になり是を古へはうつゝにともめのうつら〳〵などゝもいへり今の俗は目の見す々々と云へり

すが〳〵しうも　心きよくおぼしたらず思ひしぶりてあるうらをいふ

きさきも　藤壺の御母后なり

たゞわか女みこの　御門

さふらふ人々　四の宮の女房

御せうとの　四の君の御兄にて後に式部卿なりせうとは此物語などの頃は兄人を延ていふ事とせり本は兄弟のことなり

うち住　入內をいふ

おぼしなりて　始めは兵部卿宮も御母后と同し心に弘徽殿をおぢ給ひしが御母后のおはさぬ時となりて心ほそくてのみおはさんよりはなど侍ふ人〳〵もとりどりにおもひめぐらし定るにつけて宮もげにとおほしなりてまいらせられしとなり

此所の語少しあや切なき樣にもあれと此文にかく略し書たる所々多きなりこゝは人々のうしろみたちと

云を先かきたると次におほしなりてと書たるにて人々のうしろみ申し定むるにつけて宮も同心し給へるをしらせたるなりけり

まいらせ奉り　藤つぼ入内なり

ふちつぼときこゆ　藤壺におはしませばなり藤つぼは和名抄云飛香舍(在弘徽殿北布知豆保)さて同抄に弘徽殿は清涼殿の北に在といへり圖既にあり

○禁祕抄云藤壺、藤蹯二蝦手木一上古非二蝦手木一歟

げに御かたちありさま　典侍か語をうけてげにといふ

おぼえ給へる　故御息所ににたるなり

人の御きはまさりて　先帝の后腹の皇女なり

思ひなしめでたく　人の思ひなし何事も貴くめでたきなり

えおとしめ　弘徽殿などおとしめんとおもへどは皇女の事なればいかにもおとしむる事を得ぬなり是はかくいふにも及ばぬ事ながら猶弘徽殿の妬を見せんとて書るなるべくはた後世は皇女をばおきて大臣の姫君をのみ后に立らるゝをいかにぞや覺えて記者の書るなるべし

うけばりて　此語は承張の意にて何にても承たる如くなすなりこゝは皇女なれば人の貴とむをたふとむまに承てあるをいふ　或說に我はと思ふ義なりといふは誤りなり又諸の字など當たるも遠し

あかぬ事なし　不足なきなり

御こゝろざしのあやにくなりしぞかし　人のそねむにつけていよ〳〵哀おぼすをあやにくといへり

おぼしまぎるゝことはなけれど　更衣の事を

御心うつろひて　藤壺に

こよなく　或說にことの外てふ意といへるは大かた當りたり無越といふ說はわろし無越として末に不叶事多し

源氏君は　前に源氏とせんの御心地にて有し事をいひて其後宣下ありし事は略せり西宮抄云親王女御源氏事(上卿奉勅仰下辨賜宣符於所司)

御あたり　御門の

しげく渡らせ給ふ　こゝは惣ての女御更衣たちの中をいふ内に藤壺もあれどそれは又次にも殊にいへり

えはぢあへ給はず　源氏にえかくれ給はぬなり

いづれの御方も　女御達なり

いとめでたけれど　貌形美なることなり

いとよはう　藤壺なり

せちにかくれ給へど　几帳又は扇もてなとかくれたまふなり

もりみ奉る　源氏藤つぼを

かげだにおぼへ給はず　源氏三のとしに別れしかば

わかきみこゝちに　源氏

なづさひ　なれむつぶ事なりといふ說は近し萬葉にふる雪を腰になづみて夏草を腰になづみてとも又船鴨などの沖になづさふとも常の間をなづみ來ましてなどもよめる皆そこによりとゞこほる意の詞なり然れば人になづさふも是なり

御思ひどち　藤壺と源氏をば同しく共に帝のおぼしめすどちなり

なうとみ給ひそ　勿〻疎てふを勿を先いふは古語なり萬葉にな戀そな佗そなどいふ類なり

あやしくよそへつべき　こゝの樣は源氏を藤壺の御子とおぼせてふ帝の御心なるをかく書まぎらはせしにやと仰られしなりげに此卷の樣楊貴妃の樣をかたへはいひうつしたる事あるにかの玄宗の夫人卒て後に貴妃を入且祿山を寵して貴妃の子としたまひ祿山末に貴妃の宮中に通夜せれども玄宗疑はざりしとなり今御休所の卒て此藤壺を入て源氏と親ましめ給ひ終に密ことに至れり聰て此文は急に心得べからぬ樣に書る事多ければ心をやりて見るべし

なめしとおぼさで　無禮の字をよめりこゝの心もさなり此語は貴むべき人をおし平等たるさまにあひしらふをいふさてさ樣にするは禮無ことなれば轉じて無禮の字をも用るなり

さて源は帝の御子なれば帝も藤壺に少し心おきて仰らるゝなり(宣長云いとようにたりし故うせにし更衣の藤壺に似たりし故に源氏の御母とよそへて通ひて見え給ふも似つかぬ事にはあらずとなりにたりしのしは過去のしなれば更衣のことにあらでは叶はず)

かよひて見え給も　似かよひてなり是卽右の御母子ともいふべきことわりをとき給ふなり

にげなからず　似氣無にあらずなり(本居云ナミ反ニなれば並氣なきなり)

聞えつけたまへれば　仰せなれ給ふてふ意成るべし

をさなこゝろ　源氏

こよなう　是に過て越る物なきの義なり

こゝろよせ　源氏の藤壺へ心よせなり
この宮とも　藤壺なり
そば〳〵し　物の角あるはしたしくよりつきがたきに
　譬たる語なり　抓稜(スハヤ)は四方木なり　蓍麥(スハヤ)は三稜子なり　皆
　語樣同じ
うちそへて　藤の姫にそへて源をも
物しとおぼしたり　源をもにくみ給ふなり
世に比なしと　是は帝の藤壺を見給ふ御心なり　名高う
　おはするとは御かたち人なりと世に名だかきさて此
　二つをあげてそれよりも光君の猶まさり給ふをいへ
　り
見奉り給ひ　帝の
名高うおはする　是も同し藤壺の御かたちの名高きを
　いふなり　右と引つゞけてよむべし　此名高きを舉てそ
　れよりも增る光君をいはん料なり　或說に弘徽殿の御
　腹の皇女たちをいふといへるはわろし
なほにほはしさは　是よりは源氏を云猶はまだなり
光君ときこゆ　一條院の御時彰子后宮藤壺にませし時
　かゞやく藤つぼと聞え薄雲女院又同し藤つぼにおは
　せし時かゞやく日の宮と申せしこと榮花物語に見ゆ
　是をうつしたるなり然れば男君をもさる類ひありて
　光君とは書しにや或說に敦慶親王是忠親王など又日
　野家の系圖に左大臣高明公を光源氏と有しよしいへ
　り此中には高明公は讒にあひて左遷し給ひなどせし
　事その外にもおろ〳〵この源氏に似たることもあれ
　ばこれをうつしたるにやされど全くあたらぬは物が
　たりなりのちの考の料にいふのみ
かゝやく日の宮　藤つぼ
この君の　源氏の君
いとかへまうく　あげおとりとて元服しておとり給ふ
　とあればなり
十二にて御元服　或說に人生れて十二を一周といふこ
　の時冠りするは和漢の例なり禮記に天子之子十二而
　冠といへり
ゐたちおほし　居にも起にもなり
かぎりある事に事をそへさせ給ふ　一世の源氏の元服
　の式もあれど夫とはいと異にて事に事をそへさせ給
　ふといひ春宮の御元服にもおとさせ給はずとあるか
　らは親王元服の定めよりも猶そへさせられしてふ意
　なり然れどもこゝのやう親王元服の式にあたれる事
　も多ければ別記に西宮抄のその儀を引ていへり
天皇出御　親王着座
　引入者孫庇南二間
理髮者親王座東
　髮進掻鬢出了親王退引入退
親王拜　加冠依召着御前座
　理髮給祿　牽出物
又召御前　宣陽殿西廂設饌春興殿西庭立屯食三
十具　內藏寮備酒饌賜王卿殿上人本家獻物王鄉
已前入執
　上卿候御前孫庇　祿
　　或叙品
此外一世源氏元服の式は却て略す皇太子御元服の式
　など西宮抄江次第などに委し
南殿　紫宸殿なり
よそほしかりし　韮嚴の字にあたる
ところ〳〵のきやうなど　北山抄云所々饌膳之事　王
　卿　廂女房　別納　殿上　藏人所　兩院諸大夫二百
　膳　穀倉院屯食五十具　廂別納各二十具　以上應和例云
　おほやけことに　親王以下元服の饌などはねもごろに
　その里かたよりするを今光君は皆公より遣させ給ふ
　さればその方のものゝおろそかにもやせんとてとり
　わきて仰らるゝとなり
こくさうゐん　穀倉院なり　拾芥抄云二條南朱雀西在
　大學西納畿內諸國銅錢無主位職田及沒官田太宰稻
　等諸莊物勅年中饌有公卿及四位五位別當預藏
　人等或云朱雀門前云云續日本紀なとに穀布をも收
　めらるゝとみゆ
とんじき　花鳥云屯食は元服の人の本家より諸陳の役
　者にわかち給ふ物なり西宮抄に見えたり孟津云屯食
　ツヽミイヒト訓下萬に下さるゝ物なりなどいへど今
　考るに屯食は幾十具と諸記にしるしたれば器に盛り
　て物に居たるを一具と云べし且台記(春日詣の條)屯
　食幾十具裹飯(ツヽミイヒ)幾百とあれば屯食をつゝみいひと訓と
　有說は誤なり(屯食は今世に二重の臺といふものぞ
　その遺制ならん)
おはします殿　清涼殿也天皇常におはします故にいふ
　且つ親王と一世の源氏の元服は此殿にてあり天皇と
　皇太子のは紫宸殿なり

いしたてゝ　倚子とは主上の御腰をかけ給物なり西宮抄に親王元服の時はひるのおましを撤して大床子二脚をたてゝ出御あり源氏の元服には殿上の倚子をここへうつさるゝ事もあれど此度は親王の式によるべくおぼゆ

くはざの御座　冠者なり元服する人を云

ひきいれのおとゝの　其日冠を著せまいらする人冠者のもとゝりを冠に引入るゝ故に然いふ此度加冠の大臣は葵上の父左大臣殿なり

みづらゆひ給へるつらつき　束帶にはあげみづらにし宿衣にはさけみつらにす源氏今日はあげみつらなりゆひ様は雅亮裝束抄に委し

大藏卿藏人　家々の説に此詞は兩人といへり當には一人と心うべきなり下の詞にきよらなる御くしをそぐ程とあれば理髮の人と見えたりしかれば藏人頭が大藏卿を兼官したるなり藏人頭の大藏卿なるべし又大藏卿の藏人とも云々し代々理髮は大藏卿例なり河説同

たへがたきを　懷舊の心なり

心つよくねんじ　或抄祝儀の折ふしゆゑかなしからぬ體をし給なり

御やすみところに　冠著休所なり康保二年八月御記云下侍東第一間旋立屏風其中敷土師二枚茵一枚爲二親王換レ衣所一西宮抄に親王下下侍改衣といへり下侍は殿上の次を云

御衣奉りかへて　元服已前は赤色の袍のわきぬはぬを着し給へり元服已後は脇をぬひて黄なる袍を奉りかふるなり

おりてはいし　東宮の御元服は南殿にて堂上にて拜あり是は堂下にてある故に皆泪おとすといふ義ありされどもたゞ源氏の容儀進退を感ずるこゝろしかるべき歟親王已下の元服拜舞は清凉殿の東の庭にて御前にむきてあり仙華門より東庭に出て拜舞と西宮抄に云

おぼしまぎるゝをりも　故御息所を

むかしのこと　更衣の在世ならばとおぼしめしてなりきびはなる　いとをさなきをこゝにはいふ

あげおとりやと　童の面の平めなるにはみづらをよせてゆひたれ面の長めなるにはひらきて結と雅亮がしるせりされば其かみをあげてはかくれなければあけおとりするも有ことなればかくは侍りと仰られしとまことにめでたう示りぬ

あさましう　をぞましきまでの意なり

みこばらに　葵上母は桐壺帝妹なり仍御子腹と云なり

うつほの藤原君一世の源氏にて才能世にすぐれたりしかば時の太政大臣のひとりむすめに御かうぶりし給ひし夜むこにとりてかぎりなくいたはりてすませ奉り給といへり

御むすめ　葵上

東宮より御けしき　葵上のことを

おぼしわづらふ　左大臣どの

御けしき給はらせ給ひければ　葵を源氏に奉らんのよしを御門へうかゞひ奉りし事をいふ然れば御門此御元服の折から此みこの御後見の爲にもなどもよほさせ給ふ仰もありしなり

このをりの　けんぶくのをりふしなり

そひぶしにもと　いと若きほどの婚をいふなり

もよほさせ　御門の催し給ふなり

さおばしたり　左大臣殿の心なり

さふらひに退給ひて人々大御酒などまいるほど　酉宮抄の親王元服を考るに加冠の儀終て皆殿御前を退き冠著舞踏など有て後に引入と理髮とを御前にめして祿引出物など賜り退て後に元服せし親王の曹司に引入を召て酒錄などあり其後又引入を御前へ召て宣陽殿の西庇にて饌を設させられ此時は王卿も御前の孫庇に候して酒肴を賜ひ樂舞など有なり是を以てみればこゝに侍に退て大御酒などまいるといふは此度は曹司へ召て酒錄はなくて下侍にて酒まいることゝせしなるべし（曹司にての酒錄は不定と有りしは此度は無よしなるべしさて下侍にて盃酒例有とみゆ）或説に此時に天皇もおはしまして饌ある樣にいへるは誤なり此次に引入を内侍御前へ召といひ又光君へ左大臣どのゝけしきばみ給ふと云など御前にてのさまならず

そひぶし　或抄云延長十二年十月廿二日保明親王の元服の夜故左大臣時平女參俗謂副臥乎（李部王記）

親王たちの御座の末に　一世源氏の無位は臣の三位の下に着こと後世のならひなれど此度は別勅にて親王の下臣の大臣の上に着給ふと見えたり花鳥に李部王記延長七年當代の源氏二人元服の時盃酒御遊の間兩

源氏四品親王の次に若仰に依てなり無位の人なれば親王の次に若べきいはれなき故に別勅有しさまにて如此かけるかと覺たりとあり今考ふるに惣て皇統をは昔にかへりて臣より上なるべく書くは此文の例なり

おとゞけしきばみ　細流の説のごとく賀にせんけしきをほのめかし給ふなりといふはよし此外に甚だわろき説どもありまどふことなかれ

ものゝつゝましきほどにて　いにしへ鞬とりなどは自らいふ事とは見ゆれど今日は餘りにきとしたる着座の時なれば物つゝましくて答へもし給はぬなり

内侍宣旨うけ給り傳へて　既に擧る西宮抄云加冠依召着御前座（内侍於廂妻戸召引入女藏人授給祿下長橋不着沓於庭前拜舞云々）これに同しく女官の内侍の傳へて大臣を召なりさて傳へてと云は職員令に尚侍勅を承て掌侍に傳へて告るよしあり是に依に今の意は掌侍の傳へ承て出て大臣を召をいふなり且ここに内侍といふは掌侍を指なり或説に藏人の宣下を内侍宣（ナイシセン）といふをおもひ誤りたる事ありその意ならば内侍宣ありておとゞまゐり給ふとこそかゝめ内侍宣旨を承り傳へて云々と書て文をよく見ず其上西宮抄の旨をも忘れたるものなり

おとゞまいり給ふべき召あれば　おとゞは殿上より清涼殿にまいりたまふなり

大袿　袷うちきを二つかさねたるを云と見ゆ只うちき一かさねといふは袷の袿一つに單を下にかさねたるなり女のうちきに對て男のを大袿といふと有説はいかにぞや委しく考ぬ説なりさてうちきは袴（ハカマ）に同じくて裔のあこめよりは長きのみのかはりなり

ひとくだり　春宮の御袍御下襲御袴と三つをいふべし

江次第の天皇御元服の御祿に太政大臣は春宮の御表衣御下襲表袴とある是なり

右に引西宮抄親王元服の錄に白袿一重御衣一襲大臣加白橡と有此御衣一襲と書るは明らかに意得がたし右の江家次第の如く衣下襲袴など樣に有けんを落しゝにや

いときなき　後にいとけなきといふ源氏のまたいとけなき今より妻を添臥ともして行末長く夫婦とせん心をけふの初もとゆひに結びこめつるにやと御心もしかおぼすよしをのたまひおどろかせ給ふなり既に内

内は奏しけれどけふしも定かには知かたかるべきにかく御こゝろばせある御歌を給はりければ更におどろかせ給ふとは書たるなるべし

むすびつるこゝろも深き　承るごとくその事をふかくむすびこめて侍りさる上此末長く心かはり給はでおはさばいかにうれしく侍らんとなりさて元服のもとゆひの紫色によせていろしあせずばてふはさる事ながらかくよみしも此姫君の末ながゝらぬ前祥をしらせていへるなるべしはつもとゆひのこ紫は拾遺の歌によみたり

ながはしよりおりて　長階より下て沓を不着舞踏（西宮抄）

ぶたうし給　舞踏するなり

ひだりのつかさの御うま　左馬寮

藏人所の鷹すゑて　花鳥に引入の大臣の錄には馬鷹などはなきなり限り有事に事をそへ給ふといへる是かと今考るに西宮抄親王元服里亭にて有に鷹の事見ゆ吉部祕訓抄にも此例有よし侍りひたぶるになき事ともいひがたし

○さて令の時司鷹正あり天平寶字八年に廢して放生司をおかる其後又主鷹司をおかれたり又後に藏人所にあはせられしなりよりて今は藏人所のたかと書り

みはしのもと　清涼殿の御階の下

つらねて　列てなり

をりびつ物こ物　（折櫃ををりうづとよむ折に入たる物なりといふはいかにぞや此文にをりびつと書たればさは訓べからず）折櫃物籠物なり諸記錄にはさゝげもの、惣てをさして獻物（コモツ）とも書き又外に折櫃物と云て籠のものを更に獻物（コモツ）と書たるもあり依て思ふに籠は枝に付けて王卿のとりて奉る物故にこと更に獻といふ俗稱のあるなるべし且或説に五菓は柑橘栗柿梨といへり又纓膳松五菓は松子榧棗榴栗と見ゆ事に隨ひて用ゐ分るにや○花鳥云親王元服の時は獻物あり王卿以下是を取て庭中に列立す第一の大臣一人座に留て何々の物と問ば上首の人奏て書く其たてまつる御贄（ニエ）と申て各物の名を奏す其時大臣仰て云くかしはでに給へ卽膳部内膳司等すゝみ出でうけ取なり一世源氏の元服には獻物なきにや但此物語には事を加へさせ給ふとあれば親王の例をもて獻物など右大辨うけ給りて用意せるにや今考に西宮抄裏書に親王元

服獻百棒又六十棒などあり

右大辨なんうけ給はりつかうまつらせける　その方々の手人などに調せさせけるをいふ天慶三年二月右大辨源清平奉ること吏部王記に有と西宮抄裏書にみゆ

○又后服親王の時は近衛奏樂と見えたるを此度はそをばせさせ給はぬなり

ろくのからびつ　親王以下元服にはこれをたてず東宮の御元服の時なりその故次の詞に東宮の御元服に數まさりてとあり

ところせきまで　所もなきまでと云心なり

其の夜おとゝの里に　吏部王記延喜十二廿一保明親王（或云于時十歲）元服夜故左大臣（時平）女參俗謂副臥大鏡寛和元年七月十八日三條院（親王の時）御元服同日皇太子（十一歲）法興院太相國女尚侍（綏子）副臥と

みゆ○聟取の事は江次第類聚雜要抄假字裝束抄などに委し

さほう　婚禮の法なり

よにめづらしきまで　左大臣との源氏を御ちそうの事なり

きびは　戸令に三歲以下爲黄といひ黄口の兒てもいふは鳥のひゝなに譬へて黄といへりそれをもて黄といひひわとは雅弱なるをひわづなりともひよわしとも又弱くたわめる物をひわ〳〵するなどいふに依にまた幼少にてよわきをいへり然れは假字もきひわと書べし

思ひきこえたまへり　左大臣

女きみはすこし過したまへる　葵上十六歲なり

いとわかう　源十二歲なり

にげなく　似合ぬ心なり

このおとゞの　左大臣

内のひとつきさいばら　葵の上の御母君は桐壺帝の御妹

ものあざやかなるに　他にすぐれたるをいふ

東宮の　朱雀

右のおとゝの　萬水　弘徽殿の父右大臣は朱雀院の御祖父との義なり

御子ともあまた　左大臣どの御息多きなり

みやの御はらは　葵上の御母

くら人の少將　はゝき木に頭中將といへり

河海執政息補藏人少將例清愼公（實頼）貞信公一男

母宇多院皇女源順子延喜十九年正月廿八日仕左近衛權少將延長四年二月廿五日補藏人

右のおとゝの御中は　萬水　左大臣と右大臣の御中はよからねども御子の少將をむこにとり給て四の君にあはせ給となり

おとらずもてかしづき　源氏を左大臣のかしづき給ふにおとらずとなり

あらまほしき　他より評せり

うへのつねに　御門

さとすみを　今は左大臣殿の方を里といふ

こゝろのうちには　源氏

にる人なく　桐壺に似たる人世上になきなり

おほいとの〻君　葵上の事なり

ひとへ心に　をさなきほどの心はもとよりながら末々も此偏心はおはせり

おとなに成給ひて・　元服より後をおとなといふとみえたり此頃の文に今はをさなき御ほどにつみなくおぼしてと書たればこゝは只齡にはかゝはらず元服の後をいふなりと花桐壺の卷は源氏君の十二にて元服までの事をかき侍れど此詞にて十二より後の事をふくませて中侍り帚木とのあはひ十三より十五の年までの事はかけたるやうなれど此一段の詞の中にこもりて侍るべし

ありしやうにみすの内にも　元服の後は事をわかち給ふなり源氏おとなしく成給てはまへ〳〵のやうには藤壺の籠中へもいれ申されぬなり

琴笛の音にきゝかよひ　琴は藤壺笛は源氏のものゝ音にもあへる說はよし次下にも似たる事あり凡和漢ともにさる事多きなり

ほのかなる御聲を　藤壺の物のたまふ御聲なり

内ずみのみこのましう覺え給ふ　藤つぼを戀しう思ひ給ふ故

五六日　ごろくにちと音に唱ふる例故に此文に日數にかな書なし

たえ〳〵にまかで　葵の方へは

たゞいまはをさなき　萬水　源氏君葵上にうと〳〵しくおはしませどもいまだおさなくおはしませばとがを見ゆるし給て猶もかしづき給となり

御方々の人　葵の御方にも源をすませまいらする方々にもよろしき女房たちを撰みて侍らせらるるなり末

になみ〳〵ならぬ女房を侍らすると云事かたぐ〳〵にもあり

萬水　奏上にさふらふと源氏の御方にめしつかはるゝ女房たちとをえりとゝのへ給ふとなり

おふな〳〵　或説にねんごろなる意といふは違はねどいかでさる意となるてふ事をいはねばかひなし今考るに伊勢物語に「おふな〳〵思ひはすべしなぞへなくたかき賤きくるしかりけりてふは其のはしがきに合せみるに身の分に負たるほどの戀はすべし不平等に賤きか貴を戀ふるは成らでかく苦しみをするといへり（今の注共は誤り多し）それを古本に隨分と書たるに依に身の分に隨ひたる重荷を負にたとへていふにて例多し然ればわが心にのこりなく物をなし物をいふは是忠なる意にておふな〳〵とはいふを轉じてはねんごろなる事ともなるなり

御心につくべき　源の勢なり恐まりとふとむをかしつくといふつくに同じ

いたつく　桐壺なり

淑景舍　桐壺なり

里のとのは　是は故御息所の里なるを源氏の領し給ひて後に二條院といふなり 花榮花物語にかくて大殿十五の宮の（盛明親王）すませ給ひし二條院をいみじくつくらせ給てもとよりおもしろき所を御心のゆくかぎりつくりみがゝせ給へばと云々とあるをこゝにうつしてかきしなるべし今案法興院は二條京極にありもとは二條院と號せるを正暦三年に法興院とは名をかへられたるなり源氏の御里の二條院は是になずらふべきにて

すりしき　修理職

たくみつかさ　内匠寮

になう　似なくなり六帖に似なき物といふ題にて歌有似るものなくなり二無は誤なり（本居云なみ反になりなみなくなりといへり）

池のひろ〳〵　池の底をも又中をもいふ詩歌ともに同じ

河樓額題追鵠池心浴鳳凰（白氏文集）

苔生石面輕衣短荷出池心小蓋疎（朗詠）

敷ぬとも影をやとめむ藤の花池の心そ有かひもなき（躬恒）

かゝる所に　源氏此の御心より終に紫の上をこゝにす

系給へり

おもふやうならん人を　異二の心ありたゝ大方思ふやうならん人をと思ひ給と又藤壺の事とを心にかけての給なり

なげかしう　奏を源のみ心にいらねばなり

ひかる君と　かの高麗人の光君とはめで聞えたりしを此世の人の聞傳へて唱ふる事を先にはさとはかゝでこゝにいふ事の樣にいひ此所にいたりてかくいふを合せて意得る文の一體なり貝兩説とのみいふ注は文を意得ぬわざなり

萬水　是は高麗の相人源氏の御形のひかるごとくなるにめで奉りて光君とは名付奉るとの註の詞なり 細源氏の名の事をかきあらはせり西一條右大臣源光といふは仁明天皇の御子才人也

いひつたへたるとなん　細紫式部わがかきたる事を人にしらせじとなりいづれの卷にも此心あり

萬水　此詞奇妙なり元來よりある事のやうに書なしてさすが又此卷の初のごとくおぼめきてかきはたしたるところ類なきものなり

源氏物語新釋

箒木

此卷の名は源氏の君紀伊守が中川の家へおはせしに空蟬の君のつれなかりしを「はゝき木の心もしらで」そのはらの道にあやなくまとひつるかなと讀給ひしにつけて女も「數ならぬふせやに生る名のうさに有にもあらで消るはゝき木とよみたるなどによれり（是は新古今に是則歌として「その原やふせやに生るはゝき木の有とは見えてあはぬ君かなとよめるをもてつゝけられしなり）されどそは此卷のいと末にして此專らと見ゆるは雨夜の物かたりなるをいかなる故にやと思ふに凡此物語の始終のやうかの品さだめにこもれり然れば桐壺の卷は系譜のごとく此品定は序の如くにて其桐壺につゝく品定の中の事は專ら卷の名を負すべからずされば源氏の女を繫想し給ふ始めはかの空蟬の君なれば名とせしにやあらん○或說に此物がたりは作ごとながらまたむかし有しことを面かげにして書り五十四帖も有物かとみればなくなき物かとすれば有物なれば此はゝき木の一部の名と夢のうき橋と云ふ名にて始終せりといふはさる心もある事なりしかれども頻りに儒佛の書を引ていふには思ひ過しつけそへなる說の多さなり此文の意はさる物を專らとして書るにはあらで別に此御代のならはしのあしきをいかで天皇のみごゝろづき給へかしはた女のこゝろざし用意などの爲にもと思ふ記者の意にぞ侍るべき然るに程なく始の樣とことに成て漸にわろざまなる事の多きを思へば書もて行くまゝにながれたるにや又わざと書まぎらはしてつみをのがれんとかまへしにもやさる事は末の卷々所々にていふべし○是は源氏十六のとしの事なるべし

光源氏　是は上の卷のはての詞をやがて更ていへり

名のみこと〴〵しういひ消たれ給　此語つゞけてよむべしことゞ〴〵しうの下にて切はわろし此君心には色このみ玉ふに上べはまめだち給ふを先上べに付てしらぬかほにて記者の評するさまなり好色の方名のみこと〴〵しうまめなるをいひけたれ給ふなり

とが多かんなるに　是を上につゞくるはわろしさて罪うる事の多にかあらんにてふ意なり

すきごとゝも　是は古語にはあらで風流（みやび）或は洒脫（すいだつ）或は好色などのことをいふなり○或說に日本紀に逸字を訓といへるは妄なりさることなし又數奇の字を文集にいふと有りひが事なり數奇は漢書李廣傳に出でさくきといふ語なればすきてふには大にことなり

かろびたる　かろ〴〵しき

人の物いひさがなさよ　古今集に人の物いひさがにくき世にとよめり此語は前に解たり

さるはいといたく　上の詞をうけて然るからはてふ語なるを略してさるはといふいともいたくも萬葉に甚大痛など書て同事なるを此文の比になりてはいとは最の意とのみ思ひてかく重ねたるなりけり

まめだち　實なり日本紀に忠誠又忠一字をも訓したりこゝは實日の意なりたちはめきといふに同じくその有樣をいふ辭なり

なよびか　なよ竹といふがごとくなびき來てなよびゆきなどいふ轉じてはなまめく事ともすびはぶりの反にて是もなよめくてふに同じ辭なり麗の字をなよびかと訓といふ說は妄なり且びを淸（スム）べしといふも誤なり

かたのゝ少將には　此少將の事はおちくぼ物語にも少し出づ枕草子にかたのゝ少將てふ物語の名は出たれど今は傳はらずさて此文にておもふにいとすける名ある人なるべし源氏は上べはまめだち給へば猶いまだしなど笑んといふにや且物語の人にて物語の人を評するがをかしきなり

わらはれ給ひけんかし　爰迄は記者の評なり

まだ中將などに物し給ひし時は　近衞はもとより玉體にちかきまもりなればかごとゝして內すみのみし給ふなり

しのぶのみだれやと　古今集に「みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑに亂れんとおもふ我ならなくにとよめるをいせ物語に少しかへてみだれ初にしわれならなくにと有をこゝにはとりて書たり葵上のわれに心はなくて誰その人故にか光君はおもひ亂給ふにやわが方へはうとくおはするといふ意なり且いせ物語に右の歌をとりてしのぶのみだれとよみたる詞をば用ひて意は右の融公の歌に有なり

まかで給ふ　內より退出

さしもあだめき　すきたわみてなびきやすくさしあたりて好色めきめなれ行べき女をしたひ給はずなりが

たきをあながちに戀給ふ御うまれつきにて人のうたがふとはことなるをいふ此心を（空蟬槿などを戀給ふこれなり）次々に書たるを先あけいふなり

さるまじき御ふるまひも　なりがたきを戀給ふ御くせゆゑにうつせみふぢつぼなどの有まじき御しわざも有しなり

ながあめ　霖　五月ばかりの事

御ものいみ　湖禁中の御物いみなりものとはものゝけばけものなどのものにて則鬼の事なり萬葉にものといふ詞に鬼の字を借用ひしこと多くあり○いみはいみつゝしむなり天災地妖はもとよりいさゝかの凶祥あしき夢見などにも三日斗門をさして物忌といふ字を紙に書て簾帳などにむすび付てつゝしみゐるなり此頃陰陽師などの說專ら用ひられていさゝかの事にも御物いみ有しと見ゆ

いとゞながゐ　源氏の君は大内に久しくおはしますなり

おほいとの　源氏の御臺葵上なり葵の御父は左のおほいまうちぎみなる故そのおほいをもて御よび名に申なり

おぼつかなく　源の御心をよろづの御よそひ　湖源の御裝束なにくれ　何これにて何やかやと同じてうじいて　調たゞこの御とのゐ　源氏の事なり

宮ばらの中將　頭中將の事なり左大臣殿の御むすこの中にて頭中將は桐壺帝の御妹三の宮の御腹故に宮腹と申なりすべての宮かたの御はらに生れ給ふを宮ばら大臣の御むすめかたの御はらを殿ばらといへり○頭中將は源の君と母方の從弟なり

右のおとゞの　湖四の君に住給ふ事前に出

かしづく　かしこむといふに同じ物をたふとみおそれかしこむなりたふとみおそるゝ事は必おろそかにせぬ故に大切にする事にもかくいへりいつくいはふはもとは異なれど宋にては同じ心に用ふ萬に錦綾乃中丹裳有齋兒毛云々竹取に几帳のうちよりも出さずいつきかしづきやしなふほどに伊勢に人のむすめのかしづくなどいへり

すみかは　姫君のすみかはなり四の君にあはせてもてかしづけるよし桐つぼの卷にあり

頭中將

この君もいとものうく　中將の君も源の葵に御心のとまらぬごとくに四の君をものうくしてなり

すきがましき　すきは好きらひのすきにてこのむといふに同じ此物語にては風流なる事と色好のかたにいへりがましきは好色らしきなり

あた人なり　徒人なり四の君の爲にはなり

さとにても　修理美兒の心ないふ　頭中將の父左大臣殿の御方なり

しつらひまばゆく　しつらひは家居の修理なり遊仙窟料理の字を訓り僧尼令に料理佛殿（義解謂丹堊塔廟之類也）まばゆくはまは目なりはゆきはかゞはゆきこそはゆきのはゆきに同じ日のきらめくにむかひがたきをまばゆきと常にいふもきらきらしくて目をうばふをいふなり

君の出入したまふにうちつれ　源氏の君の大内をも御館をも出入したまふに頭中將さそひあひ給ひてなりよるひるがくもんをもあそびをも　萬心置玉はぬなりをさ〳〵　長々といふことにて專らなる意なり次のをさ〳〵人すくなにてといへるは少き方に專らなる意にいへり萬に等夜乃野衾乎佐藝禰良波里乎佐乎佐毛爾奈敝古由惠爾波伴爾許呂波要とあり此をさ〳〵おもひあはすべし

かしこまりもおかず　かしこまりは畏禮なりおかずは心もおかずの類なり一世の源氏なれば恐禮をなすべきをしたしさにかしこまりもおかずなり大臣の君達と一世の源氏とは後世いとことならぬ樣なれど此文の比までは一世の源氏は貴く有つらんが中に既に元服の宴席の座も大臣の上に源氏着給ふと書たれば其の君達はかしこまるべき理なるをむつましき御友なれば相いどむ成べし

つれ〳〵と　つらね〳〵といふ事なり良禰の約禮なればつれ〳〵といへり扨つらね〳〵物を思ひつゝをるはいとまありてわざなき時の事なれば淋しき意にもいへり

しめやかなる　此語は雨などふりて物のぬれしをるゝかたよりいでゝ何にてもしめりやかなるをいふ轉じてはしづかなる事にもいへり

よひのあめ　夜雨

御とのゐ所　湖源氏の御ざうし桐壺をいふ

おほとなぶら　大殿油なり乃安反奈になれば約めていへり卽ともし火なりきり燈臺きく燈臺の類なりむす

び燈臺は儀式の時庭などにてともすなり式にも夜もすがら御殿にある燈を大殿油と書り

ふみども　是は書物なるべし

みづしは　御厨子なり厨子の圖雜要抄に委し

いろ〳〵のかみ　折にふれことにつきてさだまれる色はあらねど類聚雜要抄御厨子の紙筥の料紙に柳重畳麥菊紅葉或は陸奥紙など見えたり

ふみ　是は艶書

中將　湖頭中將

わりなく　無理（ムリノナキ）の上のことを略きたるなり

かたは　烏の片羽とり出たる詞なりうつぼに烏のかたはにによせてよめる歌多くありさればかたはと書わの如く唱ふるは普便なり片羽は不具なる事故に見にくき事にもいへり（うつぼ初秋　天烏のはねやかたはになりぬらんいまはおと矢に霜の降らん　四季のうち　秋の夜のかすをかはさんしぎのはの今はおと矢のかたはにはせん）

さりぬべきすこしは　湖中將にみせても左もありぬべきをばみせんとなり

かたはらいたし　傍にて心いたくおもふなり俗にそばはづかしと云がごとし今書古本に傍痛と書正字なりかずならねど　中將の我身をいへるなり

おのがじゝ　万葉に各寺師人死爲良思妹尒戀目異鼠沼人丹不所知（オノカジ・ヒトシニスラシ・イモニコヒニケニヤセヌ・ヒトニシラレヌ）おのがさま〳〵てふほどの意なり上のしは濁るべし自恣の音といへるも古語とくみちにたがへり此詞紀にも何にもなし

ゑんずれば　怨の字音にてうらむる意なり

やんごとなく　記者の語

おほぞら　大空はとりしまりなき心にいへりと此は切に隱し給はんは箱やうの物に入給ふべきを只打おくべきづしにちらして有べくもあらずてふ意なり然れば大空なる御づしと云なりさるを今の本におほそうとかき誤れるをそれにつきて大惣の字なりなど注せしはいふにもたらず大そらとはばとしたるをいふ常のことなるをや紫の日記に心にくからんことおもひたる人はおほぞらにては文やちらすらんなどうたがはるべかめればと云とあるをおもへばいよ〳〵大そらの誤にやあらん

二の町　一の町は專らなる町二三はそれが次のものゝ居る町といふ意にて次なる事をいふ俗語なり

かたはしづゝ　端つ方ののみみな見て未まではえ見ぬ心づかひなるべし

かくさま〳〵なる　頭中將

心あてに　おしはかりになり

ことすくなにて　詞すくな成なり

をかしとおぼせど　源氏

そこにこそ　源氏中將をさしての給ふそこは其處にて其許といふに同じ万にそこ〳〵といふに其所此所とかけり足下といふは誤なり其處にこそか〳〵る文はあつめ給ふらめとなり

さてなん　さありてのちにとの心なり

これはしもと　しもはかならずしもはるしもの類にて心をいひいる〳〵詞なりなんつくまじきとは此人はしもかならず難のなきといふは有まじきとなりこれは下の數條の論に冠らしむるにて條々に此理を盡せり

さてねじけがましき覺だになくば物まめやかにしづかなる心のおもむきならんを終の頼所には思ひ置べかりけると云ふ結着せりそれ迄の間のよしあしを次々につくせりこゝにおのれが論あり別記にしるせりやう〳〵なん見玉へしか　此事をやう〳〵見知たるなりかく自らの事に給へといふ事をいふは自得したることにいへり「大祓詞に祓給清給といひ出雲國造神賀（ギホ）に恐美恐美申賜久（マヲシクマヲシク）とみつからの事にいへり人をあがめていふことく自得しませる意なるべし

たゞうは（表方）べ斗のなさけにて　是より女の難ありて心にかなふ事はなき事をひとつ〳〵にいひたてらるゝなりこの品定といふ事を式部のかける心は世にあるとある女の難なきはなき物なればいづれにても相そふ女のうしろめたき事だになくば少々の難は堪忍してそひはつべき事と世の人にいましめんためにて侍るべし

はしりかき　文などはしかきなり筆をはしらかせて事を得がほにかくなり

をりふしのいらへ　折ふし歌などよみかけしかへしなどまにあふほどは心えてするなり

その方をとりいでん　手かき文作り歌よみなどのことのうち一方の撰にかなはんはあることかたしとなりいとかたしや　至てすくなきなり

我心えたる事斗を　是は一かた得かほ成も猶さばかりのことならぬを心やりなくて他をおとしむるなどは

僻々しき人からなり
おのがじゝ心をやりて　人もほめぬにおのかてにわれこそ物しれりとなり
人をばおとしめなど　人をいひ消すなり
親などたちそひ　是は親のもとにかしづく女のさまなり是までは惣ての女の上を評して是より種々の女を評するなり
おひさきこもれる窓のうち　生ゆく先籠れるなり長恨歌揚家有レ女初長成養在三深窓一人未レ識
かたかどを　片方なり其人の藝などをすこし聞つたへてしたふなり末摘花の琴ひき給ふと聞て源氏の心とどめ給ふ類なり
おかしく　ゑみわらはるゝをいふ笑わらはるゝはおもしろきときの事ゆゑおもしろき事にも又轉して今はよき事にもいへり
（本居玉かつま云田中道丸か考に物をほめておかしといふはおむかしのつゞまりたるにておの假名なり又笑べき事をもをかしといふはをゝといふ言のはたらきにてをの假字なりおむかしは古言にて書紀に德字又は傾感などをおむかしみすとよみ續紀の宣命にうむかしとも見え萬葉におを省きてむかしともよめり）
うちおほとき　うちは詞なりおほときは大人めきといふ詞なり俗に大樣なるといふに同し穩なる意といふも廻らしては似たれども下におだやかともおだしくともいひておほとかといひたることなし
まぎるゝことなき　親に養れて雜事なきほどはかなきすさみをも　わざとゝりたてたる事にはあらず手ずさみのやうなる事をいふすさみは進にてこゝろにすゝみくるをいふそのすさみの内に歌よみこと引などをもこめていふ
ゆゑつきて　此文にゆゑよしありてともよしありともなどいふは物の故事由來あるをいふなり何事も自らの好みに任て爲出したるはいやしくあしく古人のあとにつきていにしへ樣を意得置てなす事は雅にして物ことに古のさまを心得て爲さまなるをいへり万に故緣（ユヱヨシ）とかけり
みる人　彼女を媒する人
おくれたる方　其女のあしき方をばなり
それがしかあらじと　それはさやうにまで萬そろひて能はあらじとは押はかりには知れざれば人のいふゝによからんと思ふなり
それしかあらじ　それは左はあらじとなり
うめき　歎息
はづかしけなれば　四の君のかとなきを恥つる成るべし
いとなべてはあらねど　源氏はまだ世を廣くは知給はねど
われもおほし合することやあらん　是もいづれの女ともしれず末摘花はいまだ知給はず
ほゝゑみ　含笑なり万葉に梅の花いまたふくめりといふは花のまだひらけず含てあるをいふそのふくとほゝと音通へり人の頰をほゝといふも物ふくむ所なればなりゑみは心にめでおもしろむときの事なれば愛みの心なりこゝは少し愛（エ）みをふくまるゝ故にほゝゑむといへり
其かた　源氏
いう　優なり長勝（クヤウスクレ）たるなり
いとさばかりならん　頭中將
かずひとしく　共にすくなきといふなり
人の品高く　是より上中下の三の品を擧てことわるなりさて品高く生れたるはこゝの詞にてはよろしき樣なれど右におくれたる方をかくしてと云專ら品高き人に有べく下にやんことなきあたりのうち〳〵のもてなしけはひおくれたらんは更にもいはず何をしてかく生出けんといふかひなく覺ゆべしといへるなども品は上にて人のわろきをいふなり
かくゝることも　あしき事のかくゝる事なり
けはひ　氣しきなりはひは僻のみ
こよなき　ことの外といふ程の詞なり古語にはあらざるべし古へは聞えず中務集にみゆるぞ歌によみたる初成べし又巨の字音なるべし此なきは無の意ならず荒をあらけなしといふが如くて僻なりさて此頃字音を國語のことくいひなす事多し或人越るなきてふ意といへど此文の末に至りて叶ぬ所有
中の品　下に受領の女などを中の品に定めたり明石入道の女窓蟬などは此の類の中にて勝れたるなり
かた〳〵おほかる　へだておほきなり
下のきさみ　下の階にて下々なり五節又は源氏のめくみ給ふかた〳〵の女房たちの類成べし
みゝたゝずかし　耳にもとまらぬ事なり

くまなげなる　いづこのかくれをもしりあきらめたるをいふ中將かく殘る隱なげにの給へば猶事くはしくとかんことをゆかしみおぼすまゝに問を設出てとかしむるなりさて其品いかに云云とは右の如きは一わたりの品なり猶それが中にもきざみ〳〵こそあらめとて問分くるさまなりくまは隈曲などの字をかけり

其しな〴〵　源氏

もとのしなたかく　よき人のわろく成たるなり

なほ人　なみ〳〵の人といふ事にて直人といふに同し

かんたちめ　上達部にて公卿をいふなりめはむれの約なりむれは群集の意にて部類ある物をいふ

けぢめ　分目(ワカメ)なり此ふたつのわかちめをばいかゞ意得んとなり

世のすきものにて　今の世にてのすきものとなりさてこゝにては好色のみをいふに非ずさかしく風流なども有をいへり

物よくいひ通れる　物の理の始終をよくいひなすなり

中將まちとりて　中將の左馬頭にゆづりていはせらるゝなり

いときゝにくき事　彼是と辨へ爭ふ故おのづから聞にくき事も多く有と記者の詞なり

なりのぼれども　是より十八問答第一段馬頭詞前の二の品を左馬頭の評するなり惟光か娘藤内侍のすけなどにあたれり

さはいへどなほことなり　なりのぼりしをいへど種性よき程にはおもはずとなり

やんごとなき　惱(サハ)ことなきなり貴人高位はよろづの事とゝのひ家の内たらはぬ事なきもの故ものことにやましき事なきなりされば高位貴人をやんことなしといへり此段末つむ花にあたれり

たづき　手著にてたよりと云と同し萬に大海のたつきもしらぬとよめり古今の一首によりて立木と意得るは誤なり萬に鶴木又和豆木(ワヅキ)と豆の濁音を用ひたりきを濁るは誤なり

うつろひて　うつりかはりて

心はこゝろとして　いせ物語にまつしくてもなほむかしよかりしときの心ながらといふをもて書たりと見ゆ心は昔よかりし時のまゝにていやしぶれたる事なけれど何事もたらはねば自らいろひたる事もいでくる業なればよき人の落ぶれたりとかろき人のなりのほりたるはいづれをいつれといひがたしと馬の頭さま〴〵に云ことわりてかの二種を共に中の品に澄べきといへるなり

わろびたる事ども　人目わろき事なり

とり〴〵にことわりて　かの二種をみな中の品といふなり

ずりやう　受領にて國の守なり是は京官よりはいといやしむる官ながら富るもの故家の内とゝのひてよろしき事多し右の中の品の釋をあけいふなり

人の國の事にかゝづらひ　部の外の他國の政事をとりおこなひてなり職員令を按るに受領は職事多き官なればかれこれことにかゝりあふ故にいふなるべし

品さだまりたる　國守は京官よりいやしく位も定りたるものなれば品定りたるといへり

さざみ〳〵ありて　受領より宰相までのぼりし惟光か次第階級ありて也むすめ大臣の後にて受領に下りし明石入道のむすめの類中品のうちにもきざみ〳〵あるなり

けしうはあらぬ　けは萬に殊異などの字を用ひてあやしくことなる事をいふいやしきものは常人のさまに似ず大方は見ぐるしきものなればあやしの賤とはいへりあやしくはあらぬつねざまにしてあしからぬをいふ

ころほひなり　えり出づべきほどのものどもなりとなり

なま〳〵のかむたちめ　なまとは物のまだなまなかなるを云本の家がら高からぬ人の時をえて三位になりたるをなま〳〵のかんたちめといへり三位かぎりにて參議の上達部にはいたられず

非參議の四位　非參議の四位は終には大臣とも成べき家の子のまだ四位の大辨なる程の名目なり是はおとろへたるならで盛まつ程の賤官の人の女のをとしめがたきなり常に二位三位に昇りたる人のいまだ參議に任せぬを非參議といふ前官の人は大臣以下政事にあづからず公事にまじはりかゝはらずといふ義にて前官をさして非參議といふことは異なり

かはらか　是はなま〳〵の三位よりも濁(クヅ)と異なる意とみゆされば濁の字音をやはらきていふなるべし此頃は惣て字音の語多きなり

まばゆきまでかしづける娘　大切に育るなり明石上など此内にも入べし

宮づかへに出たちて　桐壺の更衣に當れり
すべてにきはゝしきに　源のの給ふなり源氏は何の意
もなく右の論どもにつきて賑はゝしく宮る方による
べきなりけりと戯ての給ふを上の宮仕に出て幸ある
といふは御母更衣に意ちかくはたうちあひてよろし
く又自然にわろきふしはかくるゝなどいふは頭中將
のかたなどにあたれば中將は耳とゝめてにくゝおも
ふとなり心得ず仰せらるゝなどいふ語にて知らる
こと人の　頭中將
心えずおほせらるゝ　中將左馬頭と辯し定め又は爭ふ
ことも有なり
もとのしな　馬頭
中將にくむ　思ひかけぬ幸とりけるは源氏の母君にあ
たり又おのづからわろき方隱るゝなどいふは頭中將
の方などにあたれば何事も當世次第などは源氏の御
答には有まじき事なり外人のいはんやうに心えず仰
らるゝとて中將にくむなりこゝにて一段きれて又そ
のやんことなきがおとれることを書るは右馬頭も右
の源の語をとりなほし論ずる意なるべし
うち〳〵のもてなし　内々に其女をあしくそだても
てなしたるなり
何をしてかくおひ出けんと　いかやうにしてか樣にそ
だちしぞと其女を見る人のおとしむる意なり
うちあひて　そろひてなり薄雲は中にいとすぐれてこ
こに當らず葵など似たらんか
なにがしが　左馬頭自いふ
さて世に　夕貌に似たり是より後めづらかなる事と心
もおどろかぬ程の人の右馬頭が及ぬ所はさし置て下
品の中に又めづらかに心とまる事ある類ひをいふな
り
かぎりなくめづらかにはおぼえめ　前のうちあひて勝
れたる人のめづらかなる事と心もおどろかぬといへ
るをうけていへるなり
いかではた　いかにしてかくはありけんとなり
たがへることなん　おもひの外なる心なりかやうなる
住家には不相應なればいとゞ心とまるなりおもほえ
ず故郷にいとはしたなくてありければ心ちまどひに
けりと伊物にいへるを書のべたるものなり
ちゝのとしおひ　女の父をいふむづかしげにとはふつ
つかにむさげなるを見るに心むづかしきなり右二種
の女は同しくて事をかへたるのみなり藤式部が妹に
あたる事は則下に見ゆ又田舍におひ出て父のふるめ
かしき明石の上の事に若紫の卷にいひ或は伊豫介の
妻などのことも悉く此内にこもるべし
物むつかしげ　むさげなることなり
おもひやりことなる事なき　外よりおしはかるにゆ
かしき事もなきなり
いといたく思ひあがり　その女身をけだかく思ひあが
りをるなり
はかなくしいでたること　手かき琴ひき歌よむなど
なり
ゆゑなからず　故事由來あるをゆゑよし有といふを轉
じてこゝろありげなるをいふ
かたかどにても　只片方にてもなり其女のごとくなる
はさやうなる中にうまれて片方にてもしいでたらん
は思ひの外の事にて面白くとり所有事にては非ざら
んやとなりきずなきを撰方てふ意なり方を上にいひ
たれば誤る說有り
すぐれてきずなき　きずなきをえらむかたてふ意なり
さるかたにてすてがたき　勝れたる事ならねどもかの
獨思ひあがりて爲出たる事もよし有るはまたそのほ
どゝにてすてがたしとなり
いでや　源の葵上だに御心につかぬをおぼすべしとい
ふ意にて書る成べしいでは發語の辭なる中に日本紀
にも萬にも乞の字をよみたればこふ意有てあたりて
いふ語なり
かみの品と思ふだに　葵上は上の品ながら御心につか
ずたゞ藤壺に似たる人もがなと思召せどもいまだみ
あたり玉はぬをくみとりて記者のいふなり
白きみそ（源氏）　みそとは服をすべていへどこゝは御下着の
單袴などの白きをいふなり一條院の頃よりは小袖と
いふものも出こしといへどもなよゝかなるとあるか
らは小袖にはあらじ
なよゝか成に　やはらかなるなり
直衣ばかり　直衣は内々の裝束なりとのゐ裝束といふ
ゑぼしを用ひ又冠直衣を用ふる事もありばかりとい
ふは下襲をばぬきて單などの上に直衣のみ着玉へる
をいふならんさしぬきもなくてといふはいかゞなり
束に右大臣どのゝおはする時なほしに下襲の尻なが
く引きて有しをおほきみ姿といひたり此時のみなら

す常にも御門の御前へ出玉ふ時など常のひるのさうぞくは直衣に下襲ならんさらば下かさねを去たるを直衣ばかりといふべし

ひもなども　直衣のはこえに付たるひもをいへり常は袖の付ねのほころびより内へゆきてふところにてゆふなりこゝは曹司に退てよりふし給ふなれば解捨たるなり姉に直衣ばかりありて紐なともといふ間におのづから帶もとき給ひしことをしらせて書たり

そひぶし給へる　何となく物のきはによりかゝりたる體なり

めでたく　愛痛てふ意なり

女にて　女になりて見奉らまほしとなり

此御ため　源の

かみが上をえりきても　既にいひたる語の始終なり

さま〳〵の人　左馬頭

大かたかの世につきて　大よその世間の人の妻をよそよりなり或注に是は源氏などの御ためには上か上をえりきてもあくまじきといへる事につけてすべて誰とても撰〳〵ては定めがたからん心をいへり前に頭中將の女のこれはしもと難つくまじきはかたきといへりしと同し心なり但中將頭の心はひとへに色好む心よりいへり左馬頭はいづれの心も我物とたのむにはなんありてさだめがたければたゞ少しのなんは堪忍して見初し契りを捨がたく思ひとまらばとまるべきものなりといはんとていへり

おほかる中にも　女のをのこのおほやけ　女のみにあらず男にもたらひたる人は稀なる心をたとへにいへり

世のかためと　攝政關白をいへり

まことのうつはもの　實に其任の器

まつりごち　まつりことしを略していふなりとしの反ちなり政はまつろへことの義なり

上は下に　史記に上含二淳德一以遇二其下一下懷二忠信一以事二其上一これは君臣をいふ今は三公諸司百官のうへをたとへに擧たり家あるじは只一人にして相たすくるものなければさる人の有がたしといふなり

しもはかみに　諸司百官は三公になびきしたがふなり

せまき家のうち　相たすくる人なき物なればさる人の有がたしといふなり是より一家の女あるじの事を云ふ

たらはでもあしかりぬべき　家のうちを治るも天下の如くさま〳〵の事有て其本妻の心たらはでは叶はぬ事なり

とあればかゝり　古今集俳諧歌に　そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさにといへるはさなりとて左へすれば右へより逢んとすれば行違て遊るいづれにも物こと行違ひておもひのまゝにならぬ事をよめるその歌をもとゝして女のうへに何事もそろひて心にかなひてよろしき人なきをいへり

そへには萬葉に重き馬荷にうは荷うつといへる詮をよみたれば今も添荷の意なるべし故にとすればかゝりといへりこれは左すれば右有てふ語にて左に荷を添れば右へかたむきさらばとて右につくれば又左へかたむきするごとく世の中のことはよくつり合とゝのへる事はあらぬものなり

なのめにさてもありぬべき人　・大槩にの意なり斜はかたむきたる事なり然れば眞直なるもなけれど片々全からぬをいふ

すき〳〵しき心のすきみにて　たゞ好色の心のみにて女の有樣を見合するにてはなしとなり心に叶樣もやとえらみそめては定がたきなり

思ひさだむ　わが物と

おなじくば　我男のいさめをからで女の心得てよろづあるをとえらぶなり

えりそめつる人の　是らは卽末に見ゆる源氏の心なり我思ふにかなはねどみそめつる契り斗をすてがたく此事多し葵上花散里末摘花などなり

えり初つる人の　人のとは男をいふさやうに萬事たらふ女なければつひには心にかなはで定りがたし

我思ふにかなはねど　十分に叶はねどもなのめにさても有ぬべきほどならば堪忍せよとの心なり

おもひとまる人は　其女に思ひとゞまりて妻とするなり

物まめやかなりと見え　實なる男かなと見ゆるとなり

心におしはからるゝ　一生難くせなくてそひはつる故なり

されど何か　上の心にておしはからるゝといふ心を受て先は心にくゝ思はるゝ女もあれどもなにやかやと世の中をみしる時はまことに心にくゝゆかしき事も

なしとなりなにかの下を暫切べし
心におよばず　心におよばぬ事もなくゆかしきことも
なきなり
たぐひたまはん　配偶すべきとの心なり
所せくおもふたまへぬ　上々なる人はよろづ其類す
くなく下か下又はかくろへたるかたまではいたりた
まはねばとところせきなり馬の頭などはいかなるく
まをもうかゝはれてことひろき身だにしか斗及ばぬ
きはあらぬをましてやんことなき君達をやといひ
のこしたることばなりこと葉を前後にいひて文をな
せる一體なりこのこと葉ある木になきはわろし
かたちきたなけなく　又一つの女の樣
おのがじゝはちりもつかじと　おのがてには身たしな
みをよくするからなり潔白に身をつゝしむさまは次
の文によりてさはみゆ
おほとか　大人めきなり大やうにの意既出
ことえりをし　詞をえらみなり六條の御息所にて文か
きの上手なれば是にあたるべし
墨つき　墨付なるべし手つき口つきなどいふべきに同
しありさまをいふなり書たる墨いろ筆づかひまでを
さやかにも　清の字なりさきなる文はさだかならねば
又さやかなる文の手つきも見ばやとて文をやるにす
みやかにも返しせでいかに〳〵と待なやましむるな
り
すべなくまたせ　思はせぶりなり
わつかなる聲聞ばかり　是より木枯の女の類なり「こ
れは漸にいひよりて物ごしなどにて逢ふにものいふ
ものもいと幽にしてしかも詞少なり右の文に引つゝ
けて思ふはわろし似たる事をいくらもいへるなりさ
て右の如くならばいよ〳〵さるみさをなるにやと思
へばさはあらで心のほどをばかくしておもてを作る
なり是はすべての人の心さと思ふ故に記者のまづか
く書て此物がたりに實なりと見えたる夕霧薫君など
うち〳〵の心にはあらぬ人をこひなどして一人もお
もてうらともに全くはあらぬ事しるしたるにやいか
さまとし行たる人はおもてうらなきもあれどわかき
程はいろこのまぬ今も少きを其頃のすべらぎなどひ
とつにのみおほすにつけてわろき事もありつらんを
さとらしめたまへてふ意にあらん

ことすくな　ことばすくなきなり
いとよくもてかくすなり　我身の内心のあだ〳〵しき
をあらはさぬなり
なよびかに　萬葉になよ竹のとをよる妹といふに同じ
く姿のなよゝかなるなり是れも一種の女なり物やは
らかにして女らしきなり
女し　今昔に光遠か妹云々はそやかに女めかしければ
といふによるにめかしを略して女しといひしなり
餘りなさけに引こめられ　又或女のなよゝかに女めか
しと見えたる有さて心にたてたる所もあるはよろし
かるをさるさまなるはなさけのかた過て艶なる情に
引こめられてさるにつきてしたしみとりいりて見れ
ばあだなる心あるなり此女より上にはまだ入たちて
見たる女をこまかにはいはずこゝに至て女の難をい
へばこれを最初の難に擧たり
とりなせば　とりよりて心みればあた〳〵しきなり
ことが中に　是は悪くの中にといふならん右の如き難
の有が中に又一ッ二ッをいふなり
なのめなるまじき人の　なほざりならぬ人となり是は
よろしき家の女あるじをいふならん然ればものゝ哀
を知はよろしけれどさる方をのみ知過して折ふしの
なさけなどの無をいふさて見たるといひ切て又それ
に似たる一種の女を委しくいひてその中に右の女の
よろしからぬを相待てしらしむるなり
うしろみのかたは　介抱の心なり隨分よく心得てのこ
る所もなきなり
はかなきついでの情　花もみぢ月雪などの折ふしに物
かき歌よみ琴ひきなどなり
其たぐひの風流の方の心がけま
ではなくても實だにあらばと思ふに又さのみにもあ
らざる世間なりといふなりその方のなさけもなく
てはあしきなり
まめ〳〵しきすぢたてゝ　是は專らまめなる方をこそ
とのみ心得たる女なり右に筋をたてゝと書たり
耳はさみがち　伊物古本に高安の女髪を卷き上てみづ
から飲匙をとりたるをいふがごとく偏に事をなす時
髪のうるさければ耳にはさむこと今もいやしき女な
どには有事なりかみなどもゆふことはなくてそゝ
き髪を耳にはさみなどするさまなり（嘉鄕按に夕霧
の卷にも雲井雁大勢の御子あつかひの時に耳はさみ

といへりいそがしき時ふりにもかまはぬさまなるべし）

ひさうなさ　俗に貧相などいふに同じ俗語なりなさは荒けなきせはしなき冥加なきなどのなきと同しくそのことをつよくいふ時の俗語に多し下のはしたなさと云とばの注にいふを合せ見るべし

いへとうじ　もとはとじとのみいへるなり俗に家といふこと葉をそへとじをとうじとのべいへるなりとじのとは戸にて家のことなりじは主の上略なり日本紀には戸母と書て親自といふと有古の例家の内の事は其家にて第一の女とりはかる事ゆゑ家の内第一の女をさして戸主といへりそれより轉して女の通稱となれり和名抄に老女の稱といへるは凡をいへるなり萬に吾子のとじともよみたり宮主をみやじと云がことくなるを中比より又家てふ語を上にそへていふは俗になれるなりさればとうじのとは濁るべからず

出いりにつけても　男の出入なり

たゝすまひ　本は立居の語を以てひろく物のありさまをいふならん此ゐはたがへりたゝすまひたゝすまふたゝすまへと働く言なりゐならず是は他人の上我身のうへよきにつけあしきにつけてなり

うとき人　外人

わざとうちまねばんやは　語らんやはなり

ちかくて見ん人　我本妻なり

きゝわき思ひしる　物の道理を聞わけ思ひわきまへばなり

かたりもあはせばや　男の心にては我妻とかたりあはせてなぐさまんとおもへど女のいふかひなきゆゑにさもなければなり

うちもゑまれ　これは語も合せばやとてとつゝきたれば其女のいふかひなきを打わらはれ又かゝるものと相すむ日をしさに泪くまるゝといふなるべしさなくてはいひつゞけたる意通らぬが上に次にうちそむかれて人しれず思ひ出笑もせられ哀とも打ひとりごたるといふ詞その妻の事を笑ふならば思ひ出といふべからずこれを思ふにこゝは都てその愚なる女をあざけりゑまるゝにて次なる公私に有し事を思ひ出て獨笑し獨歎といふなるべし又上も下も同しく世に有し事をかたり合さんよしなければ思ひ出て笑もあはれともいふにて同しきに似て少しことなるを二ツ擧たりとせんかされど上の詞のつゞきはさとも聞えず

さしぐみ　泪の目のうちにさし含むを略してさしぐみといへり

あやなき　こはさしておのれのみはらだつべきにもあらぬ事故にあやなきといふか益なきといはんがごとく用ひたり本の語は緒などの文のわかち無より出たる詞なり

おほやけ　是の下に私といふ詞落しならん

そむかれ　背向なり

ひとりごたるゝ　獨言せらるゝなり

あはつかに　淡々しくおろかなるなり

さしあふき　おろかなる人は空をあふぎてゐるものなり俗にそらふくといふに似たり

口をしからぬ　口をしき事よとの心なり

ひたふるに　一向になり

こめきて　紫日記に小少將の君をいふ所に心ばへなども我心とはおもひとる方もなきやうに物つゝみをしいと世をはぢらひ餘り見ぐるしき迄こめい給へりはらきたなき人あしざまにもてなしいひつくる人あらばやがてそれに思ひ入て身を失つべくあえかにわたりなき所つい給へり餘りうしろめたげなる云々これをもていとわかき女子めきたるてふことを知べし或説に亘めきたるといふはいとわろし

ひきつくろひ　女を萬づ敎たつるなり

なほし所　かたくなるは手も付かたしやはらかなるは直きるゝものなり所とはとり所といふ所の類なり

げにさしむかひ　かのこめきやはらかなるをうけてげにといふ

らうたき方に　あいらしきなりかの心もとなきつみをも見ゆるすべきをとなり

ふかきいたり　心の行いたりてはたらく事

そば〳〵しき　物のかどあるものをばそばといふ和名抄楊木（和名曾波乃木）とあるも今いふにしきゞにて木にかどあればなり角あるものはへたてになりてよりつきがたきゆゑ隔意なるをそば〳〵しきといふ蕎麥をそばむぎといふ今工匠の語に四方木の角をけづるをそばをとると云も同じ

をりふしにつけて　前にをりふしにしいでんわざといを

ふに對するなり萬の事にたとへていへり何事の上にも一丁節ありてよろしきなり

いではえ　出葉なり

くまなきものいひも　物の隱れたる所を隈と云くもりかすみのなき馬頭がものいひにも定かぬるなり○先の貌きたなくて物をよく引かくしたるがまことの心はあためくと○なのめなるまじき人の後見のかたのみにて折ふしのみやびもなきと○たゝまめ〳〵しき筋のみたて丶貧相なる女のかひなきと○こめきやはらかなるが立はなれてみづから爲出る心なきと○をりふしは出はえする如きよき事もあれど常に心のそば〳〵しきもつねに相見るにくるしかるべきなど四種の難をいへりかゝれば凡の女この難に似たる事も多かるべければ左に右に全き人はなしといふこゝろなり

いまはたゞ　かくあふさきるさなるのみなれば今は品高きにも形よきにもよりがたしとさとり得たるなり一部の大意なるべし

しなにも　家がらなど

ねちけがましき　萬葉にねぢけ人を佞人と書たりこゝにねぢけがましきことだになくばといへるはくねくねしからぬをいふなるべし是は上にいとことたらはぬ事など有と又くね〳〵しくむづかしき心有とをのぞきて物まめやかにしづまりたる心だにあらばと定むるなり

よるべをぞ　終に思ひとまりて妻とするなり

あまり　餘分なり

ゆゑよし　萬葉に故縁聞（ユエヨシキヽ）てと有は由來の義なりこゝは何事も心ありといふがごとくたゞゆゑとばかりもよしとばかりもいへりさてかのまめやかにしづかなる心有を本としてその餘り物によし有樣又は心ばえもよろしきなど添へるは得ものにして悦ふべしとなり

あながちにもとめ　しひて難とて求めくはへしとなり

うしろやすき　上のうしろめたき（背目痛）にむかへてうしろや（背安）すきなり上のまめやかにしづかなるてふに同じ心なるが中に是は少し上より弱き方なりのどけきは物ねたみつよくせず萬にはらあしからぬなどなり上の物まめやかに云々爰のうしろやすくのどけき所だにつかばてふを或說に葵紫の上などをあてたれど葵はさるに似て心にほこりて物のなさけなし葵の卷などにも有たれば右の歌にあたらず紫は少しねたみ給ふ事はあれどもよきほどにしておはさばかの打すてぬ數もありてくね〳〵しからねばみなこゝにあたるべし又明石君花散里玉かづらなども此中にはこもるべきなり

うはべのなさけは　內心だに正しくば外の風流は自然にもてつくべしとなり

えんに　艶になり

うらみいふべきほどの　或說夕かほにあたるといふはかたくなし似たる程の事といふべし

うへはつれなく　下心には怨めしきをもおもてむきはなりなどをつくり

みさをつくり　古書に見えぬ詞なり後拾遺に匡衡卿の歌に衣をかくる竿によせたるによれば女の心ざし竿のごとくなほくしてたわまぬにたとふか又志のかはらぬをときは色の蓑青（ミドリ）にていふか青をさをといふは万に有　一説葉のうへはつれなきうらにこそ物からかひはつくといふなれ後撰集にいづ　一あるが上に又ぬきかくるから衣みさをもいかゞつくりあふべさ後拾遺にいでたり花みさほとはしらずかはなる心なり松の操といふも雪霜をもしらずとさはなるをいふ

すごき　是はたゞすゞろけきてふを略せる語なりすゞろはそゞろと同しくて本は心も心ならぬ事なり夫を物おそろしき時身も心もそゞろなるにも用ひいせものがたり古本に蕭の字を用ひたるなど思ふべしさてこゝは物すごきこと葉をのこす事何にても有べし

しのばるべき　戀慕はるゝなり万にしのぶとは專ら慕の字を用ふ

海づら　海邊なり

わらはに侍し時　左馬頭が

物がたりよみし　伊勢物語に或女の　一いてゞいなみ心かろしといひやせんとよみたると有常の妻のあまになりたるなどを兼て猶事をそへてかけり

ことさらび　ことさらめきてあしき事なりとなりびはふりの反にてそのさまをいふ僻なりわざと爲出たる如しとなり

心ざし深からん男を澄て　是より女のかる〳〵しきよしをとく

人の心を見しらぬやうに　本より男の淺からぬ心をば知つゝかりそめにうき事有とて書べきかは伊物にかしこうおもひかはして云々といへるごとく夫の本心は既に知りたるを臨時につらきやうの事あるに短慮にて家出するなり惣て大本を見ず小事につけてねたむ女の性なり

心ふかしや　愛着をはなれて菩提心に趣き給ふべきなりなどはむるにつけて情のすゝみて尼になりぬべしとなり

世にかへりみすべく　還俗の心などかつてなきなり

かくはたおぼしなりにける　かく尼とさへなり給ふまでの思し入よとなげくなり

ひたすらに　是は男の心なり女の心と見たるわろしうしとも思ひはなれぬをとこ聞付てなり

なみだおとせば　是は男の樣をいへり此上に人來とむらひと云は女の方なり爰にていひさして男の方をいひて又つかふ人といふよりは女の方をいへり一句〳〵と彼と此とを交ていふも文の一つのさまなり

きゝつけて　尼になりしを

ふるごたち　古御等なりふるは老たるをいふごたちとは本朝文粹に女をあがめて御といふとあり其注に俗謂二貴女一爲レ御蓋取二貴人女御之義一なりとあり詞はやう〳〵に下るものなれば後には女の通稱となりて貴人ならぬ女をも何御等などいへるなりこゝは仕る女房の中におとなしきをふるごたちといへり扨尼に仕ふる人男の心を聞傳へて尼にいふなり

君の御心は　君とは男をさしていふさて其男の心ざしをかたりてさるに今尼になり給ひしはあたら御事といふなり

あたら御身　大和に平仲が色好ける盛にといふより男と世にいみじき事にしけると云までの語是に似たり

みづから　女の後悔するけしきなり

ひたひがみ　古しへはそぎ尼とて髮の末をそぎたり或說額髮をばことに短くそぐ故にいふと云り

あへなく　遮無なり

うちひそみぬべし　口をひそむるにて泣時の口つきなりひそむはまゆをひそむのひそむに同じ万に百年爾(モヽトセニ)老舌出(オイシタイデ)而與余(ムトモソレハ)年友(イトハシコヒハ)吾者不厭戀者益友此歌を六帖に老口ひそみなりぬともとよみてのせたり万にてはおい舌出てよゝむともとよむべきなりされどもふかくお

くちひそみとよめる義こゝに叶へり万葉のは老人の口つきをいひこゝは若けれどもなく時の口つきをいふなり

とあらんをり　左あらん節も

かゝらんきざみ　右あらん時刻をも

みすぐし　こらへて

ねんじえず　堪忍しがたきなり

家も人も　其男も女もなりいせ物語に男は何心もなきを女のさせるふしもなきに家出して終の名殘思ひて歌よみかはしたる此あたりに多しそれをもて是を書

なか〳〵　なまなかなり尼になりてくやむは尼にならぬよりあしきなり

ひろめつらんと見ゆるなり

なまうかび　道心ならぬはなり尼法師となりて道に入は濁れる泥より浮み出るに譬る事を以てこゝには尼になりて又濁りを思ふ故になまうかびといひさてはなのめにうつろふ　妻をまめに思はでなのめにしてあ

中〳〵にしても迷ひたゞよふべきといへり

だしかたへ男のうつれる心有なり師說是は又はじめの恨いふべき事をもいはぬとは替りてすこしうつろふかた有を甚しくうらむる女をいふなりこれ又嫉妬のうへの過不及をいひて次に中道をいはんとてかける成べしなのめは斜の字の意にてかたはへにあるをいふ此女をば專らとせずあるなり

にごりにしめる　俗にて濁世にあるをいふなり

たえぬすぐせ　たゆまじきほどの深き宿緣有て

やがて　卽

その思ひ出　その家出せしを思ひ出てなり

けしきばみ　けしきに出してふりつけるさまなり

うらめしきふしあらざらん　此詞を下の我も人もうしろめたくといふ・何をへだてゝつゞけて見るべし伊勢物語に家出せし女と有しよりげにいひかはしつれど終に己が世々とわかれはてたるもこのたぐひなり爰より廿七字・本になしといふはいふにもたらずなくてはことわりなし

けしきばみ　けしきに出してをこは怠なりつゝしむべきをつゝしまぬはをこたりなればおろそかなることにいひ心を用ふべきを用ひぬも怠りなればおろかなることにもいひぬやまふべきをぬやまはぬも怠りなればなめげなることにといふ古事記の歌にいやを

こにしてとよめるは心を用ひずおろかなる意なり

心はうつろふかたありとも　是よりかのけしきばみそむく事のよからぬ故をことわる詞なり

さる方のよすがにて　男の心によくも叶はぬなれど見そめし心ざしのすてがたくは本妻ならでも一つのよるべにては有べしとなり源氏の花散里末つむ花などみな一かたのよすがに定めたるがごとしさるかたのとはその心にていへり且よすがよるべは心同じこの下にこの人をとまりとは思ひさだめずよるべとはおもひながらといへるをみるべし萬に因をよすがとよめりよすがは縁所よるべは縁方なれば意おなしきなり

たちろき　たちしりぞく義なるを轉用してすゝむにもしりぞくにも身うごかしといふ事にいへり今俗にいふそぶりなり動きさはぐなり

よろづの事なだらかに　男に對しては何事もけしきばまぬなり

えんずべき　怨の音なり字注にも恨は怨の極なりといへばうらみの輕きかたに怨といふ故に此次にうらむべからんふしとてならべいへる樣ゑんは心にふくむほどの事うらみは言に出るにいたるなりされば此事かの事といひ舉る意にてふしといへり

みしれるさまにほのめかし　見てみぬふりにほのかにいひ出るなり前の恨いふべき事をも見しらぬさまといふにあたりてみるべし

にくからずかすめなさば　ほのかすめていひなすなり前の斜にうつろふをけしきばみそむくにあたりてみるべし又わが心も見る人からをさまりもすべしなどいふ前後の女のうへこゝに定まれりかのほのめかし又にくからずいひ出しなどせる紫のうへの打ふしのさまよくかなへり

みる人から　後見する女ゆゑ男の心もおさまるべきなり

一向嫉妬うらむる心もなくさしゆるしてかまはぬもなり夕貌の事を下に中將のいへるにあたれり拾遺の歌に「恨みぬもうたがはしくぞおもほゆるたのむ心のなきと思へば

女をあなづりて男恣のふるまひあらばかへりてあしからん心をふくめて見るべし

つながぬ舟　河海文選鵬鳥賦泛乎若二不繫之舟一とまこゝとにあひみる女の心しらひより男の心もをさまりもすべければあまり嫉妬の心もなくてうちゆるべなば男の心いよ〳〵つながぬ舟のごとくならんとなり文選は本なりされどこゝは白氏文集に偶吟詩、無情水任二方圓器一不繫舟隨二去住風一といへるをとりてかける歟

げにおやなし　とりしまりなしとなり

うなづく　點頭　領狀

さしあたりて　是より中將のこと葉なりするに中將物かたりし給ふ夕顔の君おたしく見え給ふに中將心やすくてとだえがちなりしをりから中將の御本妻四の君の方のあらき風の便におそれてつひ夕貌の君にげ隱給へりこれは女の餘りのおだしきに男の心安くとだへがちなるよりかゝるともおこれば大事成べければとはいへる成べしさやうならん女はいかに見すぐす共さしなほしがたししかれば嫉妬の心ふかきはもとよりにて又あまり男をさしゆるしたるもあしとなり

たのもしげなきうたがひ　拾遺によみ人しらす「うらもうたがはしくぞおもほゆるたのむ心のなきかとおもへば

ともかくもたがふべきふしあらんを　是は女の男のたがひたる事あるを腹だち怨せずして見忍ぶをいふなり季吟云前のとあらんをりもかゝらんきざみをもみすぐしたらん中こそといひてなだらかになどといひし詞に答たる語と見るべしと此萬の事かねたるは紫の上なり明石の上是に次べし又男の違ふこと有をけしきばみ怨せぬのみは葵の上なりされど葵の上は詞にこそは出さね怨じ恨さまはつねに見えたり然るを兄中將の君兄弟といへども閨中のさまはしらでその怨せざるをもとゝして源氏の君の暗に心え給へかしと思ひいへるさまなり次にいもうとの君の事心に思ひ給ふさまをかけるにてしるべし

君のうちねぶりて　源氏なり

ことませ玉はぬ　孟源氏のうけおほさぬ體を頭中將の心やましく思ふなり

さうぐしく　さびしくを延ていふなりか樣に延ていふ例いと多し寂々の字音とおもふは誤れり

たのもしげなきうたがひ　博士は博達の士にていづれの道ものさだめのはかせ

にても宗匠たる人を減ぜんに夫は學生の論を判定すること
となり爰は馬頭がさまん〳〵の道理を辨まへ定る判者
なり

ひゝらきゐたり　引ひらきてゐるなりこゝは學生に師
の論議をいひきかせなどする體席を改め引ひらきて
ゐる成べしされば こそ此下にそのはじめの事すき
すきしくとも申さんとてちかくゐよればとあり

あへしらひ　日本紀に待の字を訓せり語の本は饗をあ
へといひ侍るより出て背人をもてなす方の語となり
ぬこゝもしかり

よろづの事に　上には言を論せしを爰より物に譬てい
へり木の道のたくみ畫所手かく事と三つの譬なりお
の〳〵本意は右にいふ物まめやかにしづかなるおも
むきに又折ふしの心ばへ自ら添たるさまを爰にも譬
いへり

木の道のたくみ　師細工人なり　番匠なり　河良匠
如レ刱レ木　帝範

跡もさだまらぬ　日本紀に有例をあとのまゝと訓たり
是より恠色めきをかしく一旦の興ある女をたとふ

そばつきざればみ　たはむれものなりそばつきはそば
へめきなりいまそばへあそぶといふに同じ萬葉集に
たちばなのほつえにもちひきかけ云々己が母をとら
くをしらに己が父をとらくをしらに伊蘇婆比座與い
かるかとしめと是たはむれをそばへるともいへる古
語なりこゝも法例なきたはむれもの作るをいふ
されは洒麗の音と見えたり今もしやれたるといふじ
ちやうにはたがひておもしろくかろきやうなるをい
ふ

ばみはけしきばみけしきぶりのはみ、ふりもおなじ
夫利のつゝめ毘なり毘をのぶれば婆美となるよしば
みよしぶりよしめきなどもても見るべし右は實樣な
らぬもてあそびものゝそばへしやれたるをもていろ
めきをかしく一旦の興ある女のうち見たるにはおも
しろからんと誰もめうつりするにたとへたり

今めかしき　後世めづらしきと云が如し

をかしきもあり　いかにもおもしろく見ゆるも有なり

大事として　是より定りたる格式のある道具のうへを
いふなりまことの道具はみないにしへより定りたる
法式寸法ありてたがこしらゆるも同じことなるべき
をまことの上手のしたるは格別にわかるなりといひ

てよき人の本妻なるべき女はそばへしやれて今めき
にてはあるべからずまことの調度は故實をしりたる
上手のつくりたる如く當ゐるさまにてしかもうるは
しくみやびたるやうにあるべしとなりあとに繪所の
たとへ手かく事のたとへも皆其心なりさて本意は右
にいふものまめやかにしづかなる心のおもむき
に又折ふしの心ばへの自ら添たるさまをよしとして
たとへを出せるなり

うるはしき人　正人なり

てうどのかざりとする　厨子香籠硯鏡臺の類古より式
法有り

物の上手は　上手のこしらへたるは格別にわかるとな
り下手はする事のかなはぬ心なり

繪所　是よりは畫にたとふ拾芥抄畫所在二建春門内東
脇御書所北一有二別當五位藏人預墨畫等一

すみかきにえらばれて　すみかきてふ事を或說に墨に
て書るのみの畫なりといへるは誤れり今も墨かきを
ば仰うけ給はれる畫師の書て彩色をば弟子にさする
なり古人は名所の畫工の勝れたるをば墨書に召れお
とれるには其畫を彩色せさせらるゝなり山槐記に元
暦元年大嘗會御屏風繪所の定めに墨畫（修理進藤原
有宗）淡（内匠少允中原光榮）作繪（中原吉久）主
基かたも同じ此墨繪と有も卽すみかきと讀むべく作
繪とは彩色をいへり

おとりまさるけぢめ　いと上手と次と

ふとしも　しもは助なりふとは見わけがたきなり

かゝれど　かくはあれどなり

蓬萊の山あらうみのいかれるゑを　蓬萊は東海十洲の
一なり　細後漢書張衡傳畫工惡圖犬馬而好作鬼魅誠
以實事難形而虛僞不窮也と云に同じ心なり

鬼のかほ　韓子曰客有爲齊王畫者齊王問曰畫孰最難者
曰犬馬難孰易者曰鬼魅最易夫犬馬人所知也旦暮罄於
前不可類之故難鬼魅無形者不罄於前故易之也

おどろ〳〵しく　驚々しくなり

じちには　實にはなり

さても有ぬべし　本より虛なる事故にさありてもよし

やとなり

よのつねの山　常に見れどあかぬ山水をおのづから故
緣ある人にたとふ

まことにさもあるべく見えてなり

やはらびたる　ひ濁るべし
かたなど　圖などなり
すくよかならぬ山の　河　健菅家後集すくよか健の字に
あたれり注に木直上百仞無枝を建木といふ如く除り
に除情なきさまをいふすぐよかならぬはすくよかに
あらぬにてすきのあるをいふなり末つむ花の卷にい
とうもれすぐよかにてなるのはえなきをぞと有は末
つむのすきのなきをいへりこゝになづかしくやはら
びたるてふに對たるにてしるべしさてすくよかなら
ぬ山のけしきといふは假令深山幽谷をゑがくともあ
まりなるまでこと樣にさかし過て除情なき樣に書は
上の鬼の形に類ふべしよき程を得て木深く世はなれ
てたゝみなしたるはおのづからさる所につけて故よ
し有て物ふかくみるも又心篤き人のさまにとるべし
○すくのくを濁りて直なりといふも誤れり此くは清
なりすく〳〵しなどいふみな右の如くてなつかしく
和らびたる反對なり
木深くたくみなし　山などを幾重もかさねなして書て
遠近をわかつなり　花鳥　雅兼卿記云金岡以墨畫山十
五重廣高五重也孟　畫成弄墨の濃淡をもて遠近の山を
あらはすなり花　雅兼卿記云

金岡—公望—深江—廣高
—公忠　以上五人上手なり
氣近なり細　前栽をいふ
けぢかき
こゝろしらひ　日本紀に有意をこゝろしらひと訓たり
是はひろくふかき山の樣を書て其もとに家居の有が
それをばくはしくかゝでまがきのよ所より見ゆる梢
などさこそと思ひやらるゝ樣に意を用ひて書るなり
わるものは　下手をいふ
てをかきたるにも　是より手跡をいふなり
てんなが　點書長きなり
はしりかき　草書なり
そこはかとなく　其所無レ度定りたる事なくなり
なはまことのすぢ　正しき筆法をいふなり或云唐穆宗
問筆法柳公權曰心正則筆正筆正則乃可法矣と
きえて見ゆれ　おとりて見ゆる心なり
とりならべて　はしり書とまことのすぢを書たると取
ならべて見ればげに正しき筆法の方見所多きなり
じちになん　其評實法なゑにつき侍るなり
はかなき事　藝能さへなり
見るめの情をばえたむまじく思ひ給へ侍る　實をもと
として申詞なり祇是偏に女の事をいふのみにあらず

源氏の君頭中將は世をまつりこち給ふべき君達なれ
ば女の上にて世間の人の心をゝしへ奉るなり文集大
行路注曰借夫婦以諷君臣不終也といへり
思ふ給へ侍る　左馬頭がなり
そのはじめのごとくも　細　前にさま〳〵いひしもいま
だ事たらぬとて我身に昔有し事共を引出して語申な
り
つらつゑ　貫之集「ことしげき心よりさく物思ひの花
の枝をはつらつゑにつく白氏文集吟苦支レ願曉燭前
のりの師云々　是も同じ右馬頭か語なり是を記者の語
といふ說はいかにぞやわが昔の事語らんとてかくい
ふのみ
むつことも　誰も〳〵妹背の中のさゞめ事もかくすべ
きついでならねばいひ出すなり
きこえさせつるやう　萬水　前にひさうなる家とうじな
と申しゝやうになり
あはれとおもふ人　かのらうたき見るめのみにて心の
たらはぬ又貧相なき家とうじなどいひしをいふ
まほ　まかほといふを略きていふ眞顏は顏貌の端正に
調ひたるをいふかたほといふにむかへ見るべしかた
ほは片貌なり顏貌のそろはぬをいふ兒の事をかたな
りといふもおもひ合すべしこゝは其女のよくもあら
ざりしかばなり
とまりにもと　終に此人を妻にせんとは思ひ定めずと
なりよるべとはといへるは上にさるかたのさすがに
思ひてもありぬべきにといひしも妻とせんにはあら
で源氏の君の明石の上花散里のたぐひ今の俗におも
ひものといふがごとし
よるべとは　先よるべの一つとは思ひながらなり
さう〳〵しくて　見るめのよからねば
ありきはべり　こと女のもとへ
おいらか　大いやかのほを略せる語なるべし俗に大や
うらしきてふに同しおひと書はわろし
あまりいとゆるしなく　うたがひ侍りしもうるさくて
心くるしきをり〳〵も侍りてとある二つのての詞を
しねんに心もさめらるゝやうになん侍しといふ詞へ
うけて見るべしかゝる文章の體古文に多く有前に我
心もみる人からをさまりもすべしといへるはいとよ
ろしき女の恨をもにくからずいへるをいひこゝは嫉
妒の心はなはだしくほうるさけれど實の心より此女

はいへはおのづから身をもかへり見るよすがともなるべけれ　くなり白氏文集外人不レ見見應レ笑
うぬといへり　みさをにもてつけて　身たしなみをも常によくするや
見もはなたで　拾遺「恨ぬもうたがはしくぞおもほゆ　うの心なり
る頼む心の無かとおもへばといへるうらにていふ且　只此にくき　ねたみなり
前にわが心も見る人からにをさまりもすべしといへ　心をさめず　にくしと思ふ心のをさめがたきなり下に
るはいとよろしき女の恨をもにくからずいへるをい　も女もをさめぬすぢにてといふ是に同し
ひこゝは甚しきにうれたかれどさても又おのづから　そのかみ　その時なり
かく身をかへり見るよすがとはなりぬるをいふなり　かうあながち　かやうにしひてなり
此女のあるやう　是より平性をいふなり　おぢたる　おぢおそれなり
もとより思ひいたらざり　此女の心に　さがなき　うまれくせのあしきなり神代記に神性をか
此人の爲には　馬頭自らいふ　んさがといふ又仁德紀吉祥をよきさがと訓性はうま
おくれたると　心のいきとゞかぬことをもなり　れつきたるくせをいひ祥はきざしをいへりされども
すゝめるかた　餘りさし過たるなり　其もとは同じ詞なり歌に春のさが世のさがなど詠る
なびきてなよひ行　こは女の心馬頭にしたがひなびき　もおなじ事さがなしとはわろきくせわろききざしを
てさてなまめき行くなり此女始かど〳〵しくなつか　いへりされればさがなしてふに不祥又惡の字をかけり
しからぬさまなりしをしたがふ心より姿をもなよび　實にうしと　右にいふはさがなさやめん謀なり是は實
かになまめくなり次の語へかけて見るべし　にうしと思ひてなり
うとき人に　他人に此女の見にくき顏形見ばえなり　思ひたまへて　心によく思ひ得たるをいふ
おもてぶせ　馬頭が面目なくやあらんとなり後撰に「か　ことさらになさけなく　わざと怨むるやうにしかけて
ざせとも花もかくれぬ此春は花のおもてもふせつゞ　見せるなり

れいのはらだち　如レ案なり　こそとなり
をぞましく　惡きを轉じていふ語なり或說に怨の字な　つらき心　馬頭があだなる心をいふ
ど を當るはひが事なり今もあしざまなるををぞしと　しのびておもひなほらん折　馬頭か實法になる折なり
いふ　年月を重ん　年月をかさねてもいつなほるべきともし
いみじきちぎりふかく　宿世のちぎりをいふなり　れぬ行末を頼むはいとくるしきとなり
ねんじて　念の字堪忍しての意なり　あいなだのめ　あいなとは此比の文どもに皆愛無の意
なのめにおもひ　嫉妬の心を大概にしてなり　にいへり桐壺にもあいなく目をそばめつゝといへる
人なみ〳〵にも　官位　同じ意なり然ればこゝは男のつらく愛なき方より出
われたけくいひそし　我理つよくいふなりいひそしは　てかくいふなるべし或說にかひなきなりといへどか
言殺の文字の心にてつよくいふなり愁殺笑殺などい　ひなきをあいなきといひし例なし又あぢきなきとい
ふがごとくいひそぐてふ意にてわろういひおとすと　へるはいと誤なり此文にあいなきと云は愛無あへな
いふに似たり　きといふは待無かひなきと云は易無にて本の理自ら
すこしうちわらひ　女　皆ことなりされどそれを轉じて用ひたれば轉用の意
よろづに　女のこたへ　をしらではまどふべきなり
みだてなく物げなく　見たて物氣と二ついへるは右の　たしこと葉に
身もわかく官位もひきゝ心をいふをうけていふ　あへなきにてはかなき思ひたのみなりあへなきは遮無にてこなたよりものいひてもさへぎり答ふる人なきをいふ
人かずなる世　其官位の昇らんを待間は心ゆるやかに　あひしらひあひさづなどのあひ皆同じすげなきといふも似たる事ながらすげなきはよすがなきを略ける
して苦しからず目の前のあだし心のなほらん迄をい
つともなく念じこらへてあへなく行末を思ひたのま
んはいとくるしければ互にあひそむかん時の來るに

なりよすがなきたよりなきよるべき所なきをいふ　まかでぬ　女のもとより
そむきぬべき　背向なり互にそむくは中たつわざなり　えうらみじ　前々は物恨のみ多かりしが今はかく疵を
きざみになん　刻　だに付たれば相別るとも女の恨むる事は得あらじと
はらだゝしく　馬頭前はそら腹を立しが實に腹立し也　馬頭のいふ
をさめぬすぢ　えこらへぬなり　さすがに　女かく腹立ても前に臨てはしかしながら歎
および　和名指（由比）俗云於與比とありて五の指と　くなり指くひしも歎のあまりなり
もに何のおよびといへりされればおよびは何の指にも　うきふしを　男のつらき事を女のわが心ひとつに年月
いふべし季指の事にかぎるべからず季指は古於與比　かぞへ〳〵來てなり數ふるといふより手をわかると
とあり　いへり
おどろ〳〵しく　馬頭　いひしろひ　互にいひあひてなりつきしろひといふろ
いよ〳〵まじらひを　おほやけの交なり　ひに同じ
はづかしめ給ふめる　辱をあたへられしとなり　まことにはかはるべき　馬頭
つかさくらひ　只にも物げなき身の粧さへつきてはいせうそこ　文にかぎらず詞にていふをも消息といふな
とゝ官位も人めかんよしなきなり　り
手を折て　伊勢物語に「手を折てあひみしことをかぞあくがれまかりありく　あくの反うなればうかれを延
ふればとをといひつゝ四はへにけりとあるを其まゝ　てあくがれといふまかるといふこと葉のもとは散る
上を用ひ下をかへたり惣てものがたりぶみにはかく　なり大内は百官あつまる所故其事はて〻百官ちり
の如くするを興とするなりそのいせ物語に先古歌を　〳〵に歸るをまかるといふを本にて可レ居所より他
詞をかへ又上句と下句と前の古歌をよせなどして作　へ行去をもいふ上に指をかゞめてまかでぬといふを
れるを始として此文をも作れる事しるべし　思ふべし下にまかるといふ皆其心を得てとくべし

りん時の祭の調樂　臨時の祭は宇多帝の時始るなり　ひきあぐべきもの　几帳壁代などの帷なり
十一月酉日なり調樂は其前の午日内裡にて有江次第　こよひ計　此ばかりは耳なりこよひのみは必來んと待
諸記錄に委し　たるさまなり○ばかりはのみと程と二つありふじの
これかれ　誰やかれや　山をはたちばかりは程なりけふ計とぞたづも鳴なる
あかるゝ　離散をあかるゝといふかを濁るはいかゞ　はのみなり
猶家路と　專らわか家の方をいへどこゝは退り散て行　さればよと　さればこそ我を下まつよと思ひてなり
てねん所をいふさて又なかりけりとは懸想せる方は　さうじみ　正身の字音なりしやうをさうとなだらかに
あれど心ゆるやかにともねせんかたはかの指くひの　いふは語の例なりさんをしみといふは燈心をとうし
外はなしとなり　みといふがごとし其の人の正體といふことにて其比
内わたりの　家路といひ出ししより内裡にかりねせん　の俗語なり万に正日（マサカ）正香（マサカ）直日（ナホカ）直香などあれど正身と
を旅ねといへり是文なり　書てさうじみと訓し事なし字音なれば萬葉の比の語
けしきばめるあたり　かの木枯の女のごとき上べの艶　にあらずたゞ浮世の俗語のみ
情のみなる所は今夜のさむきには似つかず猶ゆびく　よさり　土佐日記にようさりがかた後撰の詞書にゆふ
ひのねやあたゝかならんと更に慕はるゝなり　さりと有山と興とかよひて皆同じ事なりさりは萬に
つめくはるれど　臆したる體なり　夕去れば春佐禮婆など有は夕になれば春になればの
火ほのかに　ともしびなり白氏文集耿々殘燈背壁影　義なるを下の詞を異體にいひなして只夕の事にいひ
なえたるきぬども　常にうちとけきるべき衣ともなり　なせり
あつごえたる　綿入たるなり　えんなる歌　馬頭をおもふさまの歌もよまず
おはいなるこに　蒸料の臥籠の大なるにてよるの物を　けしきばめる　中なほらん昔がれごともせずしてなり
あたゝめたるなるべし　ひたやごもり　ひたやは紀にひたすらと訓じ後に一向

などいふみな同じさればこゝはひたすら打こもりて　尋まどはさんとも　これは上にえんに物はぢして恨をといふなるをかく一向に情なき意にも轉じいへり　もいはず山里などにはひ隱れて人をまどはせし女の戒抄に直隱の字をあて和泉式部が歌うきによりひ　反對なり此女はえんに物はぢするさまなきゆゑかゞたやこもりとおもへどもあふみのうみはうち出て見　やかしからずいらへつゝとは云へり　よを引たるはあしからず直もひたすらてふ意に用ふ　かゞやかしからず　恥かゞやかしといひてはづかしむるなり　るをいふこゝは男の方に折て行はた逢んともいひたあへなき心ちして　思ひ〳〵て行しかひなく手持ぶさ　れば女勝の進みに男に恥かゞやかする樣にもいふべたなり　きをさる事はかつてなくたゞ眞め心にあだし心の事我をうとみ　女の　をのみいふをいへるなり　さしも見給へざりし　年月はさやうの心とは　たゞありし心　女心やましきまゝに　かの親の家に行てあはざりしねた　あらためて　あだ〳〵しきを改てなり　さにとなり　つな引て　拾遺集に（平定文）引よせばたゞにはよらきるべきもの　馬頭が衣服　で春駒のつなひきするぞ名はたつときく　いろあひしざま　やとり木に「物のいろしざまなどをいといたく思ひ　女　ぞきよらをつくし給へりける云々染いろこしらへやたはむれにくゝ　戯の眞言となりて興さむると云ごと　うなどいかにもとおもはるゝやうにこしらへ有しなくこらさん謀に過てつひになくなりしなり古今集り　「あかぬやと心みがてら逢みねばたはむれにくきまわがみすてゝん　馬頭が　でぞ戀しき　さりとも　右のごとく其女こゝにゐず文などもあらず　ひとへにうちたのみたらん　男も女もひたすらに思ひ　ともかくあるからは猶たえて思ひはなたじとなり　頼みたるをば少しの事はさておくべかりけり

さぶかりしこと　大概の事は其なりにて置べき事なりと　てほめたる詞なりされどうるせくと有ぞやすらかに　今更思ひ出てなげくなり　よろし　はかなきあだごとをも　彼ひさうなき家とうじの後見　其たなばたの　中將馬頭の物語を聞て其女の早く死たばかりをして公私の事家とうじの類にはあらず出ば　るををしみいへる詞なり　へし頼もしき事あるなり　あえまし　肖なん事ありしをてふ意なり仁德紀に磐田　たつ田姫　立田彦立田姫の二神は風神にてもとは物染　に肖給ぬ古今に「こよひこん人には逢じ棚機の久し　るなどの事はあらねど紅葉の名ある立田の社にます　き程にあえもこそすれ後撰に「逢事はたなばたづめ　故に後撰に「見ることに秋にもなるか立田姫紅葉染　にひとしくてたちぬふわざはあえずぞ有ける皆あや　とや山の照らんなどゝりなして其後は立田姫は紅葉　かることなり　染なせる神のごとくいひなせるなり　そのたつ田姫のにしき　是はかのはかなくなりし女を　たなばたの手にも　たなばたはもとより機織るを司る　馬頭がしたひたる詞をうけて其女の實にたとへてほ　神にして衣縫ことにもいへり方に古爾織義之八乙乎　むるなり故に次にはかなき花紅葉といへるは染きぬ　此暮衣縫而君待吾乎足玉母手珠毛由良爾織旗乎君之　の色あひを錦に對して表はしいひてあだなる女にた　御衣爾縫將堪可聞此物語の比は專らたちぬふこと斗　とへたり　にいへりとみゆ　はかなき花紅葉　見るめ斗の艶なる女に比して假初に　うるせく　うるはしくとほめたる詞と聞ゆうれしきと　染なしたる絹にたとふ　いふも同じ事なるべしうれしきを田舍人はうるしい　上の評どもに有意なり　といふ一本にうるさしと有うるさしは始にもいへる　露のはえなく　露とはいとかりそめなる物故にいさゝ　如く慈の字の意にていとことなり其の方にていはば　か成る心に用るなりはえとは爰はうるはしき色めも　此女にはあまり何事も揃てあきたくうるさしと嘲り　なしてふ意なりきえぬるとは見るめもなしといふが

如しこゝは露の語より消ぬるとはいへり

さるに依て　しか有に依てなり上にいへる詳どもをうけてよく萬ゞ調たる女は有がたき世なりといふ意なり

いひはやし　榮あらすなりえあの約やなればはやすとつゞめたる詞なりこゝは右のたとへの詞どもをもつて馬頭が物語を尤なりとはやし玉ふなり方に「我角は御簦のはやし云々とも詠る今の世にうたひをうたひて竽笛にて謠にはえあらしむるをはやしといふも同じ心成べし

さて　さてとは如是有ての略なり又物語を一つ云出すなり木枯の女の事なり

人もたちまさり　右にいへる女よりはなり

うちよみ　歌なり

はしりがき　手かくなり

かいひく　琴

こともなく　難なきなり萬葉に無事吾妹（トトヽヒワレセ）と有爰もうち

みる所なんくせもなきなり

此さがなもの　まへのさがなさもやめんと有前に委し

くいひつ指くひの女をさすなり

かくろへ　ろへの約れなればかくれを延したるなりかくれしのびての心なり

此人うせて　指くひをいふ

すぎぬる　死去を過ぬるといふ萬に多しすきの反しなり

しば〳〵　屢なり

まかりなる　罷退をいふ其まかる度などにゆきてやどりなるゝなり

すこしさばゆく　心置れて恥かしく思はるゝなり

かれ〴〵　かれとは離（ワカレ）の上略なりわかれはなるゝより出てかく疎遠などのさまの事をいふ

うへ人きあひて　殿上人なり誰ともなし此人木枯の女にかよへる成べし

大納言の家　或注に馬頭か父かをいへるは定かならねど此人行とまるほどのしたしさは知べし

人まつらんやとなん　殿上人馬頭か元來此女に通ふはしらでいふなり

よぎぬ道　よきはよけといふに同じ古今に花のあたりはよぎて吹萬によぎ道を曲道とかけり通り道にはあらで外道の心にて曲道とは書り然らばよきぬ道とは

通り道といふ詞なり

ふれたるくゞれ　女の家の築垣

池の水かけ　水影面白き詞なり

月だに　月すらなりさへといふ注は非なりさへは添にて順なりだにには爭ふなり拾遺「雲ゐにてあひかたらはぬ月だにも我やと過て行時はなし伊勢

もとよりさる心を　此うへ人木枯の女に心を通じたるにやとなり是馬頭は此由を見しりてさらぬやうにてみるに殿上人はその事を不知なり

この男いたく　殿上人

すゞろき　うかれたる意俗にそゝるといふに同じ

すのこだつ　簀子のやうなるものなりすのこは俗の椽なり

しりかけて　腰かけてと同じ

とばかり　時計の略なり萬に時といふをとゝばかりい

ひし事多しされどこゝにては一時の久しきをいふにあらずしばしの事をと計といふは一時をしばしの事にいひなせしなり暫時の意なり又上より何々とばかりをといふは上をうけていふ辭にて右とは別なり

風にきほへる　散なり

あはれとげに見えたり　うへ人の體を見て馬頭もげにあはれとなり

笛とりいで丶　殿上人

陰もよし　催馬樂に「阿須か井にやどりはすべし陰もよしみもひも寒しみまくさもよし此陰はこかげなるべきをこゝには月影にとりなすかみもひは武烈紀に影媛が歌に玉もひに水さへ盛といひたれば水器の名なり故に呑水をももひといふべし主水をもひとりといふ○みまくさは御秣なり飛鳥井は蜻蛉日記によるに大和の明日香にあり

つゞしりうたふ　一日つゞうたふなりさだかにうたふべき時ならねばなり萬に緊鹽をとりつゞしろひといへるはかたまりたる鹽をくひかき〳〵喰なり

よくなる　女は内にて

和琴　和名日本琴似筝短小有二六絃一俗用二和琴一二字夜萬止古止河海和琴に能鳴調あり夫にそへていへりと云はさも侍らん○和琴の始を神代に有といふは據なし仲哀記に弓六張をならして神託を申させ玉ふより始れりと云說はさも有べき事なりさて萬に梧桐日本琴一面と書たればやまとごと丶いひしを其後倭琴と

も書しより後に字音にてわごんといふ此物語にはいかでやまとごとゝかゝざりけん末にあづまをといへるをおもへばこゝにもあづまとや有つらんおぼつかなし此琴は鶏尾琴（トリヲコト）ともいひし事和名抄に見ゆ

けしうはあらずかし　樣あしうは非ず面白き體といふほどの心なり

律の調　飛鳥井の律の歌なり時は初冬なれど歌につきて秋のしらべに琴をならして引けり時たがひたれど今夜の月秋のおもかげあれば似つかずにはあらずといひて又下に箏を盤渉調にしらべたるは冬の調にあらためしなり呂律の事は此國の說は誤りなれどこゝにはいひ盡しがたし

女の物やはらかに　師說　女のと心によみ切べし

いまめきたる　和琴は此國にふりにたる物ながらなだらかにみやびたるこゑに聞ゆれば其比の人の心にも今めきて思ひしにや

をりつきならず　時節似合たるとなり

をとこいたく　うへ人なり

めでゝ　男感じてなり

庭の紅葉こそ　前に風にきほへるもみぢのといへるにあされ　あまえ酒麗（サレ）なりまえの詞を略きてあされといふこたふ古今集に「秋はきぬ紅葉は庭に降しきぬ道ふみ分てとふ人もなし此歌をことばとして只我ならでかよふ人ありげなるを夫にうつして我のみこゝろふかくとふよしを諷しいひてねたますなり

ことのねも　琴の音も月もかく折からの氣色も物のねもえもいはずよき宿なるにたゞかれ行人を引とゞめざるぞわろきとなり

えもいひしらずよきをいふ○月を一本にきくと有は菊を折てと有に菊のよせ少しも歌に見えねば本は菊と有しにやされどことの樣月とあらんぞ歌には似つかはし此二ツ穩かならぬを思へばもしはつれなき人はうつろふ人とや有けん然らば今菊のうつろひ盛なるによし有其上つれなき人と打つけていはん理も此前後見えねばかたゞ〳〵此向も違るかと覺し歌の心はつれなき人はえやはひきとめ玉へるかやうの折ふしもわれこそ尋まいりたれとなりつれなき人引とめぬがわろしとなり

今一聲聞ばやすべき人　琴を所望する此おとこみづからいふなり

庭の紅葉こそ　前に風にきほへるもみぢのといへるにふなるべしされの詞は既にくはしくいひつ此殿上人は女の心を得たる上の戯れなり

聲いたうつくろひて　古へは歌はうたひかけしを此比は唯唱ふるなり他書にも見ゆ

木枯に吹あはすめる　ことの葉にといふに琴をそへ且木の葉はこがらしにとまらぬ理をいへりさて殿上人は外に待男ある樣をいひしを女は他の人の事はしらずがほにて其待殿人をやがて殿上人になしてよめりかく心きかせてとくよみ出すぞ前に云うたよみてつき口つきたどたどしからぬなり○木枯風風の古言をちともしともいへりあらしならしこちはやちなどの類なり

なまめきかはす　艶情をかはすにて色めきあふと同じ

にくゝなる　馬頭心

いまめかしく　上の和琴は今めきたる物の聲なればと書たればもとよりさるこゑなりこゝは今めかしくかいひきたるつま音といへばひきざまの今の世に似つかはしく艶なるなり

たゞ時々うちかたらふ　かの調度などの一時の興とまことの器などをいへるこゝに同じ宮仕人は物馴過てわろし是より評語なり

宮つかへ人などの　宮仕人は物馴過てわろしとなりさても　見るかぎりはさやうにても只時〳〵あひ見るはおもしろくあらめどもなり

ときゞ〳〵にても　よしたま〳〵逢中にても終にわすれず相頼んとおもふには右の如くなるはつきなし

わすれぬよすが　我身一世つれそふべきと思ふにはなり

さしすぐいたり　出過たりといふ程の心なり過しをすぐいといふなり

ことつけて　かこつけてといふに同じ

ふたつのことを　指くひと木がらしと二なりその中に指くひはねたみはくるしけれど實によれる故に終に馬頭かをしみたる事上に見ゆるがことし木がらしはかくたのもしげなれば終にたえたり

もて出たる　さし過たると云に同じ

をらば落ぬべき　心ははかなくうきたる女の事をいへるは明らけし古今に　折てみばおちぞしぬべき秋萩の枝もとをゝに置る白露さゝの霰は古事記に佐々婆

原打夜あられ能といふよりさゝの霰は當いふ事なり
こゝの心ははかなくうはきなる女の事をいふ
あえか　あやうけといふ詞なりをさなきものをあえか
といふもあやうけといふ詞なりそれを轉用してはか
なきことにもいへりさればはかなきことをあえなき
ともいふ爰はなびき安きをいふなり
七とせあまり　是は專ら中將に對していへば中將は爰
の兄なれば此時廿二三にも有べしされば今七とせを
くはへて三十にもなり給はゞ何事も思ひ合され給ふ
べしといへる成べし七も八も大數にいへる事古き例
も多けれどこゝを大數といへる說はわろし
すきたはめらん　すきは色このみといふもすき人とい
ふも同じ事にて好色のことなり○たはむも上のあえ
かといふに同じく人になびきやすきを云萬葉になゆ
竹のとをよる妹といふはなゆ竹のとをむといひかけ
てなよ〳〵としなやかなるをいふとをむたわむ同
じ
みん人の　逢見る男をいふ
いづかたに　源氏のの給ふ
はしたなかりける　竹取物語にみこはたつもはしたね
るもはしたにぞとありはしたは物のたらぬことなり
いやしき事にもせんかたなき事にもいふは皆物のた
らぬ方よりいへるなり○はしといふこと葉のもとは
あひだのことなり萬に「村鳥のあらそふはしにとい
へるもあいだなり古今に「木にもあらず草にもあら
ず竹のよのはしにといへるもいづれともつかぬ間な
り氏のはしうどゝいふに間人と書るなどおもひ合す
べし○なきは俗にあらけなきせはしなきめうがなき
又此卷にひさうなきなどのなきと同じそのことを强
くいふ時の語なりいはゞあらけなきとはあしきこと
此うへもなき又いはん方なきなどの言葉を略きてな
きとのみそへてつよくいふなり俗語にはかゝるたぐ
ひいと多し伊勢枕冊子此物語も昔時の俗語もまじれ
れば俗語のまゝにはしたなきとは書しならん
御物がたり　おんものがたりなり
おはさうず　おはしますなり
しれものゝ　愚なる人をいふ萬葉詠二浦島子一歌に世間
之愚人之と有文粹に白物左傳注無惠世所謂白癡也今
の俗にしろうとゝ云も似たる事なり
さてもみつべかりし　さても見つべかりしけはひなり

しかば又次のなれ行まゝに哀と覺えしかばとある二
つのかばの詞をたえ〳〵といふ一つにうけてつゞく
文法なり古文に多し○我が氣に入し樣子なりしかば
なり何となく初て逢人の心に付なり
ながらふべきものとしも思ひ給へざりしかば
初め中將さま〴〵におもひしむるをいへるなり
さばかりになれば　さほど迄に成たればの心なり
うちたのめる　女も
うらめしと　中將のとだえを
見しらぬやうにて　夕がほのさまは先は餘りむげに見
はなちたるも心やすくらうたきやうなれどおのづか
らかろきかたにぞ覺え侍るかし云々といへる心を實
に有し如く一人を作れるなり上の評にいへる必みな
あたるとはなけれど大かたさる意もてしたてたりと
見ゆるもあるなり○此女は絶〳〵なるをも恨むべき
をも何事をもしらぬ顏する生得なり
心ぐるし　此文にては今俗に云苦勞に思ふと云にあた
る只くるしき事にあらず
たのめわたる　中將も末かけて契りなどせしなり
おやもなく　夕貌上の親は三位の中將なる人と夕貌の
卷に見ゆ
いと心ほそげにてさらば此人　此人は中將をさすなり
親もなくたよりなきまゝになり
かうのどけきに　如此うらみもせず
おだしくて　おだやかに心やすくてなり
この見給ふる　うしろみ玉ふる方といふ心なり頭中將
の北の方右大臣殿の四の君なり
うたて　うたゝといふに同じ古事記云猶其惡態不レ止
而轉うたては物のうつりかはる意なり古事記の意も
素盞雄命の惡行やまず色〳〵手をかへ品をかへ惡行
あるをうたてといへり夫をもとにて我心とことざま
になりてあまりしきといふことに云古今に「散と見
てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれ
る此うたてを新撰萬に別樣と書る事も此心なり日本
紀奇偉俗ニ云ユシレモナヒなり
さる便ありて　夕貌のかたへ便宜ありて四の君よりお
こしたるなり
むげに思ひしほれて　夕貌の心を頭中將察していふな
り
おさなきもの　玉かづらの事なり

涙ぐみたる　思ひ入たるさまなり

さて其文の　源氏

いさや　いさは否なりやはよにかよふかたがひにあらず人の物間にしらざるをも其間の心にたがふをもいざともいなともいへり萬にいざといふに不知の字を用ひたり思ひ合すべし人を卒ふをいさといふとはことなり爰はいやとよ別の事もなかりきとなり定かに覺えぬやうに書る貴人の詞めきて馬頭が語とは殊なりさる人の文なればいたく恨たる事もなく言すくなるべければまことにことなることもなかりけんかし

なかりきや　馬頭の語とはことなり

山かつの　夕貌のかひなき身をたとへてすさめられぬを家にはあれど二人の中の子もあればたま〳〵の哀はかけ給へとなり誠に夕貌の君の心此歌にてもみゆ

古今に「あな戀し今もみてしか山賤の垣ほにさけるやまとなでしこと云をもてよめり

おもひ出し　此文をみて

うらもなき　うらは内心なり其内心もなくひたすらに有をいふ爰はいつものごとく心もなきものながらなり

蟲の音にきほへる　古今蟲いたくななきそ秋の夜のながき思ひはわれぞまされるといふをもて蟲の思ひと我思ひと競へるさまにて詠めゐたりと云なり或說ともには右の歌またくかなはずとて引かぬなるべけれど此物がたりは古歌に全く叶ふやうにはかゝねば心して引べし

むかし物語めきて　昔物語にもあるべきさまと思はるゝなりうつぼに俊蔭の娘荒たる家にひとりゐたるさまなどよく似たりうつぼの外今みえぬふみにもあるべしこれもよくさだかにあれど聞えぬはかへりてよし

咲まじる　秋の花のいづれもめでらるゝ中に妹と吾ぬる床夏にしく物なしといふは彼我子もうつくしけれどそれよりもまづそなたを思ふといひて餘りにとだへせし故に女の心をとりて撫子當夏は同じ花ながら二ツの名あるにつけて撫子はなであはれむ子にたとへ床夏はあひぬる床にいひなして女のかたにたとへなしたるのみ扨此花夏を專として秋の末冬の初までかづ〳〵あれば夏をとことはにするにでとこなつと

112768

はいひはた其花いともらうたげにてうつくしまるればなでしこともいふなり

ちりをだに　古今「ちりをだにすゑしとぞ思ふ咲しよりいもとわかぬる床夏の花と云をとりて女の心に叶ふべきすぢをとりなすなり

夕顔

うちはらふ　床うちはらひつゝ中將をまちしに絶てこぬ故のわが歎きの深きに又四の君の方よりうたて有おそろしき事をさへいひおこされて侍りてふをたとへて露も風も秋のうれはしきものもて歌のおもてをばいひたり上句は抄に引後撰の歌蓋ひこほしのまれにあふ夜の床夏はうちはらふにも露けかりける又は頭注もて床打はらひ君まつと云々萬葉によめるうたにてよめるならん床をはらふは專は人まつ時の事なり

泪をもらし　忍びあまる時

いとはづかしく　頭中將のとだえをつらき物と女の思ひしりて見えんをもはづるなり

又とだえ　時絶所絶などより轉せし語ならん久しきとだえをうらむべきをもましてかのうたて有ことの聞えしをば專らいひことわるべきを是をもいはでこの歌にそへいひたるをはかなげにいひなしてとはかけり

詞もなくこそかきけちて　かの四君におとされてもとより心よわきうまれなれば詞もなくかきけすやうに外へかくれたりしなりかきは辭なり

さすらふ　河吟（サマヨフサスラフ）孟伶心（サスラフ）流離（日本紀）

已忍伶心十年事（杜甫）師說　伶俜辛苦五十年と法華經にあり

あはれと思ひし　夕顔を頭中將のとだえをいと恨などして常わづらはしげにまつはす

に來ならすべき樣にもいひなせばおのづからさる心のおたしさもなくて問べきにとなり○纏（マツハス）我をまとひくるめるけしきも見ゆるなり

あこがれざらまし　かやうにうかれ出るまでにはさすまじきなり

こよなきとたえ　大きにと絶をおかずばなり

さるものにしなして　一方の思ひ人とはなしてなり

かのなでしこ　玉かづら

の玉ひつる　上に馬頭がいひしえんにものはちしてう

らみいふべきことをも見しらぬさまにしのびてなど
いへるはかなきためしなり
きゝつけはべらね　ありかを
やくなき　無益
かたおもひ　片思
かれはたえしも思ひはなれず　夕貌又狶え思ひはなれ
じとなり
人やりならぬ　古今に人やりの道ならなくに大方は
いきうしといひていざかへりこん人やりは人のいひ
付やるなりされば人やりならぬは人のいひ付ぬこと
なれば我心からなすことにとりなしていへりその本
は人の爲に遣るゝ道なり轉じてはわが心よりせぬ事
をもいへりこゝは人もなさせぬむねを獨りやくなら
んといふなりむねをやくとはもゆるが如くくるしき
をいふのみ萬葉に我むねのもえてくだけて云々古今
にむねはしり火に思ひやけをりともあり
えたもつまじく　心におもひたもつまじくなり
されば指くひかのさがなものも　是より又馬頭か詞といひ中
將の詞と云説まち〳〵なり是より下の皆はいらひ給
ぬといふまでは先馬頭のいふよりはじめて中將の詞
もありしかれば上には問こたへを分て云こゝにては
皆同じ評に落る意なれば二人の語をひとつに書たる
ものなりさてみなわらひ給へるといふにいたりては
源氏をもかねたり此品定に女のこれはしもと難つく
まじきはかたくもある哉といへるをこゝにて本する
あはするなりさかなものは指くひの女をさすなり
わづらはしく　物ねたみに
ようせずば　俗にわるうしたらの反なり
あきたき事　他たき事なり
琴のねの　木枯の女なり
すきたる　色このみなり
心もとなき　夕顔なりいふべき事もいはぬ故なり
とりぐ〳〵にくらべくるし　或は長く或はみじかくとり
ぐ〳〵なればくらべ定がたしとなり
とりぐしなんずべきくさはひませぬ人はいづこにかはあ
らん　此品定めの所に女の是はしもと難つくまじきは
かたくも有かなといへるをここにて本するあはする
なりくさはひ云々はよき間にわろき種々の交るをい
ふ
吉祥天女　最勝王經に梵天帝釋の女にて貌端嚴といへ
り
ほうげづき　佛法めきなり
くすしからん　くすみたらんといふに同じ今もくすみ
てなつかしからぬをいへり萬に菟原の處女墓の歌に
いにしへにありけることの久須婆之伎とよみしは心
黑ずみてうれはしきなりこゝは夫を轉じてなつかし
からぬ氣色にいへり世間の女何も難ありて心にかな
ふやうなし吉祥天女こそ三十二相そろひてよろしか
らんと思へば又佛法めきてなつかしからざるなるべ
しとなり又宇治拾遺第二石近將監下野厚行となりの
人死したるを我家より出す段に云厚行が妻子どもは
我家の門より隣の死人を出す人やはある有まじき事
なるといひあへり厚行ひが事ないひそ唯厚行がせん
やうにまかせて見給へ物いみくすしくいむやつは命
もみじかくはか〳〵しきことなし唯物いまぬは命も
ながく子孫も榮ゆいたくもの忌くすしきは人といは
ず下略
式部が所にぞ　頭中將のの給ふ
けしきある　一氣色おもしろき事あらんとなり
しもがしも　式部のいふ
なでうことか　何といふばかりのといふ語なり
何事をとり申さん　式部何事をとり出て申さんとなり
思ひめぐらすに　爰はかんがへ出すといふほどのこと
なり
文章の生　職員令の大學寮にて學問するものなり式部
が若かりし時の事をかたるなり
かの馬頭が　細前に朝夕の出入につけても公私の人の
たゝずまひよきあしき事のめにも耳にもとまるあり
さまをうとき人に態とうちまねばんやはといひしや
うになり○公私の事いひ合するなどの才あるが餘り
には又かく過いたる女もあり謹べきをしらするなり
おほやけことをも　是よりかの女のあり樣をいふなり
さえのきは　學才の程なり
なま〳〵のはかせ　大概の儒者ははづかしくなり
我ふたつの道　白氏文集秦中吟主人會良媒置酒滿座
玉盞四座且勿飲聽我歌兩途富家女易嫁嫁早輕其夫
貧家女難嫁嫁晚孝於姑この如く此はかせは
貧家なればむすめは夫にもしうとにもよく仕侍るべ
きなり
きこえごち　聞えごとし侍りしなり

をさ〳〵うちとけても　專らとはなり
かのおやの　かの父卽我娘なれば親の心を憚るとなり
あはれに　女の式部を後見たるなり
かんな　假名なり又假字と書も意同じさて略して加奈
といへど實はかりなにてかりの利は音便にてはねて
唱ふる語なればかんなとはいふべしされど眞字をま
んなといへば音便なり
むべ〳〵しく　諸宜など書なり文義物理を宜々しく書
とるなり
おのづから　此女を心にかなふとはなけれどかやうの
事の捨がたくて通ひ絶ざりしなり
こしをれぶみ　爰にふみといふは詩のことなり作文と
いふも詩つくることなりこしをれは歌にこし折とい
ふよりいへるなるべし紫日記にこしはなれぬばかり
折かゝりたる歌をよみ出てとあり詩に蜂腰體といふ
歌のこしをれもこれより出しなり
さいし　或說に妻子といひてこゝはたゞ妻の事なりと
いへりさも有べし
はかなし口をしと　既に馬頭のいひけんかたちなどよ
きも心したらねば口をしき事多きとはことなる心な
れど此さかしものはたゞかたくなゝる男のさまなれ
ばはたいふにもたらずかゝる女よりはまたかのはか
なく口をしきも緣にしたがひて男の心にすてがたく
思ふをばさてゐある事なればたゞ男ばかりぞ何の云
所なくよきものなりと中なりとかく女には既にいひ
し如きも侍るぞといへり女の心かしこきをひたぶる
に捨よといふにはあらず次下にそのよきほどのまな
びなどをばことわりて書たるをあはせて見るべし
をのこしもなん　しもは既にいひしごとくいひ入るこ
と葉○なんぞといふに同じ子細さいはものこまかなる
ことなり○男ぞ何の難なきものなりといふをかくな
きものは侍るとも又なきものはあるなども物語ふみ
枕草子などにかきたり○此しもの二辭は必しもと云
入れ又は青柳のいとよりかくる春しもぞなどいふ類
にて一つの辭なり常にいふ助辭のしなりもは物をか
ねていふ辭と思ふべからず
心ばへ　心得をのべたる詞なり
はなのわたりおごめきて　をかしきを念じたるさまな
り
つねのうちとけゐたるかた　常をる所にはあらでしか
も物などへだてゝゐへるなり
心やましき　ねたき心なり
ふすぶるにや　恨いふべきをいはずして異人をくるし
むるは火のもえずしてふすぼりてけぶたき如くなり
眞木柱ににくげにふすべうらみなどしてとも有
又よきふし　中絶るふしにせんと思ふなり
此さかし人　女の樣にもあらぬ學者なればはめておと
すなり
世の道理を思ひとりて　もとより道理に達したる女な
ればなり
こゝもはやり　女
ふびやう　腹病にて腹のいたむなり
ごくねちのさうやく　極熱の草藥にて蒜の類なりさう
やくすみてよむべし或說六月に服する物故いふとい
ふはもとより六月の土用などにもくへどこゝの文の
意にあらず
まのあたりならずとも　直に御目にかゝらずともなり
さるべからむざうじら　似合しき雜々の用事などは物
雜事
ごしにても聞うけ玉ふらんとなり
むべ〳〵しく　尤らしくなり
いらへ　いゝと答ふる詞をのべていらへといふなりす
べて人にこたふるにはあゝいゝうゝえゝをゝの詞に
ていふいゝといふも字音にあらずいゝの詞と唯の音
とおのづからあへるものなり其たぐひ多しこゝは何
と返事をいふべきよしもなければなり
たゞうけ玉はりぬとて　たゝ承知と斗いひてなり
女
さうぐ〳〵しくや　すげなくあひそもなきやうにや覺け
ん
此香　女の詞
たかやかに　もはや式部立出たれば聞せんとて聲高く
いふなり
きゝ過さんも　式部かなり
しばし立やすらふべきに侍らねば　さればとてしばし
其儘にて立やすらふべきにはた侍ねばと切てにげめ
をつかひてとつゞくげにといふよりすべなくてとい
ふまでの詞はこゝにこめて見るべし
げに其にほひさへ　さらでだにあるを此うるさき香さ
へとなり
すべなくて　草菓のいきのにほひさへしつかりとたち
そへばいよ〳〵うるさくせんかたなくてなり

にげめ　にげまなこになりての心なり孟とめられてはむくつけきこと　おそろき事
との心にてにげめにするなり
さゝがにの　我來べき宵とはさゝがにのしわざにてもあばめ　家を發（アバク）といふはひらき散す意なりそのごとく
しるく有けんものを今更に畫間を過せとのがれ給ふ　式部が物語をいと惡しといひちらし給ふをいふなり
にやとなり暮と畫のことたがひしよしをいひて畫に　これよりめづらしき事は　藤式部
蒜をそへたり○さゝがにのふるまひは日本紀に我せ　をりぬ　居ぬなり
こがくべきよひなりさゝがにのくものおこなひ今宵　男も　馬頭
しるしもとあるを後の物にはくものふるまひと有に　女も　清少納言をいふにや
よりしと見ゆ　わろもの　よからぬにて至らぬものをいふなり
あやなき　曲もなきわけもなきなどなり　三史五經　是は今の定めとことにて中世よりの定めに
いかなることづけ　式部そらほけていかなるかこつけ　よるべし其三史は史紀漢書後漢書なり五經は毛詩禮
事ぞやといふなり言託なり言傳にあやまるべからず　記春秋周易尚書なり
あふ事の　夜をへだてずあふほどの中ならば畫間のた　かやうの道〳〵しき書をあきらめんこそ愛敬なから
いめんもなどかおもはづかしからんとなりこれも畫　め少しの學問は有ぬべきをいふなり后と中せど少し
に蒜をそへたりまばゆきはおもはゆきにて其面をは　は知給ふぞよろしき故に彰子皇后も文集をひそかに
ふきて只まばゆきといへるなるべし　よませ給ひしなり此國にからの文字を用ひるからは
くちとく　返事などよくせしなり　その國の文も少しはしらでは女としてもことゆき侍ら
おいらかに　大いらかの意にてひたすらといはんが如　ずこゝは拙き人のくせに少ししれば見せまほしげに
し又大平やかとも聞ゆ物を直にそのまゝなどいふを　物するをいましむるなり
平にともいへり　などかは　此詞下のむげにしらずいたらずしもといふ
にかけて見るべしさればとての心なり

わざとならひまねばぬとも　是は性得幸ある人にてい　この人　かゝる事ある人にしてたをやかならばとなり
ふ紫日記に見惟規の更記ならふを式部はかたへに聞　こゝちにはさしも　眞字多にかく女の心には何とも思
ゐて覺えたるよし有がごとしさてこゝは專ら學問の　はで書らめど
事をいひて世上の事をもかねたり　こはぐしき　たとへば一ふでとよむべき心にて書て
さるまゝに　さやうに物を知たればとてといふ心なり　も文字にては一筆とよまれてこはぐしきなり
まんな　眞字なり音便にてはねいへり紫日記に人のそ　ことさらび　わざとめくなり
ねみ侍るによりて一と云字をかゝず屏風の字なども　上蔟　上蔟中蔟下蔟年蔟より出たる名にして位の上中
えよまぬさまにせしよしあり紫のさるつゝしみより　下とはなれり
かくは書たるなり　歌よむと思へる人　歌よむべき人の敎なり
さるまじきどち　さやうにこはぐしかるまじき女友　やがて　卽
だちに向ひてなり　歌にまつはれ　おのれがひとへ心に好む方のみ思ひ入
かきすくめ　今の俗すくめるとはちゞむるをいへり然　たるをいふなり
れば縮めるにて音語なりさて物を專ら多く取用ひる　をかしき古ことをも　おもしろき古事を時にしたがひ
を花ずくめ玉ずくめなど云ごとくこゝは文字ずくめ　てかすめ聞えさせたるはわろからねど古事しりがほ
に文書たるなり是は右の縮より轉じて其物の一所に　は心いたらぬわざなり
ちゞまり有をいへり　すさましき　興なきをりなり
あなうたて　あなはゝなど歎く辭なりうたては既に　物しきことなれ　物しきことなれとはすべてものとは
もいふごとく物の左右に異樣に成行を云を轉じては　其物をそれとさしてひろくいふ時の語なり物し給ふ
事の餘りしき時にもいふなりかくまで字にて書つゞ　物へゆきてなど皆それとさしていへるなり
むるは餘りなりとみゆるをいふ　はしたなからん　せんかたなくてはづかしきなり

さるべき節會　元日白馬踏歌などなるべし年中の諸節會をば略て少しいひてさて五月九月なるを文にいひたるのみ

上にをかしき古事をもといふは惣ての歌のよみやうにもわたれど此二節は殊に古事の有なれば何れはあれどたとへにとり出たり又次の後に思へばをかしくも哀にもといふも惣てにかけてはいひたれどこゝにえならぬ樣なりけりといひて時につきなかりしを後に見ば實えならぬ樣なりけりとも思ふべし是は又のおもてならねどみなひゞきかよへる意ありいと巧なるつゝけなり

えならぬ樣を引かけ　えならぬとはえもいひしらぬといふ略語にて是はあやめのながき樣をほめていふなりさてこゝには唯あやめのねを引かけといひて是れる樣なれどしからずこゝは參内に心いそがしくてのみ有時に却て似合ぬ艶なる詞をもていひかくるなればわざとえならぬなどの語を澁て侍りかくわざと詞などの似つかぬを用ひるも又文かり文意をさとらぬ說にありいふにたらず

引かけとは其あやめの樣にいひかけて歌をよみかくるを文にいへり次の句に菊の露に託よせといへるにむかへて知べし

かこちは
紫著（カケツク）る事なれば引かけといふに意同じ

なにのあやめ　文目に菖蒲をそへたり

九日のえん　重陽の宴には天皇南殿に出御ありて文人博士をめされて題を奉らしめ各韵を探て詩を作りて文臺の上にて講ずるなどの儀式あり三献有て氷魚を給ふ御帳の左右に菜萸の袋を結つく御前に菊の花を瓶にさして立る

まづかたき詩　唯むづかしき詩の心をいふのみ難題まではあるべからず

菊の露をかこち寄　九日の宴に託ち寄なり

つきなきいとなみ　時節あしとてよみかけられしものはかのかたき詩を思ひめぐらすいとなえにさしあはするなり

さならでも　さやうの時ならでも見せよかしの意なり

さやうのかたき詩の心ならぬにてもつきなき時よみかくるはわるしとなり

などかさてもと　さりとてなどかはさはすべきとの心なりたとへばえならぬ菊の露の見過しがたきとてもなどかはかくいそがしき折に歌などよみかはすべきとおほゆるなり

時々も思ひわかぬ　時節をはからぬほどの心にてはなまなかに歌などよまざらんがよしとなり由めき惜めくなり

めやすかるべき　目安なり見苦とむかへておもふべし

すべて心にしれらん事をも　是はかのはじめにすべて男も女もわろ物はわづかにしれる方の事をのこりなく見せつくさんと思へるこそいとをしけれといふ所をむすびたる詞なり

すぐすべくなん　いひのこしてすぐすべしとなり

君は人ひとり　源氏は藤壺一人の事をなり

胸塞　むねふたがる

いづかたに　此品々いづかたに一定するともなくてなり

あやしきことどもに　ことゞもは言のいひにて互に論じつもりてあやしきあらかひ事も有しと書るなるべけれど少し明らかならず侍るを異本に論ともにと有は明らかなりさるを夫はもちひぬにするはことばのすこし落居たるさまなればなるべしこのみにまかせなん

からうじて　辛くしてなり物を五藥にたとへる道のこゝとなり爰は長雨の晴るゝをいと待わひてといふに同じ

かくのみこもり　源

おほ殿の　葵よりも其父大殿の心を源のおぼすなり

人のけはひ　葵の上のさまなり

けざやかに　氣あざやかになり

猶これこそ　猶はまだなり葵上に彼論にいへるよきまめ人にまたくはあらず少し源の御心に叶はぬ所あれども强てなくばまた此方ならんかとなり

まめ人　實なる人

あまりうるはしき　うるはしとは日本紀に善の字をよみていとよろしき事ながら又あまりにといふ語をそへたるにてげに解がたく愛けうなき方によれり

さうぐしくて　さびしくてなり

中納言の君中務の君　此二人葵の女房なり或說に中納言の君は源氏の須磨へうつろひのをり一夜立とまり給ひし人なり中務の君は末摘花卷に源におびきて大

宮の御氣色いかにぞやときこえし人なり

あつさにみだれ給へる　五月雨晴て後俄に暑きそらに

なれり

おとゞもわたり給て　源のおはしたれば

うちとけて云々　源氏の暑さに亂ておはす節なれば几

帳へだてゝ大殿に物語をし玉ふをいふ然れば上のわ

たり玉ひてより隔旬にて物語し玉ふとつゞくなり大

殿のものへだてゝとつゞきて思ふはわろし

あなかま　今あらやかましといふ是なりされどやかま

してふ語は見えずかしましとはいと上代よりいへば

あらかしましの二ツのしを略してかまとはいふなり

けり

いとやすらかなる　左大臣殿に對ふに几帳へたてゝ脇

足によりてかたり玉ふはいと御心安きとの事なりこ

れも彼大臣のうへに源氏はませばなり王威はかく有

べき事とてこゝかしこに書事なるべし

なか神云々　源氏はおほし寄らざりしを人々申なり此

時陰陽家の說行はれてかゝる方違などいふ事常侍り

天の中央に立神なれば中神とはいふべし巡行の時日

を經てある故に長神といふと云はいかにぞやさて此

神めくりて四方或は四隅にある事ありそのある方へ

向ひて我家へかへるを忌なりよりて異方へ行きて一

夜やどりて歸るを方違といふ○うちよりふたがると

は左大臣の御所の事なり二條院も同じすぢにてとい

へるは內裡より辰巳の方に其御所ありけるか花鳥に

二條院をば二條東洞院たるべきよし見えたり師金櫃

經云天一立二中央一爲二十二將一定吉凶云々天一神は

地星の靈なり中央に立故中神と號四方に五日宛四隅

に六日宛巡行する樣に日を重て長くある故長神とも

いふなり此神のある方をふたがりといふなりこの故

に方違ある事なり癸巳より天上して十六日ありこの

間を天一天上といひて八方へ行てもさはりなきなり

いとあしき事なりと　御方たがへし給はではあしと例

の女房たちのいふなり

紀の守　源氏の家人なりといふ說ありいにしへは其家

に仕ふるを家人といふは諸氏にていふ名なり令を案

るに職事の親王には一品已下四品已下皆文學家令扶

書吏等あり今源氏親王におはさねども別勅にて親王

の下大臣の上に座す程の事なれば文學以下を賜るべ

きか然れば夫々か中に考にあひて昇進して國守とも

成有べし又さなくとも女房などのよし有て名薄まい

らせて家來の樣にして終に官に仕ふるも有べし必家

人と定むるはおぼつかなし

中川のわたり　細花爲榮花を引尤叶へり中川といふは加

茂は東桂川は西京極川中川なり榮花第四に云中河に

くらのかみすけのふの朝臣といひける人のすみける

池遣水山などありてをかしうつくりたてゝ粟田殿の

御方違所といひ思ひ立ける家なりけん今按に此物語

の中川の家は紀伊守が家にて遣水前栽などありて御

方違所になれり榮花と相違なきなり

うしながら引いれ　門にており給はでとなり

きのかみに　渡り給はんと

うけ給はり　源氏の御前にては

伊よのかみ　紀伊守が父なり

女房　空蟬をいふなり

したになげく　下にはうち〳〵にといふが如し

きゝ給ひて　源氏きゝ給ひてなり

うしろにと　其女房のうしろに我をばあらせとなり

げによろしき　人々とりはやし申なり

人はしらしやる　紀伊守が家へ

東おもて　うつせみ又は女房などしんでんに居たるを

外にうつすべき所もなく且東おもてはやり水など夏

のおましによしとてとりもあへず源を東へまさせた

るなるべし

風涼しくて　下につきは有明とあるからは五月の末な

り

そこはかとなきむしの聲々　そこはかとなきといへる

詞分明にむしの鳴にあらず夏の季に入てからは何と

もしれぬ蟲の鳴なりそこはかとなきといへる詞はお

もしろし

かうしをあげたり　細女のある方のかうしなり夏なれ

ばかくの如し紀伊守聊爾なりとておろさするなり

ひとぐわた殿より　御供の人々なり

あるじもさかなもとむと　玉だれのこしがめをなかに

すゑてあるじはいもとやさかなもなきにさかなもと

めにこゆるぎの磯にわかめかりあげに(風俗)是は余

綾部にありてこよろぎの磯といふを風俗歌に誤りし

まゝにこゆるぎと書しか

かの中のしな　上には受領のむすめをいひたれど是は

今受領の書なれば其中品のなみならんとの意か又空

蟬の父は上達部なるを父なくて時失ひてあれば又中品の並といふにも有べし

思ひあがれる　空蟬の父ありし時はみかどにも奉らんとのぞみたりしを源の聞給ひつらん

むすめなれば　空蟬をいふなり

はら〳〵として　すゝしにはりはかまなどの音をいふなるべし

わかき聲ども　女房

ことさらびたり　常にもてつけたる樣ならで浮てきこゆるなり

かみ心なしと　紀伊守なり

さうしのかみ　障子の上よりなるべし紙より火影のもるなりてふ說は今の紙ひとへはりたる明り障子の事と思つるにやさらばいかにも透影有べきをひましなければといへば必古しへ絹布などを表として紙の中へをはりたる障子にこそあらめ且次下にすのこの中のほどにたてたる小障子の上より仄に見え玉ふてふ詞の同じきを思ふにさうし引たるなげしの上にすきたる所有より火影は見ゆるなるべし源氏をおはしまさせる間のへだてをうす紙してはれる今の如きさうしのみにて有べきにあらず

やをらより給ひて　源なり和の字を今昔物語に書たり今俗そろりといふに同じ

ひましなければ　内のみゆべき隙もなきなり

もやにつどひ　古記に最屋と書たるぞ正字ならん母屋と書は義か

うちさゞめき　小言いふなり

我御うへ　源のなり

またきに　いまだ先にてふ意にて有べき程よりははやき事をすべていへり

椎本にかなたにかよふさうしのはしの方にかけかねしたる所にあなの少し明たるを見置玉へり云々

さう〳〵しかめれ　あこがれありきもし給ふべき頃なるに本臺の定りたればさもあらでよそより興なく思はるゝなり

くまにて　物のかくれをいふ

おぼすことの　藤つぼの事

ほゝゆがめて　是は頻曲(ホホカメ)なり次にくつろぎがましくといふはふしなどしてゐる故にものいひのほゝゆかみていふ樣に聞ゆるなり枕草紙に夏ひるねして起たる中略ようせずば頻ゆがみもしつべしといへる思ふべし「和名頻豆良一名保々面傍目下也しかるに或說に方曲也すぐよかならぬといふは誤なり方の音は市亡切にてはうの假字なり萬葉にも方は波の假字に用ひたり今此所理りも頻にて本文もほゝと書たるを方曲と意得たるなどいと〳〵いふにもたらず

くつろぎ　今の俗に膝をくづすなどいへば崩ろぎの意かこゝは物かげといへど餘りにくつろぎたるはよからぬ物の樣なり

猶見をとり　かくよからぬさまに聞ゆるよりもまた〳〵見たらんには劣るべしとなり

とばり帳　細源氏の詞なり催馬樂の吾家(ワイヘ)の歌我家は戸はり帳をもかけたるを大君きませむこにせんみさかなにはなによけんあはひさたをかかけよけんなど丶云詞なり今源氏の給ふ心は今夜可然御そひふしをまいらせよとなり○そばのばは添たる辭のみ

さるかたの心もなくて　是も彼おほきみきませむこにせんとある心をもちての給ふなり

そひぶしの用意もなくば興なきあるじならんとなりあるじは饗の字なり此あるじとは人を饗するをいふなによけんとも　是も彼催馬樂の詞にて紀伊守か心なり

人々も　御供

あるじの子ども　是より御寢(オホトノヒモリ)たる所に猶あるじは侍りて御ものがたり聞ゆるさまなり

伊與のすけの子　細是は紀守が弟どもなり

いよの介　是は下に守とも書たれど實は介なる故にこゝにはすけと書又下には介は守に准ればかみともいふべきにて書る成べし伸を大貳とはいはず守をも介ともいはぬは下いふべからねばなり下なるをあげてはいふ習なり或說の意いとわろし

あてはかにて　あてはいせもの語古本に高貴の二字を用ひたり高貴人ぶりてすがたよろしきをいふなり諸抄にさま〴〵字をあてたるは皆推量のみ其字どもをあてと訓たる例はなし○はかはそこはかのはかに同じ量度の語なるを轉じて程計の意にいへり何ばかりの人何程の人なりなどいふがごとく其の位階分際を云

十二三ばかりなる　空蟬の弟小君なり

これは　紀伊守

故衛門のかみ　空蟬の父なり
いとかなしく　うつくしむをいふ
おくれ侍て　父に
あねなる人の　空蟬の緣に付てこゝに侍るなり
すが〳〵しう　紀にわが心清々しと大神のの給ひしを
本にて物のとゞこほりなきをも轉じていへりこゝは
其うらにてとゞこほりて殿上のまじらひを得ぬなり
えまじらひ　殿上に交はらぬなり
まうと　眞人なりいにしへは皇子に氏なへるは某の眞
人といひて八等の姓の第一眞人第二朝臣と天武紀以
後は見えたるを後に藤原朝臣さかんに成てより源に
も朝臣の姓を給へりさて後に此物語の比と成てはか
く對へる人を稱していふ語にも用ひたり故に此同じ
人をさして上人とも朝臣とも源氏ののたまひしなり
さなん侍ると　紀守
にげなきおや　まだわかき母なればなり
うへにも聞しめしおきて　かゝる女の侍るにいだした
てばやとつゝまず物の便にもらして申ししをなりさ
て聞しめし置ていかに成にけんとつゞく意なりさて
宮仕にと云よりみかどの仰の御ことばなりうへにも
聞しめし置てと云までは源氏ののの給ふ語なり
およすき　及次てふ意にて兒は成人に及次ゆき爰はと
しゆきたる人に及つけておとなしやかにの給ふを云
委しくは既にいへり
ふいにかくて　不意になり紀守が申
なかに　就中なり
うかびたる　凡の人の行末よくもあしくも成事古今定
りなきが中に女はことによろしき筋に成たるが愛た
きものなるを此人は下り侍るぞといふ意と見ゆるあ
はれと云詞は物を悅ぶにもめづるにもおもひおこす
にもかなしむにも嗚呼と歎息するをいふことなれば
下の語によりて樣〳〵に聞ゆるなり爰は上たるぞ悅
ばしくめでらるゝをいふ上の哀のことやと有はかな
しまるゝ意なり
わたくしのしう　上に私物におもほしてと有私に同し
さて君上はもとより有ゆへに私の主とはいへり
はかしつく　空蟬を
いかゞは　紀守
すき〳〵しき　年たけてかゝる妻まうくるをば
さりとも　源氏

つき〳〵しく　著々敷にて似著事なりかの後妻に配せけ違
んにもつき〳〵しくなり　本は人氣遠さをいふをかゝる所にてはけはさの
おろしたてんやは　紀伊守もすき心あらんに伊豫介も　み心なきがごとし
心ゆりすゞからねば空蟬をおろしたてゝうも任せま　いとよくにかよひ　小君の聲に
じきと戲れ給ふなり　いもうと　諸說に姉をも系圖には男の末に書などいへ
かの介　年たけたれど萬よしめきて色めくけしきと戲　ど其系圖の書法を爰に用べきにあらず又古今序注に
れの給ふなり　すさのをの尊を天照大神のこのかみといへりなど云
いづかたにぞ　源空蟬を問　も此注は後に物しらぬ好事か書たるをも意得ずして
みなしもやに　源にはゞかりて次下なる屋へおろせし　證に引などいと誤を重るなり姉にても男の方に對て
をなり　はいもといふ例は仁賢記日鷹吉士か妻か哭ていへる
下りあへざらん　こと急にてえも下堪ずしていづこに　に於レ母亦兄於レ吾亦兄弱草吾夫忄怜矣この古注云古
あらんと源にむかひて筋よくいふのみ　者不レ言二兄弟長幼一女以レ男稱レ兄男以レ女稱レ妹云云
ゑひすゝみて　御供の人々　此意なり此文の比にも猶さる稱の殘りて書る成べし
君はとけても　源　かの神代紀に天照大神の弟の尊をなせの命とのたま
いたつらふし　徒にひとりぬるなり　ひすさのをの尊出雲にて天照大神のいろせなりとの
こなたやかくいふひとの　空蟬なり　給ひしもみな右の注にて明らかなり後世古書を注す
あはれやと　あはれもしさるべきよしも有にやとなり　る人古へを見ずしていふゆゑに皆あたることなし○
いづくにおはし　小君空蟬を問　又兒にても君夫にても長を古しへは兒といひたり兒
かれたる聲の　ほそさこゑなり　をこのかみといふも上古には見えず中頃よりいふな
まらうど　源をいふ　らん【春海考和名備中賀夜郡庭妹爾比毋又下道郡磐勢
これ妹と弟を通はしてせといへり婦をもかよはして

いもともいへるも是にて見るべし
本居玉勝間に云鎮火祭祝詞伊邪那美命の御言伊邪那岐命を吾奈妖乃命又吾名妖乃命と有又其上の文に妹背二柱も書紀釋元二集などには妖の字なり庭妹倒比世今世に庭瀬と云是も妹の字を妖にあやまる也又同國下道郡吳妹(クレセ)下野芳賀郡廣妹遠妹などの鄕名是が讀をしるさゞればいかならんしらねども妹の字なるはいもともよまずしてせとかなをつけたり誠にせなるべく聞ゆる名どもなり妹尾太郎も妖なるべく盛衰記平時忠卿の事をいへる所に建春門院の御妖にておはしましかばこれがせうとに妖の字を書たりそも〳〵此字は妹にむかひて夫兄の意に皇國にていにしへ造れる字と見えたり漢書にもあれど夫兄などの義曾てなき字也といへり此說によれば春海の考も由なし】

ひさしにぞ　小君のこたへ
おとにきゝつる　源氏の事を小君のかたるなり
ひるならまし　空蟬のいふ
かはひきいれ　衣に
ねたう心とゞめても　源心
まろは端に　小君
女君はたゝこの　源氏の空蟬の聲を聞て推し玉ふなり
障子は寢殿の母やの角面と北面との中を隔たる障子なりすぢかひたるとは今夜源氏の寢所は寢殿の東の庇なり前の詞に寢殿の東表にとあり空蟬の方は北面なり前に此北の障子のあなたに人のけはひするとありされば源氏のおはします方より空蟬の臥所は北面にすぢかひたるべし
中將君はいつこにぞ　細空蟬の女房の名なりうつせみの尋るなり
なげしのしもに　次の間に女房達のゐるとなり下屋は雜舍なり夕貌におまへちかくも得參らぬつゝましさになげしにもえのぼらず○賢木にみす斗引きてなげしにおしかゝりて○宿木に御しとねさし出など云々みすの前にさしはなたせ給へるうれはしきになん云々うれへきこゆるにも侍らずしてなげしにおしかゝりておはすれば云々
しもにゆにおりて　下屋に中將は湯あみに下りしといふ
みなしづまり　源心
からびつだつ物　伊與介が家よりかりにうつりたれば

その闌度など有べしことに東面を俄にはらひたるにそこのものもかりにおきしならん
さゝやか　何にてもちいさき物をいふ小波をさゞなみ小石をさゞれいし小荻をさゝらをぎ小竹をさゝなどいふ類かぞふべからず
なまわづらはし　源氏もさすがに
人しれぬ思ひのしるし　源今中將におはせば先に中將の君をめしつるは我下おもひにかなひて我をめす心ちし來りぬとなり
ともかくも　空蟬心
やとをびゆれど　やとは驚く時のこゑなりあっともいふ
うちつけに　俘りにはかなるやうにおもひ給ふらめど我は人しれず年月に思ふ故に今君の此宿におはするをりを待出て方違にも來しぞとのたまひなすなり
あるまじきことゝ　ぬしさだまりし身なればなり
人たがへに　空蟬
きえまどへる　空せみの
いと心ぐるし　源は
たがふべくもあらぬ　古今しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれてふごとく思ふ心をしるべにて來つれば人たがへにあらずとなり
すきがましき　こゝはおし立がましき事はせじといふをかくいひ給ふなり
よに　是は世上にさる押つけわざは誰かせんものぞやてふ意にてよも見え奉らじと書たればよもと有を專ら用うされどよにもてふを略してよにともよもともいへばよにとあるも誤にはあらず
さうじのもとに　源氏の御ましのかたへ
やゝとの給ふ　今の人やあとよびかくるに同じ
いみじくにほひ　源氏の人香なり
それだに人のあまたしらんは　此詞金言なり奚にてあらゝかにし奉らば殘りの宮女も皆しるべししからば實事の有無は人しらずかへりて如何となり
どうもなくて　今も心に動轉せぬ人などいへり
おくなるおましに　夜のおましなり卽彼東のおましなるべけれど障子屏風などふかく有べければかくはかけるならん注に寢殿の御座といへど二所にあらんやは夜の御坐は母屋かといふ說はわろし上にしん殿の

東面はらひ明けてといひその次にかの女房どもの物がたりを源の立聞し給ふ前に此近きもやにつどひゐたる成べしとあれば源氏は東面二間の内の奥の間に夜のおましゝたるなるべし

あかつきに　空蟬を

いとほしけれど　源もさすがいとほしとはおほせどなり

いつくより　まだわかうて物なれ給はぬ御心のいつくよりかかく衰しる斗の言はとり出給ふにかあらんとなり何處なりことくと通はしいふ

いとあさましさにうつゝとも　餘りに有まじき御去わざなれば

いかゝあさくは思ひ給へざらん　先に源のか樣のをりを待出たるもさらにあさくはあらじと思ひなし玉へとの玉ふ詞の答なり我を思ひ下したるやうにし玉ふをいかで淺く思ふまじきぞとなり

いとかやうなるきはゝ　既に夫定りてはかくは有べからずてふ物の定めはしろしめすべきにいと押立玉ふは見下しあなづり玉ふ物なりと是は腹だちたるいひさまなり

そのきは〳〵を　箋源の御若年にて世の有樣をいまだわきまへずとなり

あながちなる　強の字をよめりたとへば缺目の多く有を人多く求るにわれ多にあさり得んとするがごとき語なり日本紀に檢竅の二字をあなげると訓するにてしらる（アナウカチ歟）

さらにならはぬをさるべきにや　まだわかければぬしある人妻を戀まじきものてふもえしらぬうひことなるを餘りしきそこのとがこそあれ又聞玉ふ事も有べし強たるわざなどのすき心も今迄更に爲ならはぬをそこの事につけてかく思ふは宿世の有て思はするにや有らんとなり

さらにならはぬを　今までしならはぬをなり

さるべきにや　宿緣にてやかくあながちに思ふらん

有ましき我心のあやまりは知つゝ猶いかなるにかあながちに戀しくおぼえらるなど女のいふをもよくうけて實樣にの給ふなり

みづからも　源の

上にいふごとくわろくいひちらさるゝをいふ右のさるべきにやまでは源の自らを理るなりあ

はめられ云々よりはさるきはある人を强ことすればわろくいひくたさるゝもそこのことわりなりといひて此二ツいか成故にやとみづからだにおもひ別がたく侍るとは實さまにの玉ふ

たぐひなき　御有樣のいよ〳〵打とけ聞えん事わびしければ空蟬の心なり此所はさまざまゝに聞ゆるが中に下に二度中川に宿り玉ふ時空蟬の思ふ樣うちとけ人けなき樣を見え奉りてもあぢきなくと有に爰も同じくて類ひなき源には身をはぢつゝしまれぬるといふなるべし

且夫ある身のもとよりの貞心かた〳〵にて思ひさだめて情なきものに成てあらんと思ふなるべし○又世に稀なる人に貞ならぬ心を後に思ひさまされんがわびしさにてふ歟○又よのつねなる人の强ことにはせんかたなくてなびさつらんとも人も思ふをかく類ひなきにはめてゞ貞心を失へると思はれんがわびしき故にいよ〳〵とけがたしといふ歟猶此はじめのを用うべし例語あればなり

すくよかに　紐の字をよめるごとくたゆまず情なきさまなり惣て物の餘情なく見ゆるをすぐ〳〵と立てなどいふめり

さるかたの　情のかたのいふかひなき物になりて過さんとなり

人がらの　記者

なよ竹　女竹はなよゝかにたわめどしなやかなれば中々折がたきにたとふ萬葉になゆ竹のとをよる妹とよめり

まことに　空蟬

心ぐるしくはあれど　源氏も空蟬の有樣をいたはしくは思し召ともとなり箋なくさめといふ詞にかけて見るべし源の心なり

みざらましかば　實にあふ事を見るといへるも例有

なぐさめがたく　是は心のいとくるしき時さま〴〵とすれど心の和がたきをいひてこゝは深くうしと思ふさまなり

などかくうとましき　源のゝ給ふ疎しさなり

おぼえなきさまなりしもこそ　或說に不慮の參會こそ一段ふかき契の因緣なれどなりといへどさばかりの事を今更のたまはんに折ぬべくも慰えずこゝは源も語つきて今は御身の尊きも思ひしらぬ樣になは人な

どの強ごとなどをこばまん樣に空おほれするよと恨
給ふならんよりて女の語に次々源の尊とさをあがめ
てみづからの實の事をも申と見えたり然らばおほし
もなどいふ意にて覺えなきしもこそとの玉ひさてそ
の覺えことなる事なき人だにかくおりたちては宿契
有と思ひて從ふべきをまして我の玉ふものをさるさ
まもおもひわかぬ人の如くになどの玉ふなるべしこ
とにいよの介などの本主のごとき君なるをも思ひし
るべしと成べし是は有べき仰ならねど御こゝろなら
ぬほこり事をものたまふべき折なり下に二度おはせ
し時に女の思樣しひて思ひしらぬ貌に見けつもいか
にほどしらぬやうにおぼすらんといへるをむかへ見
るべし

いとつらきと　空せみ

いとかくうき身の　空せみ介が妻とならぬ先の身なら
ませばなり

有しながらの　とりかへす物にもかなや世中に有しな
からのわか身と思はんてふ歌或說に引たり何より出
たるにやいまだ不考例の作事歟有しながらは在し儘
の意なり

あるまじき我たのみにて　源氏に我思はれんとたのま
ん事は有まじき事ながらと卑下していふ

のちせもや　萬四後端山後毛相常念社可死物乎至今日
毛生有。また二首同所にあれど此抄の引歌はなしよ
み誤れる成べし花もとの身ながら源氏にとはれ奉ら
ば御心さじ愚かなりとも見なはし玉ふやとも賴むべ
きにとなり空蟬の心なり只のちといはん爲なり此歌
の詞を舉てのちせといふのみ

かうかりなるうきね　或說に公卿の女のかく受領の妻
となれるをいふと侍れど妻となれるをかりなるとい
ふべからず爰はいと心をいひのこしたるものにて上
の有しながらの身にて中略おもひ玉へ慰めましをとい
ふ次に人の妻と定りておもひもかけ侍らぬにかく
源とかりそめながらもそひぶしするは又げに宿緣も
有ての事にやと思まどはるゝといふなりさて折方に
なりての詞なるにてもしらる下に心えぬすくせ打そ
へりける身を思ひつゞけてと有も卽是なり

みきとなかけそ　古今集にそれをだに思ふことゝて我
宿を見きとないひそ人のきかくにとあるをかけそと
引かへて用ひる面白きなり師此歌は大和物語にかつ

らぎの御子の逢まじき人にあひてよみ玉へるなり我
に逢じといふは扨て置き我やどをみたりともいひそ
人の聞んずるにとのこゝろなり今空蟬もあふまじき
源氏にかくわりなくてあひし事思ひよそへらるれば
いへる詞なり孟此夜實事有やいなやの說々あり或說
に貞女の一種なれば實なしとみるべしと云々但此時
は逢たるよし詞どもにも見えたり一夜はわりなくて
したがひてもそのまゝつれなくてやみぬる事尤貞節
なる心にやこの儀用なり

おもへるさま　女の貞を失ふを万づに思ひ入りたるさ
ま

おろかならず契りなぐさめ給ふ　此所うちとけたる事
を略して行末の契りをし又逢てのちいよ〳〵女は心
なくさめがたかるを萬にいひなぐさめ給ふとなり○
或說に實事はなしと見よといふはいと强たり上より
こゝまでさま〴〵逢がたき事をいひ來て此所に俄に
契りなぐさめ玉ふと有からはその間に實事有ことを
定かにしらせて書り此記者の意いかにも實事なきを
いはんとせば書くべき語こそあらめ又しかあひまい
らせたるよしに有べき故有てこそ書つらめ後の人い

みはゞかりていふべき事かは惣て事をまげかくして
敎とせんとするは今の人はうけず有のまゝにわろき
はわろしといひてさてかくはあれどさてはわろしと
て理り明らかに正しいふ時ぞうけかひ侍るめりさて
その理りも又おのが好む方より出たるは多くは强こ
となれば理りは理りながらうけぬ物ぞかし

いぎたなき　孟能ねたる物かなりいぎたなきは人の
ねごきをいふ

夜ふかくいそがせ　源氏は

さしはへては　わざとはといはんが如し

いとくるしかれば　空せみをはなち給はぬをなり

ゆるし給ひても　源

いかでかきこゆべき　文なども誰に傳へん物ぞとなり

世にしらぬ御心のつらさも　つれなくて終に事なかり
しはしを中將にしらせんとてなり

あはれも淺からぬ　是はつれなきものから源の心には
しみてあはれとおぼすとの給ふ意か

鳥もしば〳〵　先なるは初こゑにて夜ぶかくこゝには
夜の明てしきりに鳴なり

つれなきを　空蟬のつれなき事をまた恨つくさぬ間に

心あはたゞしく明ぬるをいかでかくは驚かしぬらん
となり物をとりも講ぬに鶏をそへたりさて實事なし
と中將におもはせんの意なり且上に疑ひの辭なくて
らんといへるは例のいかになどいふ語をこめたるて
にをはなり

いとつきなく　人に逢しを思ふ故に

つねはいとすく〳〵しく　なまめきにほひやかなるか
たなく雄々しくなつかしからぬいよの介の事を云

夢にやみゆらん　伊豫にて

身のうさを　是も鳥をそへたり孟いろ〳〵のうさをと
り重ねたる心なり師空せみの公卿の子にていよの介
の妻になりし事かくぬし定りたる身にて源氏にあひ
し事又有しながらの身にてかく源氏に思はれ參らせ
ばはととりかへさまほしく思事などのうき歎きを思
ふにあかぬうちにはやわかれを告る鳥の聲さへすれ
ばいよ〳〵うき事をとり重ねてねをなくなり

ことあかく　專らと明はつるをいふなり明るを事とし
て早う明る意なり然れば專らと明るてふに同じ

ひきたて丶　障子

へたつる關　新勅撰によみ人しらず　相坂の名を賴つ
丶こしかどもへたつる關のつらくも有哉いせ物語に
彦星に戀はまさりぬ天河へたつる關を今はやめて
よこの歌は障子をへだて丶の歌なれば爰によく合た
り兩首とも用うべし

御なほしなどき給ひて　源氏かへり給はんとて

かうらん　高欄なり

打ながめ給ふ　彼名ごりを思給ふなり

酉おもて　是は母屋の西面の庇の南の方よりのぞく成
べし

そ丶ぎあけて　そ丶のかして明るなり

こさうじのかみより　小障子の上より源のみえ給ふな
り

すき心どもあめり　のぞく女ばら

月は有明にて　月は猶有て夜は明る比は月の餘光はな
くなりて月の形のみ空にさやかに見ゆるをいふ此影
を地にうつれる影なりといふはいかにぞや古今集に
「白雲に羽うちかはし飛鳩の影さへ見ゆる秋の夜月
といふ歌をも地にうつる影と意得そこなへる說有に
よれるにや彼も是も地にうつれる影をいふべき所に
あらずたゞその形のみゆるをかげとはいへるなり惣

て影といへるは物にうつれるを多くはいへど又その
物をも遠く幽に見ゆるをばいへり

中々をかしき　月のさよ中はさる事ながらかゝる明が
たも却ておもしろしとなり

何心なき空のけしきも　凡物みなしかなり見る人の心
の時にしたがひて花にも泪をそゝぐといへり

人しれぬ御心　源氏

殿にかへりて　爽のかたなり此次に此ほどは大殿にの
みおはしますといへばなり

ましてかの人の　空せみ

すくれたる事は　空せみのさま源氏の心なり空蟬はか
たちはすぐれねどもてなし用意などよかりしなり

くまなくみあつめたる人の　彼きざみ〳〵ありて中の
品のけしうはあらぬえり出つべきといへる事を思ひ
あはせ給ふなり

中納言の子　上には故右衞門督といふ爰には中納言と
いへり權中納言兼右衞門督たりし故なり

うへにもわれたてまつらん　御門へもなり前に殿上な
ども思ひかけながらと紀伊守か申たる故なり

いとかしこき　紀伊守

あねなる人　うつせみ

そのあね君はあそんのおとうとや　細源の詞なりあそ
んとは前にまうと丶有し類ひなり賞翫しての詞なり

紀伊守をさしての給ふなり空蟬の腹に子のあるかな
きかを尋ね玉ふなり空蟬の子あらば紀伊守別腹の弟
なるべし孟空蟬の腹にいよの守の子ばしあるかと問
玉ふなり

さも侍らず　紀守が申なり

此ふたとせばかり　伊よが妻となりて

おやのおきて　うつせみの父中納言はみやつかへにと
思ひおきしを父なくなりて受領の妻となりしをうれ
ふるとなり

あはれの事や　源

けしうは侍らざる　あやしうわろくはあらぬとなり

世のたとひ　花まゝ子はまゝ母にむつびぬ世と事のた
とひに申也河諸君援蜂君莫レ蔡使二君父子一成二豺狼一
白氏文集此外和漢例多也師これ繼母樓上にゐて蜂の
身をさすをとれとて繼子にとらせて父にはわれをお
かさんとせしと讒せし古事なり（）文集の句繼母が繫
想せし事和漢ともに有事なれば用意して近づかずと

いふのみにや此守下の心に心かくるより却て如此い
ふならん
此子あて　小君
こまやかに　小君
あて人　高貴人
いもうと　うつせみをいふ姉をも男の方より妹といふ
事上に仁賢記を引ていへり
さるべき　小君
うちいでにくし　源うつせみの事を
よくいひしらせ給　文もて行べきやうを
ふかくしもたどらず　こはあるまじき事なるをいかで
有けんいつはり給ふにや文もて行たる時いかにあら
んとなどまではたどり思はぬなり
面かくしに　御文はさすがにゆかしくはた小君におも
はゆければ面かくしながらひろげたるいともよく書
きたり
見し夢を　業平の和ぬる夜の夢をはかなみまどろめば
いやはかなにも成まさる哉と詠るをもて少しかへて
よみたるなり歌はいとこそ劣りたれげに時世下りた
るといふ中にも業平の心詞のにるものなきをしるべ
きなり
ぬる夜　或説に戀しさを何につけても慰めん夢にも見
えずぬる夜なければてふ歌を引たり是は何に出たる
にや
めもおよばぬ　源の風情をつくしたる艶書のさまなり
めもきりて　きりては曇りてなり霧をきりといふも本
くもりなり
こゝろえぬすぐせ　くだりて受領の妻となれるに又源
の御こゝろざし深きなどなり上にかりなるうきねの
種といへるに合せみるべし
またの日に　源
かゝる御文　空蟬のいふ
うちゑみて　小君
心やましく　細空蟬の心なり小君に殘りなくいひきか
せ給ふよとおもふなり
いで　發語の詞なりうつせみのいふ
およすげたる事は　さやうにおとなめきたる事はいは
ぬ事ぞとなり
めすには　さりともめすにはいかでとて返しは得ねど
もまいるなり

此まゝはゝの　空蟬の事
あたらしき　としたけ人の妻となりて有を惜むなり
ついせう　追從なり
此子をもてかしづき　小君を大切にし將てありくな
り
しか〳〵と申に　小君空蟬の申されしやうを申なり
またも給へり　文を又給へるなり
あこは　吾子なり萬葉などに吾をばあともわともいへ
りさてあこはわか子といひてしたしみの語なり
くびほそしと　身ひよわく物げなくとなりいとやせお
とろへたる兒の首ほそきにそへての給へり
ふつゝかなる　萬葉に太馬をふつまと書たればふとく
たくましきをいふ
かのたのもし人　伊よ守なり
さもや有けん　小君
をかしとおぼす　源心
この子をまつはし　小君
わか御くしげどの　或抄云内藏寮外御服など裁縫所な
り順德院御抄わがとは源氏の家の御ぞなどたちぬふ
所をいふ
まことにおやめきて　わが子にてをあれよとの給ひし
語を受けてかけり
かろ〳〵しき名さへ　かく有まじき事の上にはたをさ
なき中たちに文傳へなどせる心のかろ〳〵しき名を
副とり添ん物となり
身のおぼえを　ぬし定れる身なれば好色風流はつきな
しとなり
何にかはせん　わすれがたき御けはひなれど今かゝる
身となりて人しれず心をかよはしまいらせんも何の
用なきわざなりとなりくやしきことはくやしかれど
かく物の定りてはかくこそ有べけれされど人情の常
にてのこる心の有をいふはこれ人々の心のうちにあ
る事をいひ盡すなり
おもへりしけしき　前によしいまはみきとなかけそと
て思へる樣げにいと理りなりとある詞をうけてかけ
るなり空蟬がさすがに源氏をおもはぬにはあらざり
し成べし
はるけんかたなく　思ひ晴さんかたなく
人のためも　空せみの爲も
れいのうち　内裏なり

さるべきかた　禁中より大殿へも二條院へもかたふた
がらん折を待いで給ひてなり
にはかにまかで　二條院などへとて退出給ふ道よりな
り
おはしましたり　中川の宿へ
めいぼく　めんぼくなり
女もさる御せうそこ　小君して今宵おはすべきよしつ
げ玉へるなり
おほしたばかり　空蟬の心方違になぞらへて是へおは
せし心を淺からず思ひしれ共となり
人げなき有樣を　上にいとたぐひなき御有樣のいよ
〳〵打とけ聞らん事いひしければすくよかに心づき
なしとは見え奉るともさる方のいふかひなきにて過
してんと思ひてといへるに同じ世に類ひなき君故に
女の中々に恥つゝしまるるなり
夢のやうにて過にし歎を　はじめの方違の時逢まいら
せし事をいふなり
猶さて待つけ聞えさせん　此程といふは右のおほじた
ばかりておはせしは淺からず思へば待つけ奉るべき
事なるを又思ふに人げなき有樣をよく見え奉りても
わろく只先に逢奉りしのちのなげきに又かさねんも
いかゞと此二ッをいづれにせんと思ひみだれて思ひ
みるに面はゆく待つけんよりもまだ〳〵かくれたら
んよしと思ひ定めてかくるゝなり或說には文義も猶
の詞も得ず又人の思はんがはづかしと云說は源と小
君と中將の思はんをいふ意か夫らはいふにもたらず
右の二ッを勘辨して夫故にかくるゝに猶とはいひて
さて實なる心よりはみづから待つけんもはづるを添
いふなり
かたはらいたし　上にいふごとく是は傍痛にて見ぐる
し聞ぐるしといふ類の語なるを此ほとには他の心を
扱ていか上にも卽いふ事となれるなり
はなれてをとて　源氏の御座と程はなれてんとてなり
此をはよに通ひてはなれてよといはんが如し宇治川
に船いたせをとよばふなどいふをもみな同じ
さる心ちして　源心
人とくしづめで　人々をとく寢させてなり
けしからぬ　氣しきあらぬにて常の樣ならず恠しきを
未に氣しき有烏のから聲にといふは一けしきことな
る聲せしをいふなれば異なるやうにて同じ意に落る

なり
つかふものか　かふの反くなり故につくを延てつかふ
と云
いみじくいむ　惣てはものいまひ多き中をさなきがか
ゝる事するは甚いむ事といひおとすなりさる忌事有
にはあらねど小君をおとすとて作れるなり
さけず　河不遠　不離　不遵共
いとかくしなさだまり　受領の妻と
いかにほとしらぬ樣に　上の覺えなき樣成しもこそと
いふ所にいへるごとく源に向ひてはいかにかゝる道
の理り成とても身の程源のほとをも思ひてかくなめ
げにつらくはすまじき物とわがかくする心ながらも
且むねいたまるゝなり
とてもかくても　かく思ひ定むる人のかたきなり大か
たの事こそあれ光源氏に戀くれ奉るに猶かゝるぞか
し上の品定めにとりなせはあだめくといふごとく物
つゝみようする女も一夜の夢など見ては打とけなび
き侍るならひなるを此女こそ類ひなけれ是物語の始
めに書出せしは專らかくこそあれかしとて書けんも
のか
むじんに　心なくしてなり
君はいかにたばかり　源は小君が才覺を心もとなくお
ぼしめすなり
ふようなるよし　不益の字をやくを延てやうといへり
惣ても無やうと云は無益にてえきなしかひなしてふ
詞を同し心に用ふるなり今も無やくの事とも無やう
の事ともいふにてしるべし後世人は不用の字をあつ
れどやうといふ音の意を得ぬ俗のわざなりよりて是
らをばふようと書はわろし
あさましく　源
とばかり　時ばかりの略なりよりて暫のことゝなる
はゝ源木々の　たちよれば消かくるゝ人の心の程はしら
でよく戀路にまどひつる事よとなりその原やふせや
に生るてふ歌の事をば既に引たりあやなきはかひな
きなり上に委し
聞えんかたこそなけれ　今はいはんかたもなしとなり
源の心のうちくやしくも猶戀しくも物しともおぼす
べきをこめたり
空數ならぬふせや　その原のふせやを賤が伏庵にいひな
して女の身をよそへたりさて其數ならぬ名のうきに

とはかゝる受領の妻となりたる身のいやしきにこそかくにげ隠れ侍れむかしながらかゝらはさもあらじをと先にいひつる意を一首につゞめていへり或説に或は贈答なりといへる二ツながら委しからず光君は右の歌を小君して贈り玉しを女の見てかくはよみたる事同しくふせやのはゝ木々のことを詞とせるにてしるしされど返しをまいらせしにはあらでかくよみたるのみ成べし詞に聞えたりとあるはよみたりてふ意のみならん光君に返し聞えしならば上の詞にまどろまれさりけりとはかゝじ此詞の様かの歌を見ていと久しくねもいらでありてよめるをしるべし

聞えたり　御こたへしたるよしなり

わび給ふ　空せみは

ひと所すゞろに　源氏一人

人に似ぬ心ざまの　師源になびかぬ女はなきに此人こそはかく心をも詞をもつくせどまだ不絶おこたらず貞情を立るも怨ましくなり

かゝるにつけてこそ心もとまれ　師うちつけのすきゝしさなどはこのましからぬ本性にてなどいへる心なりかやうにつれなき故源の心もとまるぞとなり

さばれとおぼせ　さらばさてあれとなり

いとむづかしげ　小君詞

かしこげにと　おそれがましといふなり

いとほしと　小君心に源を

よしあこだに　源詞空蟬こそ源を見捨れ汝なりともせめてなすてそとなり恨わびたる詞なり

うれしくめでゝ　小君心なり

つれなき人よりは　源

中々哀　中々に心をつくべし本意の空蟬よりもなほ哀との意なり

おほせらるゝとぞ　細とぞとは紫式部が吾書たることをしらせじのためなりこの物語好色をもていふ様なれども人の心もちひをしへ何の書にもかやうなるあるまじきことなり心をつけて見るべきことゝ云々

源氏物語新釋

空蟬

此卷の名は「空せみの身をかへてける木のもとになほ人からのなつかしき哉」てふ歌によりぬさて光源氏十六のとしの夏なり誰やらん此文に竪横てふ事を云出したるに其理りを書る物のいひなしわろくて理り明らかならず先竪とは本系の事にて源氏はもとよりにて葵上紫上などの本系の類をいふ此空蟬卷などの類は本系にはあらねど箒木の卷よりつゞきて一つの筋なれば横といふべからずよりて竪の並とはいへりされど猶是は横ともいふべけれど又横といふ類を一つたてゝいへば暫並とはいふのみさて横とは逢生の卷の類なりその卷はみをつくしの初に書べき事なるをそこに書てはことの様却てむづかしければ別に一卷に書たるにて物の横に出たるが如くなればいへり

○横竪をかぬるとは未摘花の卷の類にて此卷初めには若紫の事末には若紫より後の事を書たり然れば横のことくして又一つの並をもいひたればよこたてをかぬるともいふなり是も卷々の惣ての心ゑらしめん科なればさも有べしされどかゝる事にいと心をつけずとも本末をよくよみとる時はおのづから玄らるゝなり今の人はかく様の事にのみ目をくらして文の意をよくよみとかぬなるべし

ねられ給はぬ　是は箒木卷の終の詞につゞけてかけり

われはかく人に　餘りの御心やさしさにいとせめて小君にかくの給ひけるなり次に例のやうにものたまひまつはさずと有を以ておもへば今かくのたまふを女にもかたりぬべしとおぼすよりなるべし

うしと世を　空蟬のつらきに

なみだをさへ　小君がなり

いとらうたしと　源心なり

てさぐりの　小君のさま

にかよひたる　空蟬に似通

おもひなしにや　空蟬の御といひ手さぐりさへ似たれば

あながちに　こは箒木の卷にかくれたらんところになほ

めざまし　餘りにけしからぬにて俗にあきれたると云ほどの語なり

さう〳〵しと　さびさびしきといふ語にて万葉に不樂
不怜など書たり
女もなみ〳〵ならず　源氏をしもかくもてなすはと思
なり
かたはらいたし　傍痛の意なるをかく人のおもはん事
を卽身のうへにも轉しいふは後世の語の常なり
御せうそこもたえて　其後は源氏より
おぼしこりに　光君の
苦ひていとほしき　つれなき我に心かけ給ふ事なり
たゞならずながめがちなり　さはおもひながらも何と
なく直なるよりは愁はしきなりながめとはいづこに
ても心に物おもひつゝ默然として物をまもりをるを
云
物から　物乍なり
人わろく　人めわろくなり
うれたくも　萬葉　慨哉ウレタキ
心にしも苦たがはず　思はじと思ふ心にも戀しきは苦
たがはぬなり
たばかれ　古へたばかるといふは只おもひはかるをい
ふ後世僞あざむく心をかぬる樣におもへるは古書の
意にかなはず
のたまひわたれば　をり〳〵の給ふなり
わづらはしけれど　小君空蟬のつれなさを今ははかる
べきやうなきに
の給ひまつはすは　源氏の
くに〻くだり　紀の國に
夕やみの道　萬葉　夕やみは道たど〳〵し月まちてかへ
れわがせこそのまにも見ん
わがくるまにて　小君のなり
この子と　源心なり
さりげなきすがたにて　後に夕貌の宿へかりぎぬすが
たにておはせしが如く光君のさまならずしてなり
ひき入て　車をなり
たて奉りて　源氏をなり
こだちあらはなりと　かうしを明たる時そこに侍る女
房たちのこはあらはなりといふなり
西の御方　伊與介がむすめ軒ばの萩なり空蟬の住家の
西の方にあたりてすめるなるべし
やをら　今昔物語やをらに和の字を用ゆ
すだれのはざまに　簾と格子との間なり

此人つるかうしは　小君か入つるかうしなり二度入所
には此度はつま戸を敲て入とありこゝはかうしをあ
げさせて入りたり
にしざまに　只今源氏はたつみの方よりすぢかひて西
の方へ見給なり
きちやうなども　巴沙　二季にかはるなり衣裳も如此屏
風などもうちとけたる事勿體なしと女の油斷のをし
へなり
火ちかう　或抄基うつゆゑ灯ちかきなり
もやの中柱　寅屋にておもやの事なりあるじの常に居
所なり
わがこゝろかくると　空蟬
こきあやの　こきは紅なるべしひとへかさねはうらつ
けぬをひねりかさねたるにて夏のきぬなり
何にかあらん　こきあやの一重がさねは色もこくて火
ちかければてり合てまがはぬなりさて何にかあらむ
うへに着てと云は是は小袿なるが色のいとうすくて
見わきがたき成べし小袿なる事は下にみゆ
もの氣なき　ひはずなるさまなり
かはなども　空蟬の用意ふかき體なり
わざとみゆまじう　いつもなるゝ人にしも用意するな
り
てつきやせ〳〵　細碁をうつには手あらはなるべきを
もよきほどにひきかくして用意ふかきなり
今ひとりは　今一人は東に向ひたるを見給ほどに殘り
なく見とほさるゝなり軒端の萩なり
ふたあゐの　紅と藍として染たる色をいふ
こうちき　小袿はうはぎの又の上に當さまにきるなり
からきぬはきとしたる時に著るのみされどいとやん
ごとなき人又あるじめきたる女はからきぬはきず是
もいさゝか定かならねばだつ物と書り
ないがしろに　蔑なりかたちなよゝかに心おだしき人
は衣にも堪ぬさまに見ゆるを此女は心に用意なくば
うそくなれば著たるものをも物ともせぬさまなり
くれなゐのこし引ゆへるさはまでむねあらはに　袴の
腰なり神代紀に天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於
臍下而笑嘘向立といふまでにはあらねどむねあら
はに見ゆるをいふ腰ゆつるあたりはやがて乳の下に
近かるべければなりむかしは女の乳のあらはるゝを
も恥たるをまして是は甚しきなり

ばうぞく　傍若無人の意なるをさまでは詞のあたゝかじ
過たれば傍若とのみいひて去らするなり且去やくを　心とけに　心利
ぞくと訓は此國の唱への例なり　さうどけば　さは〳〵めくをのべたる語か又騒動の字
音にも侍るべしけは氣にてその樣を云
をかしげに　愛の字の意なり　軒端の萩は東向にて殘りなく見ゆと有か
つぶ〳〵と　つふらかとは丸き物の形を一つぶ二つぶ　おくの人は　らはうつせみは西向なりさて最屋の中柱にそばみて
などいふそれより轉じてこえ丸がりたる心にてこゝ　ゐると云は南向なるもやにて南の廂によりたる方の
にはいへり　中柱とみゆれば其柱の内つ方にうつせみはゐて柱より
そゞろか　おほとかならでそゞろに心がゐきさまなる　西に盤は居たるなり然れば盤より東は奥盤より西
事上にも下にもみゆ　さがりたる程あひをいふ萬葉にかやかり許　ははしといふべし下に空蟬をそばめにみゆといふも
さがりば　さがりたる程あひをいふ萬葉にかやかり許　西向にゐたるを南の東よりに立て見ればなり
閑と云ばかの如くその程量をはかといふを略しては　まちたまへ　空せみ
とのみもいへり濁るは音便なり　持の音なり
いとねぢけたる所なく　くねゞゝしき所姿にも心にも　ちにこそあらめ　軒端の萩
なきなり　いで此たびは
をかしげなる　愛の字の意なり　およびを　只指をいふ前にもいへり
靜なるけを　貌よろしく心もさわやかにみゆる物なが　いよのゆげた　或説に云數おほきとにいふを且父の伊
ら是に去づかなるけをそへたきとなり　興の任なればとりよせたり六花集に古歌とていよの
かどなきにはあるまじ　記者の語とも聞えず猶光君の　ゆのゆげたのかずは左り八つ右は九つ中は十六すべ
心とせん　て卅三ありといへり又雜藝歌にはいよの湯のゆげた
けちさす　圍碁の闘なり俗にだ目をさすといふにおな　はいくついざ去らずかずへずよまず君ぞ去るらんと

あり
たと〳〵しかるまじう　よくかぞへ得んとなり
たとしへなく　しは助辭なり空せみのさまなり
めをしつとつけ給へば　源の目を突と著たまへばなり
をしのしは助なり
おのづからそばめに　片そば見ゆるなり
目のはれたる　目のうへ少し腫たる樣の人有ものなり
あざやかなる所なう　少しひくきかたか
ねびれて　俗に木などのみづ〳〵しからぬをすねびたる木なりといふ是にて過捻ぶりのことなるべし又古語とも見えねば數年ぶりの音語かそれを上略してねびれてとはいふなるべし
〔春海考るにねびれはねびまさるなど有と同語にて年のふけたるをいふなり語釋は詳にしりがたし和名抄に能登國鰀屋郡鰀北とありこれも年更たるをいふ詞ゆゑに鰀屋の字をねびとよめるなり此屋は媚と同じく老女の稱なり〕
このまされる人　軒端の萩なりかたちは空蟬よりはまさりたるなり
心あらんと　空蟬
にぎはゝしく　軒はの萩
そはるれば　そばへるを云か上卷にそばづきされば
たると云に萬葉にいそばへをるてふ語を引て云が如
し○又そぞろぐを云か
さるかたに　かゝるも又一方にておもしろく好ましき
なり
あはつけしとは　あは〳〵しく心あさげになり
まめならぬ　實目ならぬ好色心
うちとけたるよな〳〵　世なり時と云んが如し
引つくろひそばめたる　面もちも形をもつくろひ立て
なりその中に顔をば少しまさめに見えぬ樣にするを
そばたてともいふべけれどこゝの處去か事をわけて
書るとも見えず
かいま見　本は垣間よりひそかに見たるより出て何處
にてもひそかに見るをかいま見と云日本紀に視二其
私屏一と書事は例のから樣に字を置たるのみなり此
字につきてまどふ人あるべし
いとほしながら　去らでうちとけたる所を見るは
出給ぬ　簾の間より外へ出て
いとかたじけなしと　御心よりとはいへど貴人をかく

てまさするはばづかしむるに似たればかたじけなし
と小君がおもふなり
れいならぬ人　小君が詞なり軒ばの萩の有を云なり
さてこよひ　源氏
さもなびかしつべき・　空蟬のなびかざるべきけしきに
やは有らんとなり
あかるゝ　退散を訓なり
若ぎみは　小君を女房のいふなり
去づまりぬなり　源
いもうと　空蟬なり
きのかみの　源
我にかいまみ　去らずがほに僞のたまふ
いかでかりさは侍らん　頃間見なり侍らじとなり
さかし　去かあらんかなり
されどもとをかしく　能見給物をと
いとほしと　現はに見たるを石にもいとほしながらと
云り
此たびは　毘の濁と美の清と通ふ例にて此度をこたび
といふべきをこたみとはいへり音便よければなり然
ればこたみと書たる本よしひと書ては此びは濁る例
なり
つま戸　左右へ開く戸は中に端のあふ故につま戸とい
ふつまははしなり
まろ　まろとは昔男女ともに我を下していふ語なり方
有をかど有と云に對てかどなく丸くのみして愚成て
ふ意なり
たゝみひろげてなす　後に火有かたをさへんに便り有
かたへ屏風をたゝみよせて所をひろくしさて人々去
づまりて後やをらおきて火有かたへ屏風引ひろげて
入來るなり所をひろくするは風のらん料といひ去ら
するなり
とはなちつる　右のつま戸のかぎはなちてあけし女童
なり
そなたに　ひがしのひさし
とばかりそらね　時ばかりを略しての語なり萬葉に例
有されどこゝなどにはいと去ばらくの事に用う萬葉
十「夜のふけぬとにとあるは時にの略なり
やをら　和にてそろりとなり
をこがましき　よからぬ事もこそあらめと
やはらかなるにも　あたらしきは音あるを忍びてわざ

となえたるを著給ふなるべし
心とけたるいだにねられず　いは息の略にて夜る身心ひとへひとつを着て　「いとあつければ肌にはひとへ
を安くするなり寢は臥なり字注に宿は安息也寢は臥　・のみきて小袿はもとより衣も皆上におきてふしたれ
也といふに同じ拾遺「君戀ふる涙のかゝる冬の夜は　ばそのひとへのみにて外をはすべしおきて出たるな
心とけたるいだにねられず　りすべりといふは上の衣などをばぬぎたれて身のぬ
ひるはながめ　物思ふさまなり　け出るをいふ紀に垂をすべしと訓をおもへそのよし
春ならぬ木のめも　六帖「はるはさめひるはながめに　下に有
くらされて春は木のめもいとなかりける　たゞひとり　空蟬一人と源の思給ふなり
古今「衰ともうしとも物を思時などか涙のいとなか　ゆかの去もに　よき人は濱ゆかの上にぬるなり侍女な
るらむいとなくは無暇也このめは木の芽によせたり　どはたゞ下にふしたり
こうちつるきみ　軒ばの萩　人たがへとたどりて　人たがへと見えんもはぢあるが
いまめかしく　珍しきなり　うへに空蟬に通ならむと此人にあやしまれんは人の
わかき人は　軒ばの萩なり　ためいとほしとなるべし
かゝるけはひ　上の御そのけはひ云々といふより隔句　空蟬
につゞく　ほいの人を　猶尋るに尋あはずはをこがましさをかさ
いとかうばしく　御人香なりけはひも去るきが上にか　ねて女のおもはむ事はづかしかるべしとなり
うばしきなり　かのをかしかりつる　軒はの萩
かほをもたげ　持上にて知阿の反たなり空蟬なり　わろき御こゝろ　記者の語
身去ろき　身を去ぞきよるをいふにて後去（シリック）てふ語なれ　やう〳〵めさめて　軒端の萩
ど去かしてなたへよるをもいふは轉語なり　いとおぼえず　おもひがけぬを下にもかくいふ
されば み　酒麗の音なり前に注せり

あえかに　あえかにはこゝはまたいとわかくて物はかなき方に轉じていへり此語の本はあえはやふの反ゆなればゆえ二廻通してあやふをあえといふかはあやしげといふに同しくけとかと通へりさてやいゆえよの音なればかなもあえと書べし是には似てとなる語多し俳諧待雙璃愛これらの中にあやふげをあえかと云ふあやかるをあえと云は假字同しくて意別なり待雙璃の三ツも假字はあへの假字にて各意もとなり

われとも志らせじ　源

ことにも　事ともおぼさねど

つらき人　空蟬なり

とつけ給ひしさまを　ことづけて萩をいかでと思ひしるよしに聞えなし給ふ

たどらん人は　世になれてたどらん人はなり

心えつべけれど　實は志からじと

さし過たる　甚の時はさかしく

にくしとは　軒はの萩を

うれたき　慨

かたくなしと　源の我を

有がたき　世にめづらしきなり

あやにくに　遮惡なりおもはじとするをあへてむかひ來る樣の時いふ語なり

まぎれがたく　軒ばの萩に逢給ふほどもおもひまぎれ志れがたきなり

この人の　軒ばの萩なり

人志りたる　或云是は軒ばの萩の體に應してうちひらめにの給ふなり

つゝむこと　源氏も世に

身ながら　源氏の我身ながら我心ともならぬぞなり

又さるべき　女のおや兄などをいふ

なほ〳〵しく　或云すじめにかぎらずのたまふなり

人のおもひ侍らん　軒ばの萩こたへ

え聞えさすまじきと　消息などもなり

此ちひさきうへ人　小君

けしきなく　われに逢しけしきなくて

かのぬぎすべし　天武紀垂二髮干背一と有今はぬぎたらしおきたる衣と云なり

うすきぬ　下に小うちきと有

うしろめたう思ひつゝ　背目痛にてうしろの見たきが見られぬを心になきことにとりていふ語なり

おどろきぬ　目をさましたるを云

ごたち　御等の意なる事前にくはしくいへり

さかしがりて　賢ぶりしてなり

とざまへ〳〵　外のかたへ來るなり

にくくて　小君

あらずこゝもとへ　何事にもあらずたゞ用ありてこゝへ出るなりといふなり

君をおしいで　源

人のかげ　源をいふ

またおはするは　御等云

みんぶのおもと　侍者

けしうはあらぬ　あやしからずまぎれなさてふ意

たけたちかなといふ　老人みづからいふ

たけたかき人の　記者の語

おい人これをつらねて　かのおもとを引つれてなり

立ならび　小君もなり

われも　老ひともなり

こひしけれど　源に小君をかねて云ふなり

えはたおしかへさで　老人を

よべ　夜方にて前の夜をいふそれを音便によんべといふ今も田舍にてはよんべといへり前夜をゆふべといふはあやまりなり

えたふまじく　堪えこらへがたしとなり

いらへもきかで　民部のおもとの返事もきかでなり

あなはらはら　あゝはらいたしといふべきをいたしとまではえいひあへぬなり

かゝるありきは　記者の語なり上にをこがましき事やあらんといへるより猶といへり猶はまだなり

二條院におはしましぬ　源

をさなかりけりと　小君が志わざ

つまはじきをしつゝ　ふかくうらみ給ふさまなり

いとはしうて　小君

にくみ　空蟬の

身もうく　こは身をはづる語にて歌にうき身といふに同し下に誤れる說どもあり

心づきなしと　空蟬の餘りなるをいふ

さすがに　志かしながらになり

いとわびしと　小君

志ばしうちやすみ　源

さしはへたる　わざとはなくて

源空蟬の身をかへてける　うつせみは萬葉の比までは現ひたりみぎに　小君光君にも姉君にもかくあばめらるればの身てふ意にてうつせみの妹うつしみとおもひし時

などさへいへり然るを萬葉に字を借て空蟬と書又現かの御てならひ　源氏の御歌

身ははかなく死ぬ意にもいへるをたゞ蟬のもぬけのさすがにとりて　空蟬の心幾度も此心なり

事とのみ思ひ誤りたること紫式部の頃に至りてはひいせをのあまの　後撰「すゞか川いせをのあまのすて

とへにもぬけの事とのみおもへるもむべなり此女房衣をほなれたりと人やみるらん人からのなつかしき

かくかしこくいへど時に古學のなければをしむべし　かなとあるをみてきならしたる物をなんどはづかしく思なり

○人體を人容といひなして衣にたとへたり○身をかへてもぬけにたとふ　みだれたり　思ひしなり

ふところに　小君の　にしのきみ　軒ばの萩

かの人　軒ばの萩なり　わたり給にけり　かへりたるなり

かたゞおぼしかへして　空蟬も小君もたれも思ふ所　又しる人も　古今「枕より又をる人もなきものをなみ

有べければなり　だせきあへずもらしつる哉

人かに　人香　小君のわたり　軒ばの萩は此小君して源の聞え給べし

身ちかく　身にふれなるゝなり　と契りおき給ひしにさもなきを思なり

あねぎみまちつけて　空せみ　つれなき人　空蟬

いみじく　嚴なり　あさはかにも　源の

あさましかりしに　空蟬の詞　人の妻とならぬむかしならばとなり

とかうまぎらはしく　事も無樣に　有しながらの

いかにおもはすらん　源も却て小君を　たゝうがみ　さか木にはたゝむがみと三所ばかりあり

そこにも一本たゝうかみとあり思ふにたゝんがみと

有によるべし

うつせみの羽におく露　或說に此歌は伊勢家集に有と

いへりいよゝ古からば古歌をそのまゝも又少しかへてあらぬ人の歌とせるなどは物語の常にていせ物語皆さなりさて古歌を擧て心をかふるにて物語なり本の意は木隱れにある蟬の羽に露はおけど人去らぬにたとへてわが忍びに袖ぬらすをよめるをこゝには女のにげかくれてはあれど猶うは心ならねば忍びて泪おとし侍るてふ意にとりかへたるなり然れども右の歌いせ集に今は見えずして「空蟬をおもふにころしたへさらば又衣手に露はおきてんてふ歌はあり惣て或注どもに此物語の歌につけ語につけて引たる歌にこゝにあはせんとて僞り作り又は出所などを誤りたる多ければたのみがたし少し似たる歌の有をやがてそれなりといへるか

源氏物語新釋

夕顔

巻の名は夕がほの花の事をかきて歌にも心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕がほの花また源氏の御こたへにも夕がほと有などによれりさて源氏十六の年の夏より神無月までの事あり

六條わたりの御忍び（源氏）ありき

六條の御息所の事なり箒木の巻に忍び〳〵の御かたたがへ所はあまたありぬべけれど〻書るはこれらの事をもか〻んとて先はしをおこせしなりさて此御息所は前坊の御妃なりしを坊薨じ給ひて後光君の忍びておはせるなり且此御息所は大臣の姫君なるよし見えたり（保明太子の事になぞらふなど云は例の事にてこ〻は假ても侍るべけれど惣てさる事にはあらねば用なし

内よりまかで　内裏

なかやどり　大貳の乳母の家五條なり

大貳のめのと　祿令に凡皇親年十三以上授給二時服料一春絁二疋云々（こは一世より四世までなり）其給二乳母一王者（義解謂二世王其親王者不レ見二令條一不レ有二別式一云々）絁四疋云々か〻れば令の時親王は玄らず一世の皇子二世までは乳母一人を給ふなり花鳥に源のめのと皇子の例たらば二人あるべき歟親王のつらならば三人たるべし下の詞にはぐ〻む人あまたあるやうなりしかど〻の給へり大貳のさしつぎに左衛門のめのととてあり末摘花の巻に見えたりと今考に此源氏に二人見えたるは後世の定なるべし親王に三人ならむ事猶考べし

尼になりにける　戒（インガイ）うけて命も延などいひて尼になる事此頃あり

門はさしたりければ　此門は常にはさしかため侍るなるべし

これみつ　惟光なり大貳のめのとの子なる故源氏の家令の如くて在しか後には民部大輔といへり尼はこれみつが母なり

侍せ給ける　門の外に

むつかしげなる　むね〳〵しからずきたなげなる家どもの立こみたるを云下京邊のさまむかしもさぞ有けん

ひがきといふ物　檜垣なり夕貌の上のいへ

かみは　前の長屋の様

はじとみ　蔀は一間を皆ふたぐべく作りたるを舉おくを云半蔀は下の方を板してかためて半ら上の方のみひらき舉る様にしたるを云此所は宿の前に長屋をたて〻半蔀して物みる料としたれば二階めきて高きなるべし故にその内に立てゐる人はたけ高き様に外より見ゆるなり後拾遺の歌のはし書にも月あかく侍りける夜はじとみに女共の立て侍けるを云々といへり

簾などもいと白う　伊豫簾なれば白きなり

ひたひつきの　夕かほの女房

すきかげあまた　簾に

立さまよふらむ　物見んとて彼是する様なり

やうかはりて　源の見なれ給はぬ様どもなれば

御車もいたうやつし給へり　或説前に御忍びありきの頃とあれば網代車なるべしこは女などものる物にて誰にも玄られじのためなり

さきもおはせ給はず　三位以上の人は必さきおはするなり枕冊子に大さき小さきなどいへり

たれとか玄らんと　よろづやつし給へば

すこしさしのぞき　車の物見より

玄とみのやうなる　揚名の介の宿といひ長屋も有ほどなれば此戸は木して作れる成るべし竹のしをり戸にはあらじ

見入の程なく　奥淺きなり

いづこかさして　古今「世中はいづこかさしてわがならんゆきとまるをぞ宿と定むる

玉の臺も　萬葉　何せんに玉のうてなも八重雉おほへる宿にふたりこそねめ　細源氏はいつも玉の臺に住み給ふ身にて此はかなき住ひを見て觀し給ふなり

おなじ事なり　かくてもへぬ世の中をいふ

きりかけだつ物　大和物語にきりかけをさせてまがきするひだのたくみのたつきおとのあなかしがましなぞや世の中とよめりたての木にきざみつけて板を横にならべかけてかきとするを云ならむだつはめくてふに同じ

あをやかなる　夕がほのかづらなり神代紀に吉葛（ヨカヅラ）と云萬葉に青みづらよさみの原とよめる是なり

おのれひとりゑみの眉ひらき　細此小家の哀げなるに此花のみひとり心ちよげなるとなりゑみのまゆとは

笑の眉を開にて愁る時は眉を顰るに對へる語なり或　かれるなり
說はいと誤れり
遠方人に　古今　うちわたす遠方人に物申すわれそのそこに白くさけるは何の花そもてふ意なり獨ごちはをりて參れと　源　口をしの花のちぎりや　よきあたりにはあらでかゝる所にのみある事をの給ふなり
ひとりごとしのとしの反ちなり　隨身に
御隨身　或說源氏いま中將なれば小隨身ならむ　此おしあげたるといへり　前に門は都のやうなるをおしあけたる
人めきて　夕顔てふ名斗は人がましきとなり枕草子にさすがにざれたるやり戸ぐち　さすがはゑかしながら
も夕がほはあさがほに似て云つゞけたるをかしかりなりざれたるは洒脫てをかしきを云さてさるおかしげなる戸口より出し童のさゝはさすがにそこのさゝ
ぬべきといへり　ならぬなり○されば洒脫の音なれば淸べけれど濁る
げにいと小家がちに　下のはひまつはりたるをゝでは　は音便にて調度を濁る類なるべし
記者の語なり
むつかしげなる　むさ〳〵しきなり　うちまねく　隨身を
このもかのも　此面彼面てふ意にて萬葉東歌に「足か　白き扇　もと白き色なるにふかく香を燒しめたらばこ
りの乎豆もこのもにさすわなとよめるも彼面此面の　かれ色の付べきなりそれをつよくいはんにはこがし
意なり古今集にはこのもかのもとよみ此さか木の卷　たるともいふべし
にもあり
よろぼひて　彷徨徙倚・神代卷下　門あけて惟光の　此隨身常には直にまいりなれねばい
むね〳〵しからぬ　こゝはよに棟〳〵しき家もなしと　かゞとおもふ間に惟光門をあけてまいりたるして奉
なり　るなり
軒のつまごとに　上に云きりかけより軒などかけてかゞいとふびんなる　かぎを置ゝどはし　門を遲くあけたるよしをいふ
びんなきなり

物のあやめ　文日にて君ぞとあやわくまじきなり　佛の御光といひ位たさてこそこゝのしなのかみにも
らうがはしき　亂の音なり末にさ覺る所あり　かくなどの給ふことばより九品の上と書りこは上品
かしこまり　恐れたるなり　上生をいふ
ひきいれて　御車を　わろきわざと　後世に
惟光があにのあざり　此あざりはひえの山の僧なるよ　かたはなるをだに　まほとは眞顏にて萬葉望月の足る
しおくに見えたり大貳のめのとの子なり　面輪といへるごとく端正なるをいふ片ほは片貌にて
おはしましたる　源の　たらはぬ所有をいへり然るをみだりに字をあてまた
かしこまる　恐がるなり　かたくなるなどいふはいと誤れり
尼公も　大貳乳母　ゝしていとおもだゝしう　源の事は乳母も面高うなる
たゞかく御前にさふらひ　尼となりなば源の御あたり　となり耻るに面伏といふに對へみるべし
などにつねにまいり待らふべからじと思ふにたゞよ　なつさひ　馴なり
ひやすらはれしをなり　身もいたはしう　かゝる君になれ來つればわが身をさ
たゆたひ　猶豫萬葉　へ勞らまほしう自愛せらるゝなり
いむことのしるしに　尼に成て齋戒をたもつなり　すゞろになみだがちなり　尼君
よみかへりて　蘇生　子共はいと見ぐるしと　源のおばさんを恥て
かくわたり　源氏の　ひそみ　ひそみはなかんずる時の口つきをいふ萬葉に
源　日ごろおこたり　病の平らぎがたきなり　百とせに老舌出てよらむともと有を六帖にひそむと
かくよをはなるゝ　尼の事　もと有是萬葉の訓をば誤りしかどひそむはさる口つ
日をしうなん　のこり多く思給心なり　きをむかしいひけん證とは六帖を以て知べし老の泪
猶位たかく　源の音末々　もろきに口つきひそみて源に見ぐるしく御らんぜら

るるなり
めぐはす　めまぜするなり項羽傳には眴字離騷には目
　成の字をよめり
いはけなかりける　細三歳にて更衣にはなれ六歳にて
　祖母に離給ふなり
はぐゝむ人　左衛門の乳母におくるゝ事末摘巻に見え
　たり
又なくなん　大貳めのとは類なしとなり
ひとゝなりて　成人を紀にひとゝなるとよみたり
かぎりあれば　ひとゝなりては物の限り有る事にて常
　にしもむつれたまはずとなり
見奉らず　乳母をば貴とむ事なりとみえたり
さらぬ別の　古今「世の中にさらぬ別のなくもがな千
　代もといはふ人の子のためてふをとり出たるえもい
　はず且さらぬ別とはえ去りがたき死別をいふ
げによにおもへば　前に身もいたはしうと云つるにか
　けてみるべし
おきての給はせて　掟とはきとの給ひつくることなり
去そくめして　紙燭
もてならしたる　うつり香といふも燒物のうつり香な
るべし扇に人の香のしむべきならねばなり
をかしうすさび出たり　面白くふるまひ出たり
心あてに　おしあてに源氏にておはすらんと覺ゆるは
　光りもことなる御貌なればとなりさて此うたは次の
　ことばにいかに聞らんなどいひ去ろふを云且つ夕貌
　上の樣かくさし出たる事すべき女とも見えねば女房
　のよみて夕顔の出し奉るべしあてはかにゆゑづきた
　ればと有は女房にはあらじと覺ゆ
ゆゑづき　よし有げなり
いとおもひのほかに　籬管木の卷にあばれたらんむぐ
　らの門にてふ意
はしたなげ　此語を轉じてこゝは手もつけられぬ樣に
　こたへ申せしなり
にくしとぞ　打飾つきなければ
いかで此やどりなるをのこ　惟光
揚名の介　こは三宮又は太政大臣など常の年官の御給
　の外に京官の助をも任じ給ふ例なり是を揚名の介と
　いふべし揚名とは本はその人はなくて名のみいひあ
　げてその公廨を取るをいふよりその人を任し給ふを
　も揚名といふべし凡揚名とは二合三合の給を得る大

臣などの家には其人はなくて名を儲おくめり譬は後
京極家の秋篠月清てふなどの類多しされども揚名間
答抄に引しに揚名の掾あり政事要略に揚名目も見え
しと徒然草にもあれど揚名ノ介てふ事は物に見えず
仍て考るに國の史生を一分としその二つ分を給ふは
目なり三つ分を給ふは掾なれば掾までは有もしなん
守介などにはさる事はなかるべき事なり然れども此
介は本揚名目などより出て介までもなりのぼれるを
猶元につきて揚名介とは唱ふるにや又右の如く揚名
は人なくてその給ふほどの物を賜る家にあれば前は
實の人を任じたる故にもなるべし
女なんわかく　此妻は西の京にある夕がほのめのとが
　むすめ三人有が上の姉なりかの右近が母もめのとな
　りしが死後に此西の京のめのとはゑゐりしにや
ことこのみて　雲上なる事を好むなり
はらからなど　かの妻の姉妹なり
宮づかへ人にて　下人にはさる宮づかへ人の來てをる
　といひなしたればかく申すならむ
さらばその宮づかへ　源氏
去たりがほに　去えたりがほする意にてかく有るらん
となり
めざましかるべき　とりなして見ば興ざましなる下が
　下の品
さして聞し　心ざして歌をまいらせたるをいふ
此かたには　細色の方には
御たとうがみに　ふところかみなり
いたうあらぬさまに　弄手を書かへて用意去給ふ若菜
　の下に柏木の文の書ざまを源ののの給ふも此心なり
源よりてこそ　ちかづきよりてこそなりよそながらの夕
　ぐれにほの見て定むるはいかにぞや去たしみて見よ
　かしとなり
まだ見ぬ御さま　いまだ見奉らねどもやがて源と去る
　かりければえたゞに過かねてなり
御そばめ　かたはらめなり
なまはしたなきに　中〳〵なることをしてをこがまし
　くみづから心はづかしきなり
わざとめかし　御こたへの
あまえて　御返事にあまえて又うたを參らせんなど云
　去ろふなり此詞にて前の心あてにの歌は女房などの
　せし事と去られたり

いひ云ろふ　女房ども
御さきの松　松明
忍びて出給　乳母が家より
はしとみは　夕貌の家
蛍よりけに　古今「夕されば蛍よりけにもゆれどもひ
かり見ねばや人のつれなきけには萬葉に勝異などの
字を書りこの文には蛍よりまさりて少しき方にうち
かへしてとるなり
御心ざしの所　六條の御息所の御かた
心にくゝ　心あるさま
うちとけぬ御有さま　御息所の樣
つとめて　つとはつときの上下を略たる語なり
朝げの御すがた　萬葉に「我せこが朝明形よく見ずて
けふの間を戀くらすかも」又「あさからすはやくなゝ
きを我せこが日開容儀見ればかなしも
たゞはかなき　歌をまいらせしより
わづらひ侍る人　乳母
おほせられし　源の
となりの事　惟光が
物し給人　ごゝに來し人

中垣のかいま見　惟光となりなれば
去ぴらたつもの　こは褶也褶は令義解に枚帶也といへ
ば裳の腰に又うはもとてひらめなる絹をまとふをこ
こは裳を略してその枚帶のみ引かけて有故に託言ば
かり引かけてとはいふなり「催馬樂に上ものすそぬ
れ下ものすそぬれなどいへりさてうやまふ主あれば
侍ふ女は裳をきるなれどこゝは隱れたる所故に去び
らをのみその去るしに引かへて仕ふるなり
かごとばかり　若たるてふ託言ばかりとなり
人のかほこそ　夕貌の上を暗にさす
去るく見え侍と　かのかしづかるゝ人とは
君うち忘み　源
おぼえこそ　惟光源の御事をおもふに
もし見給へうる　惟光か申
かの去もがしも　品定にらうたき人の葬の門にとぢら
れて
あさましう　惜なり
このよの人にはたがひて　世に源になびかぬ人はなき
に
おひらかならましかば　大平やかてふ語にてなだらか

におもはす事ならばさてもおもひやみ給はんをなり　ゆげたはいくつと　伊與の湯桁の事前に有
心ぐるしきあやまち　中河のかたたがへに一夜あひ給　あひなく　無遮
ひし事なり　物まめやかなる　伊與介は源に忠に勤る翁なるを我は
はらぐろき事をおぼせば
いとねたくまけて　難面に負て　おとな　おとなとは大人なるにてなは辭と見ゆ
かやうのなみ〳〵　記者　うしろめたき　背目痛なりそれを後ろぐらき事に用ふ
品〳〵の有に　下の品にもよろしきも有を云　かたはなめる　源自
うらもなく　軒端の萩　うまのかみのいさめ　かの雨夜の物語にすきたわめら
つれなくて　空蟬の　ん女には心おかせ給へ又さる女はあしき事し出して
まづこなたの心　空蟬の心を　みん人の名をさへくだすなどの心をいへりされば今
伊與の介のぼりぬ　空蟬の夫なりまだ任の中に斗帳な　介が身になりて見給ふに空蟬の心おきてをほめ我全
どの事にて上り參りしなるべし此下に空蟬をゐてく　からぬ御心ぐせをおぼしかへし給ふなり
だる事あり　いとほしきに　介が爲
くゐみやつれたる　介が面　つれなき心　空蟬の我に
いとふつゝかに　萬に馬に太馬にといふごとくふとく　むすめをばさるべき　軒ばの萩をばとゞめ置て少將に
たくましきを云　あはするとなり
いやしからぬ　性氏系のよき事なり　えあるまじきにやと　空蟬に逢給ふ事
ねびたれど　年たけたるをいふ俗にすねびたるといふ　かろらかに　源の御身なれば
も數年めきたるてふ言語と覺ゆ今も同じ心か　或說にないがしろの意といへれどそ
よしづきて　故由ありげに見ゆる人ざまなり萬葉故緣　なげの筆づかひ　は輕慢の心あれば叶はず物を投やる心なればなほざ
と書り

りの心なるべしと契沖も「いへり」「いざけふは春の山邊にまじりなむ暮なばなげの花の陰かは」「あればありとなけらのよそに見し人もなど此意なり

あはれとは　源の

ねたきものゝ　物ながらの翠

かたさに　敵

今・かたは　軒ばの萩

かはらずうちとけ　源へは

とかく聞給へど　少將を詳とする事

秋にも成ぬ　古今「木の間よりもりくる月の影みれば心つくしの秋は來にけりこれにて書り

人やりならず　細唯吾御心から藤壺空蟬の事などかた〳〵心づくし去給ふなり

六條わたりにも　御息所のさる御心なればなびきがたかりしをやう〳〵にいひなびかせ給へる物のかたおろそげにし給ふを云

女はいと物を　細御息所執ねき心ざま

よはひのほども　或說に榊の卷に源廿二御息所卅と見ゆ去からば源は今十六御息所は廿四なり

いたくそゝのかされ給て　さのみ忍ぶとなけれど明ぬに出るは大かたのならひなればそゝのかしに出しまいらするなり源は御なごりおぼすさまに强ても出がたくし給ふ成べし

中將のおもと　御息所の女房

見奉りおくり給へと　御息所の源を

御ぐしもたけて　御息所

過ぎがてにやすらひ　源の

去をん色の　こは衣をいふなるべしさてこの花は九月にさく故にをりにあひたるといへり此色は雅亮裝束抄に去をん色のさしぬき是九月ばかりに殿上人などの着るはおもてはうす色の夏のさしぬきにて青うらのはりうらを付てきるなりとあり須磨卷にも見えたり

あざやかに　紫をん色と白きうらとの鮮なるなり

みかへり給ひて　源の

去ばし引すゑ　中將の君を

打とけたらぬ　中將心してうちとけぬなり

爰にてはほめたるなり

めざましく　源さく花にうつるてふ名　御息所の外に心をうつすてふ開えはつゝましけれどたゞには見過しがたき君ぞて

ふを朝貌の花によそへたり

いとなれてとく　日なれてとく御こたへしたるなり　その人とは　惟光が申すなりいかなる人ぞとも去りがたきを云なり

中將朝霧の　吾身の上を去らぬ顔にて御息所に御心のとまらねばかくとく出給ふとぞ見ゆるとゝなしたり源ながや

の朝とく出給ふに依て御息所に心留給はぬを見るなり

さふらひわらはの　既に廊の方なれば源氏の近習童のあるしてをらせ給ふとみゆこと更めきたるさしぬきのといふは此花をらんとてわざと着たらん如く見ゆるてふ意なればこれ却て常に着て有し物なり然れば女わらはてふはわろし

ことさらめきたる　わざと此前栽の亂れ咲たる中を分ん料に着たるが如しとなり

おほかたにうちみ奉る　記者の語

由がつも花のかげには　古今集序の語をとる

いやしきにても　末ざまに仕ふるとも

此御あたり　源氏の

明暮うちとけてしも　常に見奉らぬを心もとなく皆おもふとなり

まことや　異或說に云前にいへる事の中らに別事をいひて又前の事をむこしいふことばなり

中將殿　頭中將をいふなり

おとな　これ右近なり

あなかまと　あゝかしましを略したる語なり

でかく物から　手は搔ながらも我もみんとするなり

さは去るぞ　頭中將とは去るぞとなり

右近の君こそ　今昔物語に阿倍晴明が父に物いふにちこそといひかけたるなどむかし人あがめていふ語にて宇治拾遺に地藏ぼさちを地藏こそ大和物語に西こそと西隣の人をいへりすべてこそてふ辭は物の其が中よりとりわきて是こそ彼こそなどいふなればおのづから人をたふとむ語ともせるにや

ほのかなれど　ほのかにかいまみたるなり

斗蔀をあげんは長屋なる事去らるしたるなり此家いとむねぐしからぬ體なるを五間るべし其前に檜垣して上に五間ばかりに半蔀去わた

のといふは此花をらんとてわざと着たらん如く見ゆるてふ意なればこれ却て常に着て有し物なり然れば女わらはてふはわろし

ほのかにかいまみたるなり

ことさらめきたる　わざと此前栽の亂れ咲たる中を分ん料に着たるが如しとなり

おほかたにうちみ奉る　記者の語

由がつも花のかげには　古今集序の語をとる

いやしきにても　末ざまに仕ふるとも

中將殿　頭中將をいふなり

おとな　これ右近なり

あなかまと　あゝかしましを略したる語なり

でかく物から　手は搔ながらも我もみんとするなり

さは去るぞ　頭中將とは去るぞとなり

うちはしだつ物　此長屋にかよふ料にうちはしをわたしで有

いで此葛城の神こそさかしく　此はしは險岨にあしくたたりと云をおもしろく書たりかつらぎのくめぢの石ばしは一夜の間にかけんと神のちかひ給ひしがほどなく夜明てわたしはてぬてふ諺の有をかの中務は歌にもよみたり「此事金峯山の緣起に有といへど緣起は皆僞言なれば引は中〳〵に愚かなるわざなり只諺として有べし

わたくしのけさうも　惟光もわかき人のあるに云よりてそれにかこつけて案内をよく見たるよしなりさて此ながらは次のはかられまかりありくと云迄にかゝる辭なり或說につゝと云は違へり

たゞ我どもと　夕顔をも女房の同等のものゝ樣にいひてあるなり

君は御なほし　車なる人を惟光がいふ

御隨身ども丶有し　こは惟光が知て中なり

なにがしくれがし　くれがしとはそれかしなりなにくれなどいふくれなり

おもと　女房を云

頭中將の隨身　先の童を見知てそれにつけて隨身などを誰々ならむと心あてにいふなるべし

そらおぼれ　そらは虛言の虛なりおぼれはおぼろ〳〵として事の意をわかぬさまなりさてそら云らぬさまなるべし

そのことねり　或云小舍人とは召ぐする童をいふ

又人なきさまを　われどもの外にはことなる人なきさまにするなり

その車をぞみまし　是は古今に「外のちりなん後ぞさかましとよめるまゝの語を以て思ふにこゝはたしかにみんことにてありしなりといふ意なり

はかられまかりありく　その謀に事よせて有なり

いとよくかくしたりとおもひて　此おもと惟光に夕がほの事をば

もしかの袋にさざりし　雨夜の物語に云し事

はるゝなり

くた〳〵し　かく事を略せるも又一つの文なり

やつれ　すがたをやつしたるなり破れて連なれるをいひてつゞれ衣と云に同じそれを轉じてかゝる貴人の狩衣すがたにてありき給ふなどにもいへり

おり立　その事に入たちと云に同じ

となりに中やどり　大貳のめのとの家

御ありか　在所なり萬葉に其所此所など書たりことか

と道へば住所在所のかも同じ

そこはかとなく　其所と許り無なり歸りの道をもかへ給ひなどすべし

さすがに　夕顔の上の有樣我あり所などは云られぬやうにし給へど云かしながらあさくはおほさぬよしなり

おもほし返し　おぼしかへしてもえといまりわび給ふ

かゝるすぢは　戀には賢人の亂るゝ事すらあるを源氏はいと若うおはすれどよく云づめおはせしにとなりあやしきまで　夕顔によりては

けさのほどひるまのへだて　けさかへりて夕べはおはすべきそのひるの間のほどだにおぼつかなくおぼすさまで心とゞむべき　いづくに云かまで心をとゞむべき事もなきをとなり

思ひさまし給ふ　心にしひておもひさましてこゝろみ給ふ事を先いふなり

人のけはひ　夕顔のさま

わかびたる　若〳〵しきなり

よをまだ云らぬ　はや男などにもみえし人といふ

いとやんごとなきには有まじ　三位中將のむすめなれど源氏の御目よりはさもみ給ふべし

いづこにいとかうしも　右にさまで云々といふを重て書り

ことさらめきて　誠にわざとがましく

かりの御ぞ　かりぎぬなり

かほをもほのみせ給はず　下へづゞけてみるべし

昔ありけん物のへんぐゑめきて　古事記に溝ぐひひめのもとへ誰ともなくうるはしき男の夜のみ通ひて其住所云られねば男の衣のすそにへその苧をつけこゝろみるに其苧は戸のあなより通りて有をとめ行てみむろ山の神の社までわたれる事ありこれらをいふな

らん

うたておもひ　別様なる意

てさぐりにも去るき　なみ〳〵ならぬ事は

誰ばかりにはあらん　誰ほどのくらゐの人ならむ

猶此すき物の　惟光をいふ

たいふを　細　或説に云大輔と云説あれども末にてこそ民部大輔ともなりつらめ只こゝは五位なる故大夫といふなるべし又云凡そ此物語に名を云は惟光良清のみなりうつぼなどには名をいひし人多しふるき除目の申文の揚名に惟光良清ありそれらによりて此物語に二人の名を出しけんかし

あざれ　あそび洒脱を略ける語なるべし遊びにも事につけてさま〳〵有右はあそばへるを略してそばへると云方なり

女かたもあやしう　よのつねは男の心淺きをこそ欺くべきに是は心ざしは深くみへながら誰としらぬ物思ひなればよのつねの物おもひとは様の替りたるとなり

うらなくたゆめて　打向ひてはそむくべきやうはみえざれどももしかく見せて

いづこをはかりと　はかりは許量なり物の度量より出たる辭なり

おひまどはし　跡を追尋まどはしてなり

なのめに　なほざりといふが如し

たゞかばかりのすさびに　只是迄の心進の去わざとおもひても過なんを

さらにさて過してんとおぼされず　かく頻りにおほせば

いと忍びがたくくるしきまで　もし此うちにもにげゆかんかなど

さるべきにこそは　それも去か有べき自然の事ぞとなり

さもありぬべう　源のの給ふまゝにとなり

いかなるちぎりにか　宿世をいふ

いざいと心やすき　源の詞

猶あやしう　夕顔上

よづかぬ　すべてよの常ならぬさまにて御かほも名もあらはし給はぬ人にさそはれん事を物おそろしくとなり

げにとほゝゑまれ　源

いづれかさつねならんな　かたみに名のりもせでつゝみかくしてあればともにさつねめくさまなりよしや今は我にはかられて見給へあしさまにはあらじとなり

女もいみじく　夕

よになくかたはなる　かくいかなる人ともしらぬ女をおぼすはよにひが〳〵しき事なりともかゝるなだらかなる心ざまからにあはれとおぼし入なりとこ夏うたがはしく　あはれとおもひしその人にやとおもへどてふ意のみ抄わろしかれ〳〵に　かの中將の如きとだえおかずばにげかくれん事はあらじとなり

心ながらも　是は除りにやはらかなる上おほする上にての御心すさみなり下に心ばみたる方を少しそへたらばと見給ひながらと有も似たる意あり

八月十五夜　音にてよむべし

なりはひ　日本紀に田家をなりとところ萬葉に業云々と書さてなりを去まさねと侍るは農業をせよといふ事なり

ゐ中のかよひ　商ひに行なりいせ物語の古本に鄙活爲斗留人乃日本紀活リタリトヒ大和物語に年ごろわたらひなどもいとわろくてなどいふにおなじ商ひなどのわざも思ひかけずとなり

北どのこそ　北隣の人を云大和物語に聞たまふにや西こそといへるも壁へだてゝいふなり

よにほどなきを　夕顔のやどに

こめかしくて　女兒しきなり

こを〳〵と　物の何にてもなるおとをいふなり後の物には蜻蛉日記にかみごを〳〵と鳴といひ枕ざうしに庭の砂ごをふむ沓音をもこをめかしといへれば何のざるかたの音にもいふなり此語の古さを思ふに古事記に其ぬぼこを指おろして去ほ許遠呂許遠呂迩鳴而といふも鳴と有からは是卽こを〳〵とかさならすてふ事なるを呂の助辭を添ていふはとゞ〳〵をとゞろ〳〵と云類なり然ればずむ語なるを音便にて下の許を濁れり假字もこをこをと書べきこと記にて知べし或説には皆私の心にてより所なし〔朝顔の卷にこを〳〵とひきて去聲のいといたくさびにければ云々〕

からうす　和名抄によるに賀良宇須碓也須利宇須は磑

也磨礱礎也とりいへり今からうすと云は足もて踏て物つくなり又鳴神めきたるは磨臼の聲なり若此別はよく知て書るか又何のこゑにもこを〳〵と鳴といへば何れにても有べきか

枕かみ　枕のほとり

あなみゝかしがまし　何事よりも此音には

くだ〳〵しき事のみ　此家のあたりみな賤のいとなみなれば

白たへの衣うつ　白たへは布の事なり白妙と書は借字なるを妙の字によりていふは誤なり冠辭考に委し

されたる臭竹の　されたる戸口といひしは洒落なる戸をいふこゝの竹もうつくしう生たち心して植などせしならでそこらやせよろぼひて立みだれたるをいふべし

おなじごと　やんごとなき庭の露も

かべの中のきり〳〵す　詩に十月蟋蟀入二我床下一とはいへどいとやんごとなきわたりには壁中なるきりぎりすもいとこそ遠く聞給ふをこゝはたゞ耳にさしあてたる如くちかきをいふのみふかく泥むべからず

白きあはせ　白きあはせのきぬに紫のうす色のうはぎをきたるべし

花やかならぬ　衣の色あひ

あえかなる　あやうけなる

あな心くるしと　餘りにあえかにやはらかなればいかでか俄ならむと　かく俄にはいかでまいるべき事かはといふもきは〳〵しくいなまぬさまなり

此よのみならぬ　源のこん世までの契をし給ふなり

うちとくる　夕の

やうかはりて　世なれたる人はとやかくやなど男に心おくべきに一向におひらかなるとなり

人のおもはん所も　「此人とはこゝにもかしこにもうかびたる樣ぞとおもふ人多からむは更にものゝ數にもあらず」前に二條の院にむかへてん世の聞え有ともなど有しおなじ意なるべし

右近をめし出て　夕の乳母の女なる事末に見ゆ

此有人々も　夕顔の女房

鳥の聲などは　ぬかづくぞ聞ゆるとある語意によるに鳥のこゑなどはと有をとるべしむかしはかゝるいやしげなる家どもには庭とりはかはざりし成べし

濁るに定りたる所なり

みたけさうじ　やまとの金峯山に千日精進してまいるが其おこなひする人にやあらむとなり枕草子に哀なる物よき男のわかきみたけ去やう去んしたる定りたる人ぐしたるもあはぬよな〳〵へだつるをばくるしき事にこそ思へりめるをことの外にさびしくへだてなしてひとりゐて打行ひたる曉のぬかのほどいみじく哀なり

おきなびたるこゑに　翁ふりたるなり

ぬかづくぞ聞ゆる　額を以て地を衝て拜むなり

立ゐのけはひ　ぬかづきて立居する老人のさま唱ふるこゑにて去らるゝなり

何をむさぼる　此山は皆黄金なりといへば寶を得世に富べき願をなす事此時の常なりけんよりて何をむさぼる身の祈かとは書りされど當來導師と唱ふるからは此世の富をいのるのみならずこん世をもかねて願ふといひて我契り給ふことにたとへ給ふ

南無當來導師　彌勒は末世に出世して說法すべき誓なれば當來導師といふさて金の御嶽をば南部に彌勒のおはす所といひなせば俗のかくは祈るなり

たうらい　當來

かれきゝ給へ　源ののたまふ

源うばそくが　南無當來導師といふ聲を去るべにて今來世までを契おくからは此契りは共に違へ給ふなと女にの給ふなりうばそくとは涅槃經に善男善女受三三歸依一是則名爲二優婆塞一といへり

長生殿のふるきためし　長恨歌に七月七日長生殿夜半無レ人私語時在レ天願作二比翼鳥一在レ地願作二連理一枝一玄宗と楊貴妃の契りしは末とげずなりぬればゆゝしくてといへりさて彌勒の將來の世を契もはたゆゝしき事を下にもよほして書たり

ゆゝしくて　是もゆゝしき事とはなりたれど今はた彌勒の世をかね契るもはた此世にてはゆゝしき事をあらかじめ催し書るなり

いとこちたし　萬に事痛言痛など書これらは人の言をいたむとことゞくしき事の多きと二樣に用ひる詞なり今はこと多き意なり

さきの世の　前世の因緣つたなければ現在かくのごとし今世如此なれば未來に賴所なしと今の身のうさをかへりみてよめり

かやうのすぢ　記者語なり源の意ならば今少し語有べ

し

心もとなかめり　末おぼつかなき樣したるとなり

いざよふ月に　いさよふとは專ら出んとして猶豫て有て有かたにいひなしたるなりか樣にもいひなすが此文のつねなり惣て此語の意をいはゞ出る月にのみいふべきならぬ事は萬葉にいさよふ波たゆたふ船などいふを見よ

こゝろもとなかめり　末おぼつかなき樣したるとなり

ゆくりなく　不意ユクリナク天武紀

とかくの給ふほど　源は

俄に雲がくれて　古今序秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し

はしたなきほどに　夜明けばせんかたなかるべしさらぬうちにとなり

例のいそぎ　源のいつもいそぎ出給ふなり

かろらかに　夕顔を源のみづからいだきて車にのせ給ふなり

なにがしの院に　名を略せり必しも河原院とさだめぬが却てよし内には六條院めきていへりかの院にばけ物の出し事今昔に有り

あづかりめしいづるほど　常に住ぬ諸院には皆預り人をおくなり管須計契沖云一名之能布久佐

籠をさへ　車のすだれを御みづからあげ給へばなり

いにしへも　むかし物語に女をぬすみ出などしてかゝる心ぐるしきこと多きをふくみたるなり

忍びたるすまひにて在からはかゝるめにも逢けんかしとおぼすより問給ふなれば女ははぢたるなり

山の端の云云　行末の心も志らでかく隨ひゆく身はおほぞうにしてはふれやうせてんと此院の物恐ろしきにつけてもおもふなり終にうせなん前つさかをとかく催すなり

うはのそら　うきたる事を云なり

物おそろしう　此院の體を

かのさしつどひ　かの小家に人多く

えんなる心ち　面白き思なり

きしかたの　頭中將のかよひ給ひしを

けいめい　警命也警は警蹕の警命は物をさるべきものに仰するなり今の俗敬ふ人の渡る時蹕々といひて且事どもを下へ仰るに同じ

御ありさま　源なりと

御ともに人も　院のあづかりの中

しもげいし　下家司

とのにも　左大臣殿を云饗　賀太加　由豫弼也

參りよりて　御前ちかく弼　之留加由　醜弼也

おきなか川　萬葉に「鴨鳥のおき長川は絶ぬとも君に

かたらむ事つきめやも息長川は近江國坂田郡にあり

日本紀第十八延喜諸陵式等を合せて知べし萬葉第廿

に於吉奈我河波とあればおき中の意には侍らず鴨は

水底より出て息ながく鳴物故に此川に寄せたり諸

注意誤れり

契り給ふより　夕顔と

いと、いたくあれて　院のさま

はるゞと　廣く

木だちいとうとましく　氣疎く或抄何とやらん物すご

きなる所のさまなり

ことに見所なく　つくろはねば

秋の野らにて　古今「里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる

ぞものふのかたにぞ　禁中に別納と云所あり大臣は定れる封戸の外に國より納物のあるなりそれを封戸の別納といふ此心にて此預り其別納物ある方に曹司をかまへて住むなるべし

われをばみゆるし　女に心つよからせん料なり

かほはなほかくし　枕草子に行成卿袖にて顔かくしたることもあれどかりそめにこそあらめかくなれ給ふほどにては扇してかくしたるなるべし女のかほかくすも皆扇なり

かばかりにて　これほどになれてはなり

夕露にひもとく　源かの夕がほの宿の前わたりし給ふ時心あてにそれかとぞみるとよみて出したるが縁となりて終にいまそれとあらはし給ふとなりひもとく花は顔をあらはし給ふをそへたり

露のひかりやいかに　心あてにそれかとぞみる白露の光そへたるとありしをもてとひ給ふなり

光ありと　そのたそがれどきに光りありと見しはおほよそのそら目にてこそ侍りつれ今かくてみ奉る御かほは似る物なしといへりさてかの心あてにてふ歌は女房のよみたらんも今はみづからの歌のごとくいふ

べきなり
うちとけ給へる　源の
つきせずへだて給へる　夕顔の源を餘りにへだて名の
り給ねばなり
あまの子なれば　朗詠海人詠　白波のよするなぎさに世をつ
くす海士の子なれば宿もさだめず　花　いやしきといふ心なり
いとあひたれたり　あまへたるさまなり
我からなめりと恨かつはかたらひ給ふ　河　或云あまの子と女のいふにつきてもにすむ蟲をとりよせてわが今まで顯はさゞればなのりたまはぬもことわりなりとうらみかつはまたかたらひ給ふとなり古今　蟹のかるもにすむ蟲の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ
たづね聞え　此所まで
右近がいはんこと　惟光は此事去らぬよしいひしゆゑさも有ぬべき　夕の樣
たどしへなく去づかなる　なにがしの院のさま
夕ばえを見かはして　源と夕
つと　突となり

なごり有て　源はのこりなく顯はし給ふに
内にいかに　禁中になり夜になりて源の心定まりてより大内の事をもおぼしいでたり
六條わたり　御息所
うらみられん　夕がほにつけてと絶あるを
いとほしきすぢ　御息所のみならずかたゞ〳〵有べし
なに心もなき　夕は
あまり心ふかく　御息所は
とりすてばや　御息所と夕の心をかたみに
御まくらがみに　源のなり
いとをかしげなる女　御息所の念なるべし
おのがいとめでたくと　わか心に源を
御かたはらの人を　夕顔の上を
うたておぼさるれば　いとこと樣に物うるさき心ちするなり
渡殿なるとのゐ人おこして　細源の右近にの給ふ
いかでか　右近
あなわか〳〵し　源
山びこの　古今「ちうわびてよばゝん聲に山びこのこたへぬ山はあらじとぞおもふ　六帖「つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつる哉　ひあやうしと　夜行してよばふ聲なり本朝文粹云夜行翁夜々警火舊府中一呼曰火危彼誰何八源順
内をおぼしやりて　源其火をともして來るを待間
なだいめんは過ぬらむ瀧口のとのゐまうし
或云亥の一刻に内竪時の札を奏す殿上に御とのゐ去たる侍臣たがひに名をとはれてなのる事なり此頃に瀧口のとのゐ申有これ又名謁なり此事亥の刻の事なればいたくもふけぬにこそはと書り延喜近衛式凡夜行者内裏宦人一人近衛一人出亥一刻迄子四刻一直右起丑一刻迄寅四刻
かへり入てさぐり給へば　細これもいまだ火をともしてはまいらざるさきなり
さながらふして　前のごとくに
おまへにこそ　夕を云
そよ　それよなり
引うごかし　夕顔を
けどられぬる　氣をとられぬるなり
御几帳をひきよせて　源の手づからひきよせて女君をへだて瀧口をめすなり
なほもてまいれ　かしこむは理りながらこゝにてはまだもてまいるかたのよろしきてふ意を猶とはいへり
いかさまにせんと　物のけにおかされたる體なり
われかのけしき　前に出たり
物をぢをなん　平生の事を右近申なり
窓をのみ　物おそろしき時のさま
こゝに去ばし　夕のかたへに
此院のあづかりの　こよひさぶらひたるものどもなり
此院のあつかりまへにおほい殿にも去たしくつかふまつるなどいひしものなり
うへわらは　殿上童
例の隨身　夕がほの花もてまいりしなり
つるうちして　弓弦をうちならせとなり鬼のおそるゝゆゑなり
おほせよ　いひつけて去かさせよとなり下にも惟光をいそぎまいるべきよしいへと仰せよなど有に同じ
さふらひつれど　院のあづかりの子が申
たきぐち　宮中の瀧口てふ所に侍らふものゝふなり
ゆづる　萬葉卷四梓弓つま引夜音の遠音にて君が御幸をきかくしよしも

たゞこの枕がみに　上に枕上についゐてといひし女の面影

むかしものがたり　江談にむかし寛平法皇京極の御息所と同車して河原院に渡りまし〳〵ける時源融公靈たゝりをなして御息所絶入給ふ後に淨藏加持して蘇生し給ひしといへり

そひぶして　夕顔の上に

いひふれ給べき　河いひ合する人

ほうしなどをこそは　右にいふ淨藏などの類

さこそ心つよがり給へど　前にまろあればさやうの物にはおどされじとの給ひし事なり

南殿のおにのなにがしのおとゞ　世繼物語にいづれの御時とは覺侍らずおもふに延喜朱雀院の御程にこそは侍けめ宣旨うけ給はらせ給ひておこなひに陣の座におはしますみちに南殿の御帳のうしろのほどとはらせ給にもの〻氣はひして御劔のいしづきをとらへたりければいとあやしくてさぐらせ給に毛はむくむくとおひたる手の爪ながく刀のはの樣なるに鬼なりけりといとおそろしくおぼしめしけれどおくしたるさまを見えじと念せさせ給ておほやけの勅定うけ給はりてさだめにまいる人とらふるは何物ぞゆるさずばあしかりなんとて御太刀をひきぬきてこれが手をとらへさせ給へりければまどひてうちはなちてうしとらのすみざまへまかりけりと云へり此おとゞは貞信公なる事其文にみゆ

心づよくさりともいたづらに成はて給はじ

源の我あれば鬼もえさばへなしはてじとなり

いとあはたゞしきに　右近をばいさめ給へども

いそぎ參べきよしいへと仰せよ　惟光にとくまいれと云付て人を遣せと瀧口にの給ふ詞なり

なにがしの阿闍梨　惟光が兄

こゝにくべきよし　加持させんとなり

尼君などの　大貳乳母

かやうに有べき事はのたまへども　春海考るにむく〳〵はむくつけきを略して重ねいへるなりあざやかなるを略してあざ〳〵といへると同じ語勢なりみのりの卷にあまりにほひ多くあざ〳〵とおはせしさかりはと有り

けしきある鳥の　けしきあるは只ならず一けしきあるなり白氏文集因宅詩に梟鳴二松桂枝一狐藏二蘭菊叢一前主爲二將相一後主爲三公卿一てふもて書りからこゑは聞なれずからびたるなり

けどほく　人氣遠く

君はつとそひ奉りて　源

われひとり　源獨顯こゝろ有なり

おぼしやるかたぞなきや　心を延る方ふつになし下に惟光參りて息を延給ふといへり

ものゝあしおと　おそろしき時は盛の天井かけるもさおぼゆるなり李部王記に延喜八年清涼殿霹靂之後貞崇法師侯清涼殿之時聞大人足音是邪神所爲也

ひし〳〵と　契萬葉十三此とこのひしとなるまでなげきつるかも

有かさだめぬ　惟光忍びありきして

命をかけて　既に女の命をとられつれば君も命あやしくおぼすなり

おふけなくあるまじき　負氣無なりおほと書はわろし藤つぼに心をかけ給ふを云さておふけなくは負氣無にて身の力に及ばぬ重荷をいふそれを轉じて身に有まじき似つかぬしわざを皆いふ續日本紀の宣命に其よしみゆ

かくきしかた行さきのためし　昔今のためしとやならんとなり

内に　内裏

人のおもひ　世人

あり〳〵てをこがましき　世にながらへあり〳〵てなり惣て古へか樣に在といふ語は皆ながらへ在をいふ

こよひしも　あやにくに

にくしと　源の

の給ひ出む　夕顔のうせ給ふを

右近たいふの大夫　細初は惟光が我けさう人の樣にしてありきし事をおもひ出たるなり

君も　源も

いきをのべ　上におぼしやるかたなしと云り

とばかり　時ばかりの略なるをいとゝばしの事に用ゆ

とみのことに　とみは速くある事にてみは僻なり頓の音にはあらず

きのふ山へ　細物ちがひのすれば何事もかゝるなり

いとめづらかなる　〔春海考るに御法卷にめづらかにいみじく明くれの夢にまどひ給ほどさらなりやと有もあしき事にめづらかといへり〕

例ならず御心ちの　細夕顔の上かねて違例もや有しと
　問ふ
さることもなかり　源
おのれも　惟光
よゝとなきぬ　萬葉にもゝとせに老舌出てよゝむとも
　とよみてなくときの口つきなり
さいへど　記者語
世中のと有ことも　とかくは左右のことなりそれをと
　と一つ云は畧語なり
いづれも〳〵　源も惟光も
此院もり　惟光
くゑんぞく　眷屬或支離
此ゐんを出おはし　細此院寺にもかくして先いで給へ
　と申なり
さて是より　源
げにさぞ侍らん　惟光
かの故郷は　夕顔の宿
おのづから聞て　源の名も出ん
山寺こそかやうの事　山寺には死人とりおく事の類あ
　れば人めにもたゝじとなり

むかし見給へ　惟光が父のめのと
うつし奉らん　夕顔を
みつはぐみて　今昔舊本十二增賀法師の事いふ條云美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志伎かくもあれば三齒さすともいふなり老て齒のまばらに落て上のは下のはと三つさし合ひくみあふ樣になるをいへり三輪と覺えていふ說は皆誤なり右にも美豆波とこそ書たれかの檜垣の嫗がよめるも同し「とくふれば我黑かみも志ら川のみつはくむまで老にける哉
かごかに　俗にかんごりと志たると云に同じく閑居や
かにてふ音語なるべし
この人夕顔をえいだき　死したればさすがうとましくてえ
　いだきがたかるべし
うはむしろにおしくゝみて　今云うは敷にて龍鬚を上
　むしろとする事古への常なり或說に弘仁八年八月從三位橘朝臣常子薨以レ席裹レ屍
さゝやか　さゝとは惣てちひさき事をいふ小竹葉小波
　などの類多し
うとましげもなく　死骸はうとましき物なるに是はさ

もなきなり
志たゝかにしも　惟光志つかりともえせぬなり
めくれまどひて　源
なりはてんさまを　終に死はつるやいなや
はや御馬にて　惟光申
右近をそへて　夕顔の上の車に
くゝり引あげ　さし貫の
おぼえぬ　おもひよらぬなり
御氣色の　源の歎きを
おはしつきたり　二條院へ
人〳〵いづこより　二條院の人
いかなる心ち　夕顔の
まどはれ給へば　御心惑
おほいどのゝ　葬の上の方
めのとにて侍るものゝ　源大貳の事をの給ふ
いむことうけ　戒をたもつなり
今・たびとぶらひ　源に逢奉りたきことなり
なづさひし　なれむつるゝなり
つらしとや　とふらひ給はずば
出あへでなくなり　家よりいださずして死たるなり

聞つけ侍りしかば　源の聞給はずは有べけれど聞つけ給ふ故穢たるとなり
神事なる頃は　延喜式神祇三云凡觸二穢惡一事應レ忌者人死限卅日白葬日始計又云觸死葬之人雖レ非二神事月一不レ得レ參二著諸司並諸衛陳及侍從所等一かゝれば九月の神事をはゞかりて今より内に參らざるよしかされど神事なる頃は云々てふ文末をかねたるとも見えずもし石清水の八月十五夜の祭をいふか其外八月の神事は聞えず
志はぶき　咳病
むらいにて　無禮
夜べ　夜の方てふ意なり春べ夕べなどのべも皆方の意にて萬葉に行へを行方と書しに同じ惣てべといふを邊の意と思ふは誤なり野べ山べも同じ且行方の方はえの如く唱ふるも半濁なり
かしこくもとめ　いと求め給ふにつけて恐かりしを以てかく云
たち歸り　頭中將御使にて來給へば先は源ののべ給ふをうけて立て又立かへりてぞ私のたはれごとをばいふなり

いきぶれに　青蛇の息にふれて煩ふてふなどより出て
　女の怨念などの事にとるなり
むねうちつぶれて　源の人にこたへ給へば
たい〳〵しく　退々の音とみゆ恐れておもひ去りぞか
　るゝなり
（千陰云狹衣にたゆ〳〵といへるもこのたい〳〵
　と同語にて音語にはあらじ）
つれなくの給へど　悲しみをつゝみて
藏人の辨　頭中將の弟頭中將は御使なれば大かたの事
　を申給て辨してくはしく奏し給なり
かゝるよしを　藏に觸るゝよしなり
おほとのなどにも　葬上の御方
日くれて　十七日の晩なり
けがらひ　藏
めしよせて　惟光を
いまはゝ見はてつや　もはや蘇生もあらじとみはてた
　るかとなり
とかくのこと　葬の事ども
そひたりつる女　右近は
けさは谷にも　古今「世中のうきたびことに身をなげ
　ば深き谷こそあさくなりなめ
おちいりぬべく　身をなげんさまなり
こしらへ　喩コシラヘ日本紀
いといみじと　源
いかなるべき　源御命
なにかさらに　何しにか今更にさはおぼし入べき
さるべきにこそ　本より萬つの事かく有も定れる宿緣
　ならめとなり
これみつおりたちて　わたくしがなどいふに同じ
さかし　是さるべきにこそ萬の事はべらめと云つるに
　對してさある事ならむかと先の給ひてさみなおもひ
　なせどとはことわり給ふなり
人をいたづらに　夕顔
少將の命婦　惟光が妹
あま君　大貳
　　源氏物語新釋　夕顔　四千五百八十一

さゞめき　惟光と
さらにことなく　源
さほふ　作法
なにかことぐしく　惟光
いとかなしく　源
いぶせかるべきを　心もとなきなり
いとたい〳〵しき　惟光が心
此ごろの御やつれに　此夕顔の宿へ通ひ給料のかりの
　御裝束なり
かくあやしき　源
あやうかりし　六條院にて
例のたいふ　惟光
かはらの程　鴨河なり
烏どのゝかたなど　とりべのは葬りし墓などあるべき
　に常の心ならば物おそろしかるべきをとなり
物むづかしき　物すごさまなり
あたりさへ　彼尼の住居
見あかしのかげ　契不拾燃燈日本紀
女ひとり　右近なり
とのかたに　外の方
こゑたてぬ念佛　大かたは聲を高く佛の御名を唱ふる
　をこはいとつぶ〳〵と唱ふるを云ならむ一向に無言
　念佛にはあらじさてはいかにとも去れじ
寺〳〵のそやも　十七日まうでのさまならんか又當にもこ
　ゝはよるひるまいりこもる人多さならんおちくぼに
清水の方そ　十七日まうでのさまならんか又當にもこ
　もれる事みゆ河寶餘十一年初建立延曆廿四年宣府
　界二四至一以田村丸私宅寄附云々
この尼君　前に惟光が父のめのとゝいへるなり
大とこ　法師なり
いり給へれば　源
火とりそむけて　外の方へのけしなり
右近は屏風へだてゝ　夕顔上と屏風へだてゝなり
いかにわびしからん　右近が
おそろしきけも　死骸の
手をとらへて　夕の手を
ことわりなれど　源のの給ふ
とあるもかゝるも　夕顔のはかなくなれるもかやうに
　殘りてなげく人も共にかぎり有命ぞとなり
かへりみのみせられて　源の

いとゞしき朝霧　さらでだに有べきを霧にいとゞ路もすべなく　せんかたなくなり
心もまどひ給ふ樣なり
まつりはらへずほふ　祭祓修法
有しながら　有し時のまゝなるなり
世にながく　命の
うちかはし給へりしがわが紅の御ぞの　源の我御ぞを
たづき　たより
きせて共ねしたまひしが共まゝあるなり
もてなしたすけつゝ　なぐさめて二條院にすみつかす
つゝみの程にて　賀茂河の堤
るなり
御心ちまどひ　絶入んとし給ふなるべし
いさゝか障ありて　御病
かゝる道のそらにて　萬十五「いめのごと道のそらぢ
にわかれする君
めし出て　右近を
右近服色ぶくいとくろうして　服のくろきといふこと本よりな
はふれぬべき　溢を崇神紀にはふれと訓り萬葉に大き
りその主の同じくいたみ給ふ服なれば初參を論ずる
みを島にはふりといふも古今に心をだにもといふも
場にあらず且かくし給ふとてもおもてに出て人目に
みな通ひて身の行方なくなるも心の定なくなれるも
かゝるべきにも侍らず人間に御前に召れなどすれば
水のあふれ出る樣のことにたとへていへり此物語に
これ又論ずることなし又凶服にては公門に不レ入奪
あふれともいへり放埒などいふは古語玄らぬ人のふ
レ情て役せるものは其官舍にては位色を着家にては
といひ出せしものなり
猶服を着るよし令の法なり批把殿は卽天子崩後則今
えいきつくまじき　二條院へ
上も錫衣故に不憚事も有べし他の例に引くは非なる
河の水にて手をあらひて　敏達紀にえぞどもの恐れて
べし又ふくりと肥えたるなどいふは論にもたらぬ説
下二泊瀾中流一而三誓二諸岳一誓レ水而盟といひまた大田
なり
々根子が狼に逢ても手洗口すゝぎてといへり狼に逢
て云々は大田々根子には非じ奏ノ大津父ならん
あやしうみじかゝりける　細　右近にの給ふ
とし頃のたのみ　夕顔上に別

もしながらへ　源の命
いふかひなき　右近
とのゝうちの人あしをそらに　萬葉心そらなり土はふ
めどもと多くよめり伊物にも野を行とも心はそらな
り
あめのあしよりも　契兼盛集「君をおもふ數にもとら
ばをやみなくふりそふ雨の足は物かは文章にも玄げ
き事を雨のあしとも林の如しともいへり
せめてつよく　心をいとせめてなり強てといはんが如
し
大殿も　左大臣
けいめいして　警命なり既にいへり
さまゞのことを　新齋修法などなり
廿よ日　晉なる證によのかな中に有
けがらひいみ給ひしもひとつにみちぬる夜
穢をはゞかり給ふもなり夕の死に源の忌は有べから
ず只穢をいみ給ふといふべし然れども猶命を以てみ
れば忌有べし穢の日數の世の定めおのづから御病の
立給ふ日まで成しかばしか云のみ
おぼつかながらせ　御門
御とのゐ所　桐つぼなり
むかひ奉り　源
我にもあらず　源
九月廿日　九月は晉廿日は訓によむべし
ながめがちに　夕をおぼして
右近を召出て　こは二條院なり
猶いとなん　源の
誠にあまの子なりとも　前の夕の蜑の子なればと云し
をのたまふたとひまことのあまの子にて宿しさだめ
ず賤しき人なり共となり
などてかふかく　右近
いつの程にてかは　逢初給ひてほどもなきに何ばかり
のやんごとなさにもあらぬ御名のりをし給はんかは
と先いひて猶次に心は中なり
あやしう　おもひかけぬ御かよひなれば源ともさだか
には知がたくかたゞくあやしくて夢の如くおもへば
男君の御名かくしもわれとおなじくあやしき樣故に
ぞあらんとはのたまひながらも君は猶かりそめ事故
になのり給はぬならんとうき事に女のおぼしゝとな
り然れば女も實はさる心故につゝみしなり

うつゝともおぼへず　夢のやうに怪しく思はるゝなり
御名かくしも　源夕
あいなかりける　愛無なり
しかへだつる心も　右の語をうけてさばかり云々との
たまふなり
たゞかやうに　孟我身を自由にもたで人まかせにする
ほどにかやうのわざをばならはぬとの心なり
ふるまひ　忍ひありきなり
うちにいさめ　御父帝源氏の御進退聊になきやうにと
なり
つゝむことおほかる　蔡の上の方など
所せうとりなし　少の事をも大さにいひなすなり
うるさき身の　細我身の人もゆるさぬさまをば今こそ
右近は見知べけれとなり
はかなかりし夕　かの夕かほ折つる夕より逢初て後の
事までをかねいふなり
あながちに　前に出来きりにあひ見しをいふ
かゝるべき　萬葉に「神山の山邊までゆふ短ゆふかく
のみからに長くと思ひしとよめるに似たり如是短く
あるべきとての事なりけめなり

打かへしつらうおぼゆる　かの更衣の母君のなげきの
所にも有し語なり
かう長かるまじき　細一段と心に来みて思はれしはか
く長かるまじきゆゑなりけるとなり
なほくはしうかたれ　夕かほの事を
七日〳〵の佛　初七日より盡七日迄四十九日の間忌日
の佛縁をかゝせてもとなり
こゝろのうちにも　忍び給ふことなれば心のうちにも
となり
なき御うしろに　無あとの後ことなり
三位中將と　夕顔の父
いとらうたき物に　其三位中將此女君を
我身のほどの　夕かほをよき縁にもと思ひ給へりしか
どみづから位のあさく時を得ねば心のまゝならぬを
おぼしたるが上に命さへなくなり給ひしとなり
三とせばかり　頭中將三年かよひ給ふ二年めに玉かづ
らの君生れ三年めにうき事有て外へかくれ四年めに
源のかよひ給へり此次のとし玉かづらの四つなるを
筑紫へゐてゆく
こぞの秋のころ　嵐吹そふ秋も來にけりてふ歌の事な

り
かの右大臣殿より　頭中將の北の方四君よりなり
にしの京に御めのと　或説に揭名介が家といへるは誤
なり
住わび給て　伊勢物語に「住わびぬ今はかぎりと山ざ
とに身をかくすべきやどもとめてん
ふたがりたる方に　方違の爲に五條なる家へ出給ふな
り
みあらはされ　源に
おぼしなげく　夕顔の
つれなくのみ　うへはつれなくみさをつくりてといひ
し是なり
御らんぜられ　源にも
さればよと　頭中將の語りつる人にやとおもひ給ひし
故にされば よと思ひ給ふなり
をさなき人まどはしたる　撫子のらうたげなりしとい
ひし
しか　さぞ侍ると云を略したり
女にて　玉かづらなり
さていづこにぞ　源

かの中將にも　頭中將に去らせばかの隱れたるも源の
わざなりとかごと負なんそも世に在人故ならばさて
も有なむをかゝる後にはいよゝいふかひなき恨をう
けんものとなりされどさる事の後のいひわけにも又
女君の靈のおもはん所につけてもてふを左(ト)につけ右(カウ)
につけとはのたまふなり
はぐゝまんに　玉かづらを
そのあらんめのと　夕顔の乳母なり
ことざまに　源のとり給ふとはいはでとなり
おひ出給はん　玉かづらの
はかゞしくあつかふ人なし　夕顔の方にてはたれも
さるべき人なしとて西京にてやしなふとなり
心よりほかに　右近
家ばと　和名抄に鴿伊魯加(イロカ)止本草云頸短灰色也ふつつか
に鳴とは太き聲に鳴なり鳩の聲はげにふとき樣なる
こゑなり
かのありし院に此鳥の鳴しを　源心かの六條わたりの
院などの如き大きにて人少なゝる家には必此はとの
すむ物なるを以てかくいへり先にはかゝで今かくい
ふも又文の一つなり

いとおそろしと　夕の
年はいくつにか　夕がほの
あえか　あえかはあやうげなるをつゞめたる語なり或
人和名に淡路國津名郡平安阿惠加と有を以ていふはわ
ろし國郡郷の字は奈良朝にて佳字に改められし時そ
の本意に違へるぞ多き泥べからす弱浦を明光浦とせ
られしが如し然れば此阿惠加に平安の字を用ひられ
しも本意とはまがたし又惠の假字も意得がたし仍て
是を以て或人あえかの意をおもふはいかにぞや
ながゝるまじくてなりけり　なりけりとは上に思へる
事をおもひ定る辭なり
なくなりにける御めのとの　西京のめのとは右近が母
うせて後のめのとなるべし
三位の君の　夕の父
かの御あたりさらず　夕顔の
おふしたて　右近を
おもひ出れば　かゝる御またしき我に侍るを共に死な
でいかなればかくながらへんとは爲侍るらんと身を
つゝみて申なり
いとしも人に　拾遺「思ふとていとこそ人になれざらめ
まさかならひてぞ見ねは戀しき拾遺今本にかくあり物
語にはわざととりかへていふ事あり然るを或抄に此
文を本として本歌をなほして引たるはいかにぞや夕
にいとなれまいらせて今悲しきとなり
物はかなけに　夕顔
はかなび　ぶりなりめきなり
みづから　源の自なり
すくよか　健
見し人のけぶりを　空のうちくもりたる氣色より讀る
にや時雨がちなる空なるべし九月廿日あまりの空の
けしきなど思べし夕の空の雲はさながらなき人のけ
ぶりの行へにやとながむれば大かたの夕の空さへよ
そならずしたしまるゝとなり新古今哀傷同人歌「見
し人のけぶりとなりし夕より名ぞむつましき鹽がま
の浦
えさしいらへも　右近御返しもえせぬはなげきの切な
ると且さしひかへたる用意をもかぬべし
かやうにて　かゝる所にかやうにて夕のおはせましか
ばとなり源の御有樣院のさまなどをかねいふなり
まさにながき夜　河八月九月正長夜千聲萬聲無二止一

時、白氏文集
うちずし　誦なり
かの伊與の家の　細又詞を轉じて空蟬の事をかき出た
り物がたりの書ざま見つべし
ことに有しやう　秘今はうつせみに
おぼしはてにけるを　源の空のつれなきを
遠くくだり　御音信も絶たるに御わづらひを聞てはな
げくなり此さすがてふは本絶給ふを女の心なれば今
更悔べからねど御わづらひをきゝてはさすがになげ
かるゝなりそれのみならず遠くさへはなれ奉らむが
心ぼそさに云々となり
うけたまはりなやむをことに出てはえこそ　御煩を此
方にてはうけ給はりなやめどもことばにうちいでゝ
はさすがにつゝましさにえこそとはねとなりことに
いでゝはえこそとはねと歌へかけてみるべし
空蟬とはぬをもなどかととはで　源のなやみ給ふをも空蟬
ははゞかりて問たてまつらぬを源も又などかとも音
信給はで程ふるをおもひみだるゝとなり
いかばかりかは　女の心
ます田はまことになん　「ねぬなはのくるしかるらむ君
よりも我そます田のいけるかひなき此上は源のわ
づらひ給ふをそへ下はわがかく定りて君にはうとく
成終に遠く下るべきは生るかひなしとおもふにとれ
り
めづらしきに　源心也
いけるかひなきや　是より源の文の詞なり空蟬の方よ
ります田とあるはいけるかひなきと云事かそれは誰
が云べきにてかあらんずらむ源の方よりこそ仰らる
べけれとなり
いはましことにか　いはんことにかといふを延ていは
ましといふなり
源空蟬の世はうき物と　「空蟬の世はつねなしと志るもの
を秋風寒み忍びつるかもはかなき物とおもひはてし
を又かやうにとはれ侍りて其言のはには哀をかけた
るなり歌より詞にかけてみるべし
はかなしやと　歌より詞にかけたり
わなゝかるゝに　病後のさまなり
猶かのもぬけを　先にぬぎすてたるうちきを取りてか
へりて蟬のもぬけの事をの給ひし事の有しを今もな
ほ忘れずうつせみのこともてよみ給ふをばげにいと

ほしくも又をかしき心ちもするとなり

さすがにいふかひ　細　空蟬も、向にかけはなれてはお　たかやかなる荻に　後撰集秋に大輔がうづまさのかた

もはざるべし　はらなるやしきに侍りしに荻の葉に文をさしてつか

やみなんとおもふなりけり　空蟬の心を察して書るこ　はしける小野宮左大臣「山里の物さびしさは荻のは

とばなり　のなびくごとにぞおもひやらるゝ著くといふは紙び

かのかたつかたは　軒端の荻なり此歳人少將たれとも　ねり又は糸しても枝につくるなりさしてといふは物

なし　かきたる紙を卽むすびて枝にさし侍るなり

あやしやいかに　此所は意得がたし思ふに荻のはやく　思ひあはせば　是上にいふ如く女の世を知たると今と

世をしれるを少將のあやしき事哉と思ひ給たらんを　をおもひ合するをいふなりたゞならば思はゞと有べ

今文かよはさばさればよと思はむもいとほしけれど　し

又かの女も捨がたくおぼせばといふならむなり下に　あいなかりける　愛無なりあいなきはいづこも同じこ

吾なりけりとおもひ合せばと云をみるべし　このみと云はわろしあひ無と書は別なりかなにて心

源ほのかにも軒ばの　頗ひてよみかへり給ふを荻をおば　ことなり

す故といひなしさてかりそめにも契りし事なくばか　少將のなさをりに　小君心して

くおもひわづらふを間給はぬうらみを何しにかかけ　心うしと思へ　軒端荻心絶え給ひしを今更に

て申さんさるほのか成とも契りの有らばこそとなり　ほのめかす　わすれぬものながら君は專ら絶え給ふと

かごとは託言にてうらみなどを人にかけていふなり　おもひをるに又かくおどろかさせ給ふにつけては有

何こにても同じこゝにのみといふ注はわろし下のか　し御契りをすてはて給はぬにやと猶なかばおもひた

こつけと注せるもその速にわろきをかけ負するなり　のまれて物おもひのそひ侍るされどあらはれて色

本の意はかはらねど上下の詞によりかはる樣におも　に出べさならねば下にむすぼるゝといふなるべし且

女はもとよりわすれぬを風につけてもの辭に表らせ　をいふなり

たりさておもては上に風の拂ふまゝに荻のなかばよ　又本へ立歸りて夕顔の事を云なり

り下ばの方は葉の下をれて霜にとぢて有といふなり　四十九日　花十月四五日の程四十九日にあたるべし拾

した荻のなかばゝ　下に忍びて思ひむすぼるゝをそへ　遺に藤原輔相が四十九日をかくし題によめる歌もお

たり　のが玄ゝふくにちりぬる云々後に十與日とも書り五

されば源みて　此女の常のさまなり　六日七八日又廿餘日四五人などみなかなにかゝで字

ほかげに見しかは　碁うちし夜　にて書來しは此文にてはいづこも字音によむなりけ

うちとけで　てを濁りて空せみをいふとすべし荻をさ　り

ゝば人はてふ詞有べからず抄どもはわろし　法花堂　河在二北觀院西一李部王記云天慶六正六藤寛子

さうどき　空蟬卷にきは〳〵とさうどけばとありし事　卒當二三七日一於二叡山東法花堂一修二諷誦一云々

なり　省略せずなり

こりずまに又も　編記者のいふ今夕顔に物ごりしたま　ことそがす　布施の料

へど空蟬軒端をも猶忘れかね給へば又もあだ名はた　さうぞくよりはじめて

ち給ふべしとなりおぼし出るににくからずといひて　になう　似無

古歌を引面白し古今こりずまに又もなき名は立ぬ　御ふみの師にて　源の師範の儒者なり

べし人にくからぬ世にしずまへば萬葉卷十五に「あ　もんざうはかせ　文章博士は文章をつかさどる物なり

はすまにしてといふも只不逢しててふ意といふ人あ　翰林學士是なり文章生の擢學業を經て後博士に任ず

りさる意とは誰もみれど猶まの語助辭とも聞えずこ　るなり

りずまひの略なるべしいせ物語にすまふ力なしと云　願文つくらせ給ふ　源の自作の四十九日の願文を文章

に依に一度こりたる事に猶すまひつよりて物をなす　博士めしてみせあはせらるゝをいふ河清和天皇貞觀

九年十月勸學院南邊更建二一院一號二延命院一乃日主上

自製二願文詞一多不レ載之みづから願文を作事是等の例歟

花　重明親王家室藤原氏四十九日願文後江相公朝綱書レ之見二文粹一生者必滅釋尊未レ免二梅檀之煙一樂盡哀來天人猶逢二五衰之日一此願文の詞なり

あみだ佛にゆづり奉る　諸宗の成佛は自心開發の義なり彌陀一佛超世の悲願は他力本願なれば彼攝取不捨にまかせてゆづるといへる義甚深なり

たゞかくながら　師範のこと加ふべき所なしと申

忍び給へど　源の

なに人ならん　祕博士の心

ばかり　程なり

しのびて　源氏

さうぞくの　前に布施物の裝束の事あり

源　なく〳〵もけふはわがゆふ　本は旅などに行夫の紐をたしかならねば妻のむすびて又逢時解んなどいふ意の歌萬葉に多し然るを是は身まかれる女の爲の布施のさうぞくの紐なれば源氏わがゆふ云々とよみ給へりされば是も今かくゆふ紐をわれもこん世となりての何れの世にか夕顔ととき夫婦となりてあらんと先夫婦の上にていひて且解脱の門に入べき願をも添たるなるべし

源　この程までは　箋四十九日の間は中有にたゞよふ義なり然れば其識の生處六道輪廻いまだ定らず仍造佛造經等の善根を修して善果を得しめんとなり中陰經の說なりと或說にいへり「又云天台等の心は極惡極善の衆生は中有を經ずして直に生處相定る由なり法相一宗の義は善人惡人の差別これなく皆必中有の位をへて生を轉すべきなり

あひなくむねさわぎて　疑へ無の意なり「愛敬無の意なるはあいなくと書疑無の時はあひなくと書べしあいは愛の音なりあひはあへにてこらへさへぎる所なきなり

かのなでしこの　玉かづらなり

夕がほのやどり　五條の宿に

たしかならねど　箋源といふ事を大かたは知たるなり

さゝめきしかば　さゝやきしなり

かこちけれど　源へ媒しつらんと惟光に負せて問ひうらめどなり

けしきなく　さるけしきもなく

なはおなじごと　おなじごとはもとの如すきありきしらぬさま作るなり

やがて　卽

此家あるじ　夕顔の家あるじなり細楊名介の妻はあねなり箋又其次々の一人はつくしに住つき玉かづらに付きて後に一人はのぼりき玉かづらの卷に見えたり

三人（しうり）その子は　花めのとの子

右近はこと人　細まへにいふがごとく右近は別の乳母の子なり

君もいまさらに　源

わか君のうへをだに　入五條へ夕顔の上の死をしらせじとておとづれぬゆゑ聞まく思ふ玉かづらの事をだにえきかぬなり女子（河）をも若君といふなり只年若き心なり

あさましく　惜（オシムシク）

行へなくて過行　五條の人〳〵のおもふをこなたの身にていふ

君は夢にだに　源氏は夕顔を

女房のくだらんにとて　介の往反は常なるを此度は女房具して下らんにはとてぬさ料の物などいとねもごろによくし給ふなり餞をたむけといふといへる說は强たり別にはぬさ袋にぬさその外扇きぬなど多くとり添る事おちくぼなどにも委しそれをこゝにはすべてたむけといひたる物なりさて是は男の方へなり女方へのは大かた委しく書たり此女方に同しさまなる物贈り給ふを文をゆづり合せて書たるのみ

うちく〳〵にも　窓蟬の方へなり

くし扇　寫書　櫛は物のとゞこほりを筋をやる物なり扇はあふと云心なりいづれも祝ひたる心なり

ぬさ　細黃帝四十餘人王子、最末子好二旅行一、死二于路一、誓曰吾爲レ神守二旅客一云々道祖神是也是は他國の事を皇朝にてはいさなぎの命よりおこりてひきもの神など祭る例なりぬさは幣ながら旅路の手向の料に五色の絹をこまかに切て道の神に手向ちらし行なり幣の木は尺ながら五色を用ふ故に萬葉にはおほぬさといひ式にはその寸尺あり

こうちぎもつかはす　前のもぬけを返し給ふなり「死人なるはとめおきさらぬは今は限りとおもひはなる時は衣をかへすてふ時のいみこと有なるべしさらずは返しぬべき事ならず

源 逢までのかたみばかり　さりとも逢事もやとそれまでの形見にとゞめしうす衣かひなき泪に袖朽るまでなりけるよとなり

興風集に女の衣をとりてかへりて返すとて「あふまでのかたみとてこそとゞめけめ誠にうかぶもくづなりけり」

後撰戀四 つらくなりにける男のもとに今はとてさうぞくなど返しつかはすとて平なかきが女「今はとて梢にかゝる空蟬のからをみんとは思はざりしを返し源巨城「わすらるゝ身をうつせみのから衣かへすはつらき心なりけりこれらのこゝろにてこゝは書しならん

こまやかなることゞも　記者

御つかひかへりにけれど　伊與介へのおもてむきの使は返りたるなり

小君して　是は内々の返事なり

蟬のはも　十月更衣の日にはあらねど今は冬ちかくなりてけの衣などは歌のとはことなればかくよめるにや

思へどあやしう　篇思へども〳〵なり深く思ふ時の詞なり

冬たつ日　十月一日をいふ

過にしもけふわかるゝも　此秋のくれとは九月のうちの立冬の日をいへり然ば秋のくれといへるわづらひなし齋宮女御集に「過にしもいま行すゑもふた道になべてわかれのなき世なりせば此歌をとりていまよみたるやうにかける事物語の常にていせ物語など專ら其かなり

なほかく　下は記者の語

人しれぬことは　空蟬の事も夕顔の事も皆人知れぬ事なり

あながちにかくろへ忍び給ひしもいとほしくて　細夕顔の上の事空蟬の事などなり皆此事をば知るすまじくおもひたれどもとなりかやうの事は源もあながちに知ひて隱し忍び給ひしかば源のためいとほしくてみなもらしかゝざりしをとなり帚木卷にかゝるすき事どもを末の世にも云つたへてかろびたる名をやながさんと忍び給ひけるかくろへ事をさへといへる其尾なるべし

などみかどの御子ならんからに　細源氏は桐壺の帝の

御子なるが善事計をことえりして知るすは私あるそしりも侍るべしされば有りのまゝにしるすとなり

ものし給ければなん　かくよからぬ事をも知るしつといふこゝろを略けり

あまりものいひさがなきつみさりどころなく　通こゝにしも何にほふらむ女郎花人の物いひさがにくき世にあまりかやうに物いひさがなくかきつらねてつみさりのがれんとこころなしと作者のことわりなり是も帚木卷にかくろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさがなさよと云し詞に相應ずるなりいかさま此一段は帚木の發端を結する語と見えたりかやうにかけて見侍れば心甚深なる著か

源氏物語新釋

若紫

巻の名は「手につみていつしかと見ん紫のねにかよひたる野べの若草」ふ歌により且藤つぼを戀給ひそのゆかりによりて兵部卿のみこの御むすめも紫のうへといひたり源十七の三月より冬までの事見ゆ

むらさきをわかむらさきてふ事紫はわかき根を用ゆる物ならねば理きこえがたしおもふにいせ物がたりに春日野の若紫のすり衣とよみしは女をたとへて若草といふべきを紫草にとりかへて若むらさきといへるとみゆ然れば此巻の名はそのいせものがたりのことばを何心なく用ひて若むらさきと名づけしのみ成べしかのかいまみの事をうつし此巻に書しにてもしるきなり

わらはやみ　俗にいふおこりなり

かぢなどまゐらせ給へど　加持は僧尼令に持咒と云て陀羅尼を唱ふれば僧のする事なりまじなひは厭符などさまゝの巫術有にやしるしなくて　驗なり

なにがし寺　鞍馬寺をいふこと下に見ゆ

おこなひ人　行人

しゝこらかし　上のしは爲なり次のしこらしは物の凝かたまるなりうたてはせんかたなきなり右のごとくなま〳〵のまじなひなど爲しこらかしては瘧の忘れがたくていかにともせんかたなくなるものなりはやく落るやうにし給へとなり

とくこそ心みさせ　早く加持してこゝろみ給へとなり

山の櫻は　契家持集「故郷の花は散つゝ三吉野の山のはまたさかりなり

所せき御身　何にても所の狹きを云をうつして貴人の

・かゝるありきもかろ〳〵しく成がたきを云

岩の中　河古今「いかならん巖の中にすまばかは世のうき事のきこえざらなん」河佛弟子須菩提住二西天之石窟一

あなかしこや　おはしましたるをあな恐多しと云なり

一目めし侍りしにや　めし侍りし御方など云を略せり

げんがた　細現方今は後世のつとめのみにて驗の方の修法忘れたりとなり

一いかでかう　如是

すかせたてまつる　契皇極紀云以水送飯うつぼ物語に御ゑいみじう　繪に能似たる哉との給ふをうけていへ

松のはをすきてともいへればのみくふ事をいへり然れば笥などを作りてのませ奉る成べし

りすまにて繪をかき給ひし事のもとなり

たかき處　聖の室の邊

こゝかしこ　四十九院ありしなり

つゞら折　枕草子近くて遠き物くらまのつゞら折とも

いひて九折の字を訓なり今も七まがりといへり

とひ給へば　源の

なにがしの僧都の　紫のをぢの僧なり

このふたとせこもり　三年禁足の由末にもみえたり

心はづかしき　源のゝたまふ

やつしけるを　御從者など少きなり

きよげなるわらは　細女童なるべし

あか奉る　閼閼は佛に奉る水をいふ

君はおこなひし給つゝ　入眞言などを受けて誦し給ふなるべし

とかう　左右

けぶりわたれる　霞たるさまなり

是はいとあさく　さふらふ人

人の國などに　こゝは幾内の外の國をいふ別記あり

なにがしの僧都の　紫のをぢの僧なり

このふたとせこもり　三年禁足の由末にもみえたり

心はづかしき　源のゝたまふ

やつしけるを　御從者など少きなり

きよげなるわらは　細女童なるべし

あか奉る　閼閼は佛に奉る水をいふ

君はおこなひし給つゝ　入眞言などを受けて誦し給ふなるべし

とかう　左右

けぶりわたれる　霞たるさまなり

是はいとあさく　さふらふ人

人の國などに　こゝは幾内の外の國をいふ別記あり

かのくにのさきのかみ　播磨の前の守にて明石の入道といふ是なり

しほちの　新發

むすめかしづき　明石の上なり

いといたしかし　餘りにかしづくを傍痛といふ意なり

世のひがもの　世中に勝れてひが物ぞといふなりされど此入道をひがものといふはおもふにこは源家の大臣の子なりけるを時の他姓の執政のわが儘して源家はかげもなき樣なるを口をしく思ひて時にへつらはねば内のまじらひも心ゆかで中將を捨て國守とは成

しならむその上に娘のよろしきをみていかで内にもさいつころ　先つ頃なり
奉らむとおもへど家の内もとまず且いきほひなければ　ありさま見給へる　明石の入道のかたへ
ば奉るべきよしもなくなど有故に國守にて内々ゆたところえぬ　人に用ひられぬを言或説は誤なり
かに成て娘をかしづきたて末のすぐせにまかせんなそこらはるかに　幾許遙
どの意なり　　しめて　領

中將を捨て　細三代實録に山陰中納言中將を辭して備前守に任じ其外佐理卿の請て大貳となる河實方卿中將を辭して陸奥守になれるなど類多し

つかさなれど　播磨の國司をいふ　　さはいへど　國官にもあなづれしといへどなり
國のつかさにてしおきける事なれば　國の司は富るよし物にかたぐ〳〵に見ゆ

かのくにの人にもすこしあなづられて　京にて所得ぬ　　になくしたりけり　似るものなくなり
人なれば聞つたへて國官どもあなづる意有し成べし　　のちの世のつとめも　さる心高くへつらはぬ心なれば
おくまりたる　おくめきたると云に同じ萬葉におきま　　法師の方のつとめはいとよく侍るべし心きたなき法
けておきゑへてなどよめる是なり　　師の有しをもついでにいふにや

さる海づらに　いせ物語に海頭と書たり　　けしうはあらず　あやしうはあらずなり

わかきさいし　妻子　　心ばせなど侍るなり　こゝろばせは意の字を訓なれし
にて知べし諸説は惡し古今にも「いさゝめに時待間
にぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつゝとよみたり

心をやれるすまひになん　妻子の爲に思やりある心に
いふ説はわろし心をやる思をやるなどいふは昔は思　代々のくにの守　細諸國の守一任四年にてかはる故に
ひをやり過して思ひのなからしめんとするなり依て　代々とは云なりさやうの任にて來たる人の心をかく
上には妻子わぶべければと書て且心をやる云々と書　るものあれどうけ引かずとなり
しは心なぐさみにもとてと云事なり

わが身の　入道の女に當に云

ひとりにこそあれ　唯一人の女にてわが思ふ筋をたてなさけなき　人々詞細今まで國の守のけさうするをも
んと願ふ故に云　　云のがれけれども後には愼なき人などの此國の守に
海龍王　只海に入様と云によりてしかいふのみ海龍王　成て入道が心おきてをもやぶりて迎へとられんかし
は沙羅羅龍王なり婆羅羅譯して海なりいはひとい　となり
つきと同し詞なりいつきむすめは萬九に「きぬあや　なりゆかば　かはり云々
の中につゝめるいはひ子といふ　　君何心ありて　源
心だかくくるしやとてわらふ　入道のおもひあがりし　そこのみるめも　「あまの住そこのみるめもはゞかしく
をそしるなり　　いそにおひたるわかめをこそつめ此歌例の作りたるものなり後撰「浪わけてみるよしもかもわたつみのそこのみるめもゝみぢちるやと
かくいふは　良清が事を記者のいふ
藏人よりことしかうぶり得たる　正月五日の叙位に六位の藏人の巡爵とて從五位下に叙せらるゝをかうぶり得たるといふ　　たゞならずおほしたり　御心にかゝりて
いとすきたる　御供の人々良清は好者なれば云々といひあへるなり　　かやうにても　御供の人々の意
きてたゝずみ　人々の言さる心有てたゝずみよるなら　　もてひがみたる　裘上六條御息所などのやんごとなき
んとなり　　方にはうとくて夕がほのかた樣のやつれたるに心入給ふを云ならん
ゐなかびたらん　明石上を云　　おこらせ給はず　病
はゝこそゆゑ有べけれ　細こゝより藏人が詞弄松風卷　　御ものゝけなど　細夕顔の卷に有し事をふくみてとる
に大井の古郷につけて兼明親王のと見ゆしかれば彼　　成べし
御女なるべし　　かのこしばがきのもとに　源
ひとぐはかへし給て　忍び給ふゆゑ聖のかたへかへ

すなり

たゞこのにしおもて　僧都の坊のさま

尼なりけり　紫上の祖母

いとなやましげに　病者のさまなり

あてにやせたれど　けだかきなり

まみのほど　目ざしを云

そがれたる　むかしの尼は髮の末をそぎてみなそる事

なしおくみなかくのごとし

きよげなるおとなふたり　一人は少納言とて紫のめのとなり

十ばかり　紫上

白ききぬ山吹　おもてこき山吹うら黄なるをいふ成べし

おひさき見えて　生行先よからんとみゆるなり

あふぎをひろげたる樣　はなち髮のすゑなり

すりなして　白なさて貌をすりたるさまなり

おぼえたる所あれば　面樣似かよひたるなり

すゝめの子を　紫花物語に上東門院の上童にいぬきなれきなどありきは君の略なり

いぬきがにがしつる　あそびがたきの童の名なり

ふせごのうちに　鳥籠をわざとてうせん所にもあらずはたいときびはなるひゝなれば香籠にこめてやしなひたりし成べきを今は籠ばかりに生長せしをいふなり或說はわろし

いと口をしと思へり　紫

このゐたるおとな　少納言なり

例の心なし　此童紅葉賀の卷にてもひゝなの殿をそこなひし事有り

何かたへかまかり　雀の子

此このうしろみ　紫の上の

すゝめ去たひ給ふほどよ　さる事去たふも年のほどこそあれ今は少しものゝ心もつき給ふべきに吾此老てほどなからん後はいかゞはせんの心露もなき樣なるをかくの給ふ成べし次に此事くはしく尼ののたまふをむかへみるべし

聞ゆるを　いさめきこゆるなり

ついゐたり　尼の前に

まゆのあたりうちけむり　眉のにほひをいふ

かんざし　面さし顏つき目ざし目つきてふの同し事なるを思ふにこのかんざしは髮つきをいふなり或說はつたなし

ねびゆかむさま　年たけ行を云既に出たり

心をつくし聞ゆる人に　藤つぼ

まもらるゝなりけりと　目のはなたれぬなり

いとはかなう　餘りにいはけなきを云

こひめ君は　細紫上の母なり

とのにおくれ　細按察大納言

すゞろに　心も心ならずあるをいふから文に座の字を

よめるも此意なり

つや〳〵とめでたうみゆ　宮の光りあるさまを云

尼君おひたゝむ　生立て有べき方もしらぬわが子を見すてん事の覺束なきに命の終らんにも終らん樣なき心ちするといへり○ありかは在所にて爰は末の手著をいふ○おくらすは古今別に「かぎりなき雲のゐよるにわかるとも人を心におくらさんやはと出たる語なり露はわか草より出て消んといはむ料にて命をたとへたり○そらなきとは心まどひして物のさまも去られぬをいふ

少納言はつくさの　わか草の生行末を見さだめんまでは御こゝろゞよう立りてながらへ給ふべきにこそあれいかで消んなどはのたまふぞといさむるなり○わかくさ初草は同じことなればいせ物がたりにも互によみたり

けふしもはしに　常にはさもあらぬを源氏の此山におはす時しもなりあやにくにと云なり

見奉り給はにや　此次に源氏を申入まいらせて尼君にも見奉り給ふべきやとなり

とのにおくれ　僧都

すゞろに　源へ僧都の

つや〳〵とめでたうみゆ　源

尼君おひたゝむ　紫の上をさす

ん事の覺束なきに命の終らんにも終らん樣なき心ち　此すき物ども　既に有し右馬頭など

するといへり○ありかは在所にて　雀の門にうたき人のすむなど

ふ○おくらすは古今別に「かぎりなき雲のゐよるに　さるまじき人をも

わかるとも人を心におくらさんやはと出たる語なり　かの人の　細藤壺

露はわか草より出て消んといはむ料にて命をたとへたり○そらなきとは心まどひして物のさまも去られぬをいふ　大德の房に

はつくさの　わか草の生行末を見さだめんまでは御こゝろゞよう立りてながらへ給ふべきにこそあれいか

よぎり　萬葉によぎ道に曲道と書しを以てみるに道を直にゆかでめぐりよぎたるより轉せるなり爰はものの

のついでに立より給ひし意にていふ事ならむ

おどろきながら　細驚きつゝやがて參るべきを云ふなり

よぎりおはし　是へ源の
うれはしく　こはたゞうれへにおもふてふにはあらず
　せんかたなく心うくおもふをいふ
おもふ給へとなん　えみづからは參らずと殘したり
草の御むしろも　たゞかりの御やどをいふのみ
十よ日　宏ゆうとよむべし源の御こたへ
はしたなかるべき　せんかたなきなり
いまそなたにもと　僧都方へ只今に申入べきことな
　り
かくこもれるほどの　僧都の
おなじ柴の庵なれど　いつにても水の清く涼しげなる
　ことをいふ
かのまだみぬ　上に源氏の事をほめしなり
いぶかしくて　いかなる人かきかまほしくて
げにいと心ことに　右の物がたりのごとく
木草をも　こゝに木艸と書たるは語の例に違たれば語
　の例によるに草木なるべしされど木草と書たればき
　くさとよみても有べし
まゐりたり　火をともしたるを云
名香
めうかう　式に此香の方あり

わが御罪のほど　いづれの罪はなれど中に藤壺をおぼ
　す事の自らたいぐしきなるべし
あぢきなきことに　好色の事
かうやうなるすまひも　源も遁世の志なり
ひるの面影　かい間見し若草の
こゝにものし玉ふは　源の間なり
夢を見給しかな　いせ物がたりいひ出んたよりなさに
　まことならぬ夢がたりをすといふ類なり
けふなん思ひあはせ　源のけふこれへおはしたるにつ
　けて彼夢を思合玉ふ事あるとなり
うちわらひて　僧都
尋させ給ても御心おとり　僧都は尼君の事を源の尋給
　ふと思ひてこたふるなり
按察大納言　紫の祖父
なにがしのいもうと　何がしは僧都自らをさす
その北方　尼公
かく京にもまかでねば　僧都の禁足するを云
こもりて物し侍る　尼君の
かの大納言の　源の問紫の上を尼君の子とおぼしてお
　しはかりにの玉ふなり

まめやかに　源の實に思ふ事有ての給ふとなり
むすめたゞひとり　僧都は紫のこととは知玉はねば尼
　君のむすめ紫上の御母の事もて答しなり
すぎ侍りにし　大納言身まかりしなり
いかなる人のしわざにか　中立をいふ
兵部卿の宮　をとめの卷に式部卿宮紫の父
やすからぬ事　そねみふかゝりしなり
さらば　源心
その子なりけり　かの女子は
みこの御すぢにて　兵部卿の筋なれば藤つぼにもゆか
　り有り
かの人にも　藤つぼに假かよひたるなりよりて假かよ
　ひ玉ふよと先に假奉けると見しをおぼし合せ玉ふな
　り
人のはど　人がらとなり
さかしら　契萬葉十六に賢良進情情田などをよめりさ
　かしだてといふに同じこゝも惣て中々のさかしぶり
　なくて敬へ立べき物とおぼすなり
おふしたて　生立
いとあはれに　源詞

それはとゞめ給かたみも　大納言のむすめの子はなき
　かとなり
をさなかりつる　紫は
なくなり侍るほどに　まへの詞にうせて此十餘年にや
　成侍らんとあり其頃紫上の生れをいふなり
それにつけても物おもひの　尼君此紫の生さきの心も
　となき物思ひの事上に出
よはひのするに　尼君老の
さればよと　源心
きこえ給てんや　尼君へ
行かゝづらふ　葵上の方を云細或說思ふ心ありてとよ
　みきりて獨住にてなんと云にかけて見るべきなり
まだにげなきほどゝ　いひなづけと俗にいふほどの事
　なり花此姫君十四歳斗の事なれば似合ぬ樣によのつ
　ねのいもせの思ひをなして辭退やし玉はんずらん只
　今はその名斗いひなづけなどの樣にあらんと先をく
　みて宣ふなり
いとうれしかるべき　僧都の答
女は人にもてなされて　凡の人の情はしれど僧なれば
　女子の情をくはしうは得おもひとり侍らずとなり

かのおば　紫の上の祖母を云父母のその父母を孫の方おばへなき　内の女房
より大母と云を略しておばとはいへり父母の兄弟姉　聞しらぬやうにやとて　細きゝしらぬやうにてはいか
妹をは姪の方より小母と云を略してをばと云は別な　がぞとて少納言の出るなり
りかな遠へり　源　佛の御しるべは　法華經に從冥入於冥永不聞佛名此文
すくよかにいひて　にほひなく健なるを云　によりて且僧の家尼君もおはせば所につけての給ふ
ものこはき　僧都のさまなり　なり
そや　初夜　うち出ん　少納言
わかき御心　源なり　御ゑるべにかは　佛の御ゑるべとの給ひしをうけて
あみだ佛　是より僧都詞　源歌　げにうちつけ　源詞
ものし給ふ　安置なり　はつくさの　紫上をそへたり先の垣間見の時尼君のお
瀧のよどみも　瀧の淀には常は音のすくなきを雨に風　ひたらんありかも知らぬ若くさをおくらす露ぞ消ん
さへ吹ば淀も水増して音高きといふか　空なきとよみ給ひしを源のきゝ給ひてよみたまふな
すゞろなる人も　物に心をいれぬ御とものわかうどな　り
どをいふ　さらに　此女の申詞なり
まして　源氏はなり　ゑろしめしたり　僧都の御物語有しこと知て云ふなり
すゞのけうそくに　枕草子のすゞのけうそくにあたり　おのづから　源
てなりたるこそ心にくけれ　いりて聞ゆ　少納言尼君に
うちにも人のねぬ　尼君のかたなり　あないまめかし　尼君
あではかなりと　よろづ心高うていやしびぬなり　・この君や　紫
あふぎを　源の人をめすなり　かのわか草を　垣間見の事を云り給はねばなり

久しう　御返しの
まくらゆふ　草の枕をゆふなりはつ草の御歌をとかう　の給ふも又おぼえずかく御物がたり聞ゆるもげに佛
いらへむよしもなければたゞ旅ねの事にとりなして　の御しるべならんとおもへば淺くとていかゞ思ひ侍
こよひ計の御旅ねの露けさは吾山住の苦の袂にはく　らむとなり
らべくるしき事と讀給へり　あはれにうけ給はる　紫の事を源のゝ給ふ
かうやうの　源　かのすぎ給にけん　源の我を紫の上の御母のかはりに
まめ〳〵しう　實に申べき事あるとの給ふなり　もおぼしめしなせるなり
きこえさすべき事なん　侍ふてふ詞を略せり　おぼしないてんや　おぼしなしてんや
ひが事　此をさなき人の事を　むつまじかるべき　細桐壺の更衣におくれ給ふをいふ
はしたなくも　細爰にさふらふ人々のいふなり　おなじさまに　源も紫も早く母におくれたればなりだ
げにわかやかなる　尼君　ぐひになさせ給へと宣ふなり
まめやかに　源の實にの給ふに對面なくは恐有しなり　いとうれしう　尼君
うちつけに　源　きこしめしひがめたる　よきほどのとしとかなり
あさはかなりと　あさくはかなき心ざしをいふ　たのもし人にする人　紫上なり
ついでなれば　事の序にて不意なる樣の事なればなり　いふかひなき　をさなきなり
心にはさも　我御心にはあさはかにもおぼえずとなり　御らんじゆるさるゝ　少しいふだしきなどはさても有
はとけはおのづから　神ぞしるらんなどいふに同じ　なむを
おとなゝしう　尼君のさまの　とどめられざりける　とかくひが耳にてぞとおもはる
げに思ひ給へ　細尼君詞　るをいふ
ついでに　おもひよらぬ時のついでながらにかくまで　みなおほづかなからず　明らかに殘りなく
ことなる心のほどを　わがおもふ常に人戀るとは異に

て其いとけなきほどより教そだてんとおもふをさは　よしを幽にそへたりとおぼゆ
おもはで一わたりの女戀るさまに心せまくなおもひ　にしきをしける　元輔集「花のかげに錦をさける今夜
うじ給ふなといふこゝろを短かく云たるなり　哉たゝまくをしき庭に見えつゝ唐詩に春山無伴云々
　ことに下に見麋鹿遊といへるなどをおもひて書るか
聞給へど　源の　似氣　しかのたゝずみありく　俊明按にうつほ物語五梅の花
尼君ハ
いとにげなき　源詞　笠の卷に織部尉きよすみ山にさわぐ鹿「もえわたる
よしかう　草木もあらぬ春べには山へにいそく鹿ぞすむらん
きこえそめ侍りぬれば　まだうけ給らねどなり　前に尼屈りて室の外にもまかで
いとたのもしう　いはでおもひしよりはかくうち出て　聖うごきもえせねど　ずといひしにむかへて書り然れは僧都の坊へ聖參た
は終にいひ侍らんものとたのもしきとなり　るなるべし
おしたて　隔の屏風ィ間のさうじ
法華三昧　三昧此には云二正受一又云二正定一法華懺法は　かれたるこゑのいといたうすきひがめるも　齒多く落
知者大師所行法門也是を曉の行事にするなり　ぬれば聲のすきて且ひがめるなり
吹まよふ　源　ぐうつきて　功つもりたるを云
僧都
さしくみに　さしぐみにはさし付にといふ意なり委は　御むかへの　京より
別記にありさて君は此瀧の音などを聞てさしつけに　僧都世にみえぬさまは　今朝は聖の室へおはしても猶
袖ぬらし給ふと承れどなれて住身はさも覺えねば耳　僧都のとりまかなひ給ふらん
なれたる故にや侍らんとこたへたりされどかの紫の　ことしばかりのちかひ　禁足の誓なり
事をの給へど僧都も尼君も物ごはきこたへを慈給ふ　御おくりにも　誓ゆゑに御送りせぬ名ごりは中々御送
心より出たる光君の歌なれば僧都の返歌も何とやら　りして禁をおかせしよりも心すましがたくあらんと
んかのめ俄さての給ふをば尼君の心にうけ引侍らぬ　云なり

山水に心もとまり　源　濟國より金剛子の渡りたることは元興寺資財帳第九
細
宮人に　此山ざくらのさま宮人に先いきてかたりて直　云喜多迦子金剛子此等百濟國所獻也云々但聖德天子
僧都
にちらぬ間に又も來てみんとなり　の數珠の事は未だ見出し侍らずさも有ぬべくよりき
うどんげの　或云天台云優曇華三千年一現則金輪王出　たる事をばつくり事にいひなす常の事なり
云云曇華は輪王出世之瑞也故號靈瑞華　さうとく　聖德
み山ざくらに　下に源の御有さまを何事にもめうつる　こんごうじ　金剛子
まじかりけるといへるに同じ　ずゞ　數珠
時ありてひとたびひらく　右の輪王出世の時開を云　すきたる袋にいれて　萬葉にありはり袋は針袋なりす
かたかなる物をとの給ふ　聖の像りに過きたるをの給　り袋は火打袋なり又は色してすれるをいふも有べし
ふなり　のすき袋は網のごとくすきたるをいふなり或注には
ひゑり　加持の聖なり　萬葉を心得ちがひてこゝを誤れり
ひじり
おく山の松のとぼそを　萬十一「足引の山櫻戸を明暮　五葉の枝につけて　或說は藥師佛の右の御手に紺瑠璃
てわがまつ人を誰かとゞむる又「奥山の槇のいたど　の壺を持せしめ給ふ僧都の贈り物此壺に藥を入れて
を押ひらきしゑや出こね後は何せん此歌どもにて此　奉るも醫王の藥におもひよせたるならん鞍馬の僧正
物がたりの歌作れり花のかほとは後撰拾遺によめり　谷に藥師佛おはせばより所有か
花のかは　源の御かたちを添　かの聞え給ひし事　紫の事を尼公へ申さるゝなり
うちなきて　感歎なり　さなん　さある事なりと僧都も同じさまに云なり
とこたてまつる　聖の何心もなく獨ゐ鉢奉るを見て便あ　夕まぐれ　源
尼
りし僧都も色々と奉り給ふなり獨鉢は行ひ人の常に　たちぞわづらふ　立去がたきなり
もつ物なるを守りなどの爲に人にも奉るなり或說百　まことにや　おもては花の上にて下には霞めほのめか

し給ふ事のまことかかりそめ事か年へて後に見參らせんといへり右に御心ざしあらば今四五年を過して
と有し意なり
うちすて　とりつくろはぬなり
おほい殿より　葵父
おくらさせ　上にことわりゝ
若がくれの　若陰の意なり
とよらのてらの　山寺故にこれをうたふいつもの事なりかつらぎの寺のまへなるやとよらの寺のにしなるやゑのは井に白玉しづくやましら玉しづくやれいのひぢりきふくすいしん　いつも御供にまゐる人なるべし
僧都さんを　琴は陳陽樂書云或謂伏羲作或謂神農作或謂帝俊使夔龍作製長三尺六寸六分象朞之日廣六寸象六合絃有五象五行腰廣四寸象四時前廣後狹象尊卑上圓下方象天地云云孟白虎通云琴以禁制淫邪正人心也
さうの笛　笙
山の鳥もおどろかし　列子瓠巴鼓琴鳥舞而魚躍
遊矣
げににくからす　是を一本にけにくからずあれどて前にうけたる事なくてはかなはずよりて思ふにけの下のには衍字にて氣惡からずと有りしならん然らば望にそむかぬを云ふなるべし
すゑの世々うまれ給ひ　花或說に上の僧都の歌に光源氏を優曇華にたとへて輪王の出世によせたり故に又僧都の此の語あるなりと云り
このわか君　紫
宮の御ありさま　兵部卿
さらばかの人の　尼公の女房詞
あざり　或云阿闍梨七高山阿闍梨近江國（比叡山比良山）美濃國（伊吹山）山城（愛宕）攝津國（神峯寺）大和國（金峯山葛城山）毎年給穀五十斛春秋各四十九日於件山修藥師悔過祈天下五穀也承和五年
いとうおとろへにけり　御門の御心
おほやけに　御門のきこしめさぬなり
大殿　左大臣
ひきいりて　ゑりにのり給ふなり
殿にも　葵のかた
ゑにかきたるもの　うごき給ぬさまなり
うるはしうて　紀には善の字をうるはしといひてよろづ調てよろしきなり爰は葵のかたしろのごとくよそほひてのみ居給ふをいへり
おもはずに　かくは有まじ物ぞといふをいへり源のゝ給ふなり
よのつねなる　夫婦のごとくなるなり
めづらしからぬ　常にむつましからねばなり
とはぬはつらき　六帖に「こともつきほどはなけれどいかはもとはぬはつらき物にざりける此外にもあり
源詞まれ〳〵はあさましの御ことや　細たま〳〵にしての給ひ出る語のかやうなるよとなり
とはぬなどいふさはゝ　忍びて通ひなどする中ならばと云なり大方にかよひなどする中にこそあれむかひめのゝ給ふ事かはとなり
よとともに　世と共にて當々なり
いのちだにとて　古今「えぞ去らぬ今心見よ命あらば我やわするゝ人やとはぬと
女君　葵
聞えわずらひ　源のいひ煩ふなり
源ねぶたげに　是は源のいひわづらひつるをなまはらだたれ給へばやう〳〵と葵の入給ひて後に源のしたし
くかたらひ給はぬなり
かのわか草の　紫
思へりしも　尼公の心を察して
いとあてに　あては人がらの高く和らびたるなり
なまめい　色めくなり
にほひやかに　艶なるなり
紫の上は何として伯母の藤つぼに似給へるごとくなり
一族ぞうにおぼえ　一族を俗語にていへるならむ
ひとつさいばら　兵部卿の宮の御兄弟あまたおはせど藤壺とは一つ后腹におはせりさる故に兵部卿の御娘の紫上は藤壺に似給ふにやとなり
もてはなれたりし　文の詞
おも影は　紫を山櫻にたとへてさてわが心は皆そこにとゞめ置て歸りつれど君が面かげははた我身をしもはなれずとなり
よの間の風　「朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに
はかなうおしつゝみ給へる　花鳥の說まことなるべし雅亮裝束抄に女御參り聟取などの文は結びて裏とあ

るなり

さだすぎたる　定なり人のなりさだまりたる三十の年

ごろなりそれ過るは定過るなり凡て公のさだの庭な

どいふも事を定る所をいへり後世沙汰の字を用ゐる

は誤れり

めもあやに　見るめも文にうつくしき事なり又心に人

たちて思ふ事にも此語は云り

ゆく手の御事　是より文の詞なり

ふりはへさせ　一方へ振延て問ふ意なればわざともい

ふ事に成ぬ

聞えさせん　御こたへを

またなにはつをだに　紫は

つゞけ　書も云々

あらしふく　ふりはへさせ給ふは御志有には似たれど

も風吹花のちらぬ間に心とめ給ふからはいと苦ばし

斗の事にて末のうしろめたしとなり

憚光

さもかゝらぬくまなき　「おもへども猶うとまれぬ春

霞かゝらぬ山のあらしとおもへばてふ詞を取てなり

まほならねども　正面ならぬとなり

せうそこ　音づれなり

おほかたの御ありさま　君の常にあだならぬなどを語

るは媒の有様なり

つき〳〵しう　つきなきとはその事に相著ぬを云を反

してみるべし

いとわりなき　幼くて何とせんも理りなきほどらひな

るをとなり下にも此幼人をかくわりなきよはひ過侍

りて救まへさせ給へと尼君のいへるあり

ゆゝしうなん　おもひつゝしまるゝを云本は齋〳〵し

きてふ語なるを斯樣の所に轉じて云ふなり

いとねもごろ　ねもごろと書つらんをねむごろとよみ

あやまれるならんか

かの御はなちがきなん　上のなにはづをだにもと有し

を云

源あさか山　上になにはづをだにといひしによりてあさ

か山かげさへみゆる山の井のてふ歌をとりいだした

り○かけはなるらんとは影を懸にいひうつしていか

で我にかけ合給はぬにやといふなり萬葉に玉かづら

面影とつゞけたるは懸を影に轉したり此類なり

尼くみそめて　六帖「くやしくぞ汲そめてける淺ければ

袖のみぬるゝ山の井の水此歌を本歌にてよめりさて

源のなどかけはなるらんといひ給ふにこたへて君が

心の淺きならば影をみすべき物かはといふなり

同じ事を　承引せぬよしを

このわづらひ給こと　少納言の詞

京のとのに　尼君の夫あせち大納言の家

心もとなくおぼす　京の殿よりといふを源の

まかで給へり　藤つぼ三條の宮へ

王命婦　藤つぼの女房

たばかりけん　蘆計測方便日本紀はかるに同じ

いとわりなくて　いせ物語にわれてあはんといふに同

じくて理なく強たる事なり

うつゝとはおぼえぬ　あまりに深きおもひある故に

宮も　藤つぼ花是より先に源の藤つぼへちかづき參り

玉へる事此語に見えたり

なほ人ににさせ給はぬを　いみじく有まじき事とうち

とけぬけしきだにまた〳〵人よりふかきを云

なのめなる　たらはぬを云

くらぶの山にやどりも　名に付て常くらき所の如くを

さなく歌によみ來れるによりて書たり別記に有

源みても又　かく逢みるとても又逢ことのかたければた

だ此まゝに命も盡ねとなり

やがて　卽なり

藤世がたりに　藤つぼ返歌の給ふごとく夢にまぎれて命

は失ぬともなきあとの世がたりにならんことはのが

れじとなり

ゆめにならでも　死てもてふ意なり

御なほしなどは　直衣などもそことなくぬぎ捨たりし

を命婦のとりまかなひてさせて出し參らせしなり源

は別の悲みにうつゝともなきさまを考らせて云なる

べし

とのにおはして　二條のゐん

なきねにふしくらし　六帖「夕されば君をまつちの山

鳥のなく〳〵ぬるをたちもきかなんこれを引べきか

或說に上東門院の歌を引しはこの物がたり書しより

後の歌なり

御文なども　源より後朝の

ほれて　おぼれてなり

又いかなるにかと　先の御煩の如く

御心うごかせ　御門の御心なり

おそろし　源の思ひ給ふなり